

建築と社会

Architecture and Society



2026年度 年間特集テーマ「再生」
特集 「再生_regeneration」
のデザイン

2026 04
vol.107 No.1249
日本建築協会

未来に残せる仕事を!

ドローンによる建物(壁・屋根等)・橋梁等(水管橋)やイベント(運動会・催事等)の撮影、
赤外線カメラによる調査のご依頼お待ちしております。

鴻池新田会所と旧河澄家を指定管理者として文化財管理をしております。ぜひ、お越しください!



- ドローン撮影・ドローン調査
- 特殊建築物・設備定期調査
- 指定管理者
- 消防設備点検・防災点検
- ボイラ・電気設備・空調設備・給排水等保守管理
- ねずみ・こん虫防除
- 空気環境測定
- 清掃管理業務
- 貯水槽清掃
- 警備業務(施設警備・機械警備)
- 総合案内(受付・電話交換)



建物のことならアスウェルへ!

株式会社 アスウェル

〒583-0876

大阪府羽曳野市伊賀 5-1-4

TEL:072-939-7861(代)

FAX:072-952-4304

<http://www.asuwell.co.jp>

mail@asuwell.co.jp



(株)アスウェル



鴻池新田会所



旧河澄家



日本建築協会 事務局からのご案内



U-35委員会の協力により、執務ブース・会議机・
窓際カウンターなどを一新しました(詳しくは
『建築と社会』2025年6月号44-51頁に掲載)

会員の皆様には、大川が一望できる窓辺の
ワークスペースを、タッチダウンオフィス
としてご活用いただけます。

【利用できる方】一般社団法人日本建築協会の正会員の方

【利用可能時間】10:00~17:00(但し、イベント、会議実施中はご使用いただけません。

利用状況は協会のInstagramにアップされていますが、
電話で確認することをお勧めします。☎06-6946-6981)

【利用可能場所】窓側カウンターテーブル4席、窓側大テーブル8席程度

【電源】PC用の電源は用意があります。

【その他設備】コピー機のご利用は可能です。(大量のコピーはご遠慮ください)

Wi-Fiはご使用いただけます。(リモート会議はご遠慮ください)

【喫食について】飲物の持ち込みは可能ですが、食べ物の持ち込みはご遠慮ください。

(冷蔵庫内のペットボトルは自由にお飲みいただけます)

【その他】他の会員様の迷惑になるので、複数名での会議等はできません。

Instagram





2026年度 年間特集テーマ「再生」
**特集 「再生_regeneration」
 のデザイン** 10



■特集1 総論
 脆弱化する都市における物語と背景の文脈（コンテクスト）の再生
 ●木多道宏 12

■特集2 各分科会・小委員会の考える「再生」
 想い想いの「再生」●ひと・まち・建築小委員会 14
 「計画」の概念を広げる「再生」●計画分科会 16
 建築、都市空間に見る「サイセイ」●建築デザイン分科会 18
 再生という視点で試される価値を見出す選択力●空間デザイン分科会 20
 構造設計者の懺悔ができる再生について考える(Q&A)●構造分科会 22
 それぞれの「再生」●環境分科会 24
 ワクワクする「再生」●施工材料分科会 26
 法令分科会委員が考える建築物の再生●法令分科会 28

■特集3 座談会
 座談会：「再生」をめぐる
 ●市川雅也、永田琴乃、今井信之、安井さおり、井上雅祐
 司会：岡村吉展 30

■2025年度 特集テーマ「未来」について
 編集・企画に携わった委員によるあとがき
 ●三宗知之・古谷隆祥・桑原悠樹・岡村吉展・澤田純一・吉村英祐・杉江順哉・黒柳 亮・
 正野和司・橋本直樹・藤丸啓一・河野 学・松本和也・古島正博・門野 陽・吉田悠起 36



project トヨタモビリティ新大阪寝屋川店 2
 gallery 再生 顔の見えるまちづくり●深野弘之 6
 会告 2026年度 第72回工高生デザインコンクール
 設計課題『「はじまり」を灯す空間—いのちを迎え、共に
 育む「建築」の器』 7
 第12回学生のための現場見学会「大阪・関西万博 大屋
 根リング(南東工区)・日本館解体工事」現場見学会 8
 出版委員会主催 第9回 建築セミナー 9

建築と社会

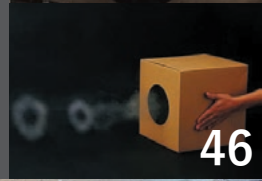
Architecture and Society
 Journal of the Architectural Association of Japan
 日本建築協会
2026 04
 Vol.107 No.1249

gallery
 ひと・まち・建築 6

■特集予告
 ●5月号／再び、イカス!
 ●6月号／片岡安賞(日本建築協会論考コンクール)



476 667
設備の頁 44
法令コーナー 45



同時代の「建築と社会」
 一大林組設計部の歴史と実績を通して—
 連載をはじめるとあって—その意図と背景— 38
 1905(明治38)年に誕生した
 大林組設計部と建築家たち(戦前篇) 40
 ●石田潤一郎

設備の頁 火に代わり太陽光を灯す、現代の行燈「EN」
 ～生産から使用まで、社会的価値を生み出す照明～
 ●村山修平 44

法令コーナー 完成の先にある現場～大阪・関西万博ハンガリー
 パビリオン解体工事を通して～●望月貴之 45

建築と社会を
 考える AI時代のヒューマンファクターデザイン●近本智行 46

「再読 関西の建築」は休載します

Member's Forum 活動報告：建築次世代委員会主催 第11回 学生のための
 現場見学会 株式会社東畑建築事務所 大阪草煙舎建替
 計画工事見学会 50
 活動報告：CCCフォーラム主催
 第11回 青年技術者交流会レポート 52

information ガウディ没後100年公式事業 NAKED meets ガウディ
 展／特別展「小泉八雲—怪談とフォークロリストのまな
 ざしー」／特別展 北野天神／特別展 フィンランド スピ
 リット サウナ 54

月間の動き 2026年 2月 56

ご意見ご要望は
 こちらから →



人・まち・自然をつなぐ ロードサイドの森

大阪府寝屋川市のロードサイドに建つ、カーディーラーの建て替え計画です。

建築主の脱炭素・資源循環への姿勢を、建築主が所有する鳥取県若桜町にある社有林のスギ材を活用し具現化し、“森”のような店舗を目指して計画しました。

外観は、若桜の森と山並みをモチーフにした立体的なデザインとし、それぞれの面を三角形に分割された折れ屋根で構成し、屋根の頂点を上下することで、ショールームの機能に応じて内部の気積に変化を持たせ、“森”の中に居るように感じる空間を実現しました。

[竹中工務店]

米津孝祐 (よねづ たかひろ)



2004年京都大学大学院工学研究科修了／同年竹中工務店入社／現在同社東京本店設計部シニアチーフアーキテクト

鈴木貴晴 (すずき たかはる)



2020年慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修了／同年竹中工務店入社／現在同社大阪本店設計部主任

天野 結 (あまの ゆい)



2017年横浜国立大学大学院都市イノベーション学府修了／同年竹中工務店入社／現在同社大阪本店設計部構造第1部門主任

阿部 壮一郎 (あべ そういちろう)



2012年滋賀県立大学卒業／同年竹中工務店入社／現在同社大阪本店作業所工事課長



トヨタモビリティ新大阪寝屋川店

建築主 トヨタモビリティ新大阪株式会社
設計・監理 株式会社竹中工務店
施工 株式会社竹中工務店

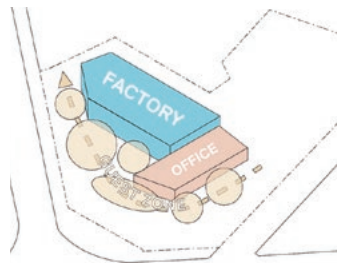




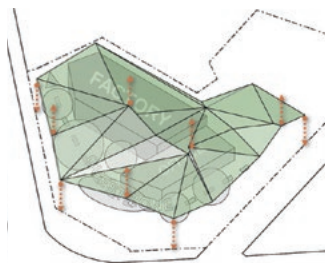
外観風景**



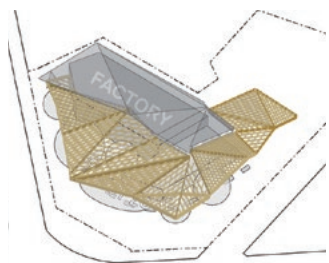
外観夜景*



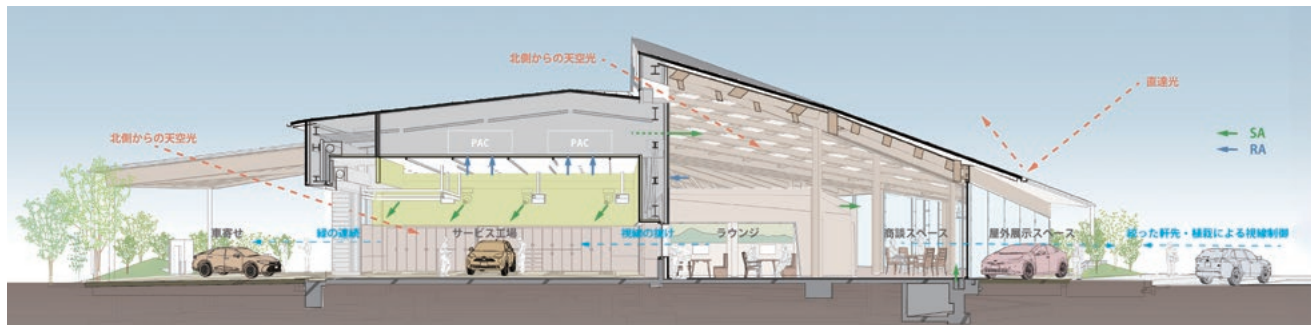
三面接道を活かして来客ゾーンを計画し
店舗とまちとの接点を増やす



折れ屋根をかけ、頂点を上下することで
“森”の中のさまざまな気積をつくる



来客ゾーンを二方向格子梁で構成し
天井面に“森”のような奥行をつくる





天井は低めに設定し屋外展示スペースも含めた横方向の広がりを持たせた商談スペース**

森のなかに居るような有機的な二方向格子梁

屋根の内側は、面ごとに集成材のかけ方向が異なる二方向格子梁で構成することで天井面に奥行きを創出し、有機的で“森”の中から空が抜けているような奥行きを感じられる空間としました。また、折れ屋根は軒先に向かって高さを絞り、ガラススクリーンを屋根先端からセットバックさせ、敷地境界沿いの植栽と隔離距離を確保することで、ロードサイドで木造屋根に包み込まれた居心地の良い空間を実現し、まちと車と人の間に新たな関係性を構築しました。内装計画では建築主の「自然との共生」という理念の具現化を目指しました。受付カウンターには壁面緑化を施し、手に触れるハイカウンターなどの造作家具には若桜町産の圧縮杉を使用しました。

本計画では、今まで雑然としていた日本のロードサイドに、“森”のような店舗を実現し、新たな都市景観を創出しました。今後このプロジェクトをきっかけに、日本のロードサイドが個性豊かな場所になっていくことを期待しています。

(米津孝祐・鈴木貴晴／竹中工務店)

二方向格子梁の相互支持効果を利用した木造屋根架構

二方向格子梁の相互支持効果により、平均12mスパンとなる小梁を個材の断面寸法としては一方の場合に比べて約1/3で実現し、天井面の奥行きと軽やかさが感じられる空間を創出しました。上下に積層する木小梁相互の接合部には、相欠加工部でせん断力を、ホールダウンパイプで引張力を伝達するディテールを採用し、施工性の向上と、意匠性にも配慮しました。

また、主架構については来客ゾーンは木造（燃え代35mm）、自動車の整備を行うサービス工場は鉄骨造とし、鉄骨造部分で地震力を負担させることで、木質部材断面の最小化に寄与しています。

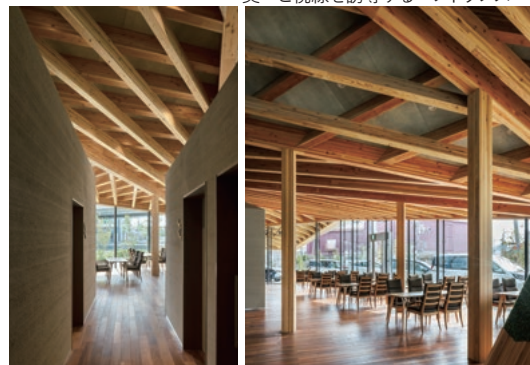
(天野 結／竹中工務店)



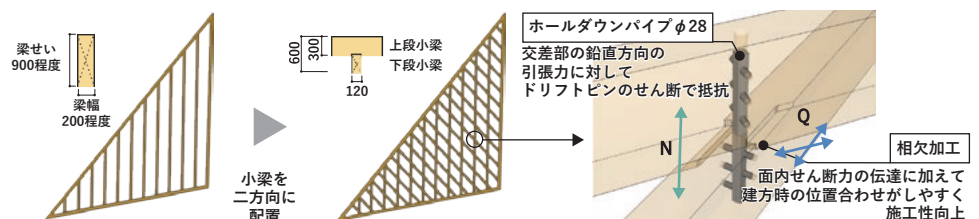
屋根の高さをしぼり木屋根で包み込むラウンジ**



奥へと視線を誘導するエントランス**



森の中を散歩しているような感覚を醸し出す有機的な空間**1*



本プロジェクトの施工にあたり、前例のない木屋根構造と屋根形状を実現するために、躯体構築計画におけるつくり込みと精度の高いBIMモデルの活用を行いました。また、敷地いっぱいの建物計画と大型車両搬入の制約がある中で、構造計画にてコアとなる鉄骨造部分を先行して構築し、その後木屋根を施工する手順を早期に計画しました。

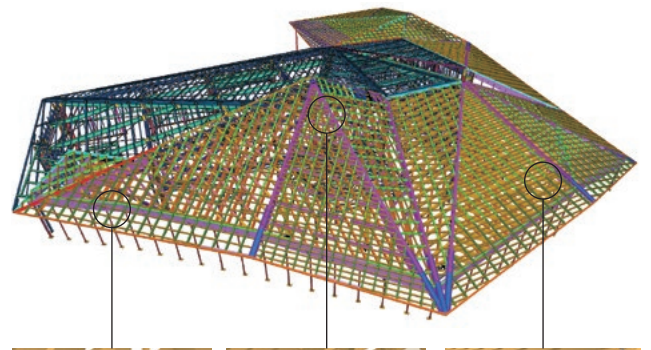
施工計画上の大きな課題は、鉄骨と木の建方精度の違いにより、両者の接続箇所において生じる施工誤差をいかに吸収するかという点でした。そこで鉄骨と木の接合に対応した新たな仕口を考案しました。鉄骨のガセットプレートへ直接木梁を接合せず、仲介木材を挟むことで鉄骨精度を緩和し、複雑な角度で取合う梁に対しても調整可能な納まりとしました。

複雑な形状における木格子梁はBIMモデルを活用して施工手順を整理し、木梁の接続におけるドリフトピンや釘などについても精緻にモデル化することで、鉄骨に対する干渉の確認を実施しました。木材の複雑な加工についてもデジタルファブリケーションを活用することで加工の間違いや精度誤差に対する影響をなくすことで、施工が円滑に進められるように尽力しました。

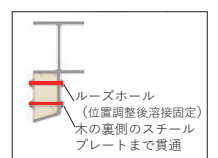
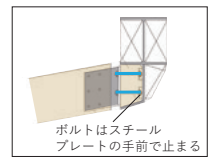
仕上工では区画に対する多数の法令順守条件、複雑な形状による区画形成方法についても、あらかじめモデルにて確認し行政協議などを重ねて、高水準な建物品質の確保を実現することができました。

建築主様の店舗開店準備も円滑に進めることができました。店舗に多くのお客様が立ち寄られ、木の空間に対して驚きや関心を示されているところを多く目にしたことで、今回の建物が建築主様やご利用されるお客様のみならず、周辺環境の活性化にも貢献することを祈念しています。

(阿部壮一郎／竹中工務店)



BIMモデルでの接合部の検証



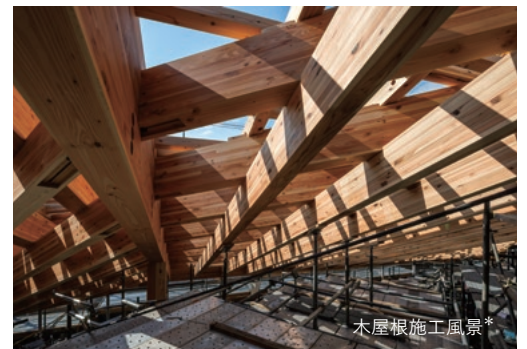
木と鉄骨の仕口部



木屋根施工全景*



ガセットプレートが取り付けられた大梁*



木屋根施工風景*



鉄骨大梁と木造小梁が取り合う専寄せ*



デジタルファブリケーション用の切削機



デジタルファブリケーションされた木部材

所在地 大阪府寝屋川市池田北町15-20
 敷地面積 2,762.83㎡
 建築面積 1,355.28㎡
 延床面積 1,224.01㎡
 構造規模 S造・W造 地上1階
 工期 2024年7月～2025年9月
 撮影 笹倉洋平*
 ナカサンドパートナーズ 梅津 聡**
 竹中工務店

再生
顔の見えるまちづくり

【第17代目当主】
深野 弘之

きっかけ

2019年に先祖代々、受け継いだ1000坪の土地を将来に向けて、「一帯をどういう場所にしていこうか考えるところから始めました。

気づき

基本的には建物や土地を持っているのは大家さんで、そこに住む人やどんなテナントを入れるかを決めるのも大家さん。大家さんの意識次第でまちは変わるし、役割が大きいと気づきました。

ニシイケバレイ

ここには、自身も暮らしていた築70年以上の平屋をはじめ複数の建物があり、風が通り抜ける谷のようになっています。そこで池袋駅の西から「ニシイケバレイ」と名づけました。

顔の見えるまちづくり

先祖から引き継いだ土地と建物を使って、ゆるやかに人の顔が見えるまちづくり、場所づくりを目指して、2020年から少しずつ今ある建物を改修しながら、壁を撤去し、建物同士をつなぎ、まちに開いていきました。

イベント活動

同時に様々なイベントを催し、エリアが賑やかになる活動をしています。今では100世帯を超える住民、カフェ、飲食店、器の店、シェアキッチン、コワーキングスペース、バルクールジムなど、人の往来があり、「顔の見える関係」で楽しく過ごしています。

今後

通える所に畑を作って、住人やここに関わる人達にも農作業に参加してもらって、自分たちが作ったものが循環するようなことがしたいと思っています。

深野 弘之 (ふかの ひろゆき)

1970年生まれ
株式会社深野商事代表取締役
江戸元禄から続く深野家17代目当主
先祖からバトンを受けた豊島区西池袋の一隅を2020年7月から「ニシイケバレイ」と称し、大家業を営む
<https://nishikevalley.jp>

企画編集：太田栄治
(ひと・まち・建築小委員会サポーター)

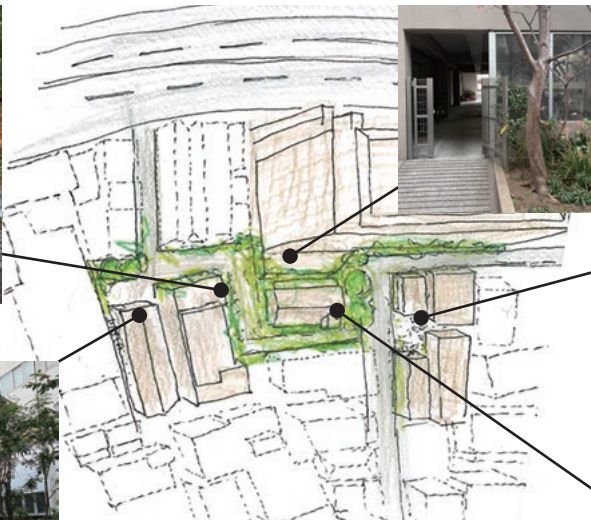


RCマンションの1階改修
1階物販店舗



木造アパート改修

1階飲食 2階シェアスペース



平屋住宅の改修と増築

カフェ・イベントスペース

14階建 賃貸住宅 1階通り抜け



新築3階建 飲食・ジム・賃貸住宅



初めての神酒所開設

初めて神酒所開設
4人いるママです。子育ての日々を優先して、ひと思つことでもあれはいいのに「ふと湧いたその恋になりました。子どもと一緒でいがかふわつと軽くなる。小さな休息後、私自身がグルテン過敏症にたどて、体調がみるみる回復。そー

大家さんが発行する「ニシイケバレイ通信」



屋上バルクール



路地裏運動会



路地裏花火大会



主催 日本建築協会

2026年度 第72回工高生デザインコンクール

設計課題

『「はじまり」を灯す空間
—いのちを迎え、共に育む「建築」の器』

課題の趣旨

現代の日本において、出生の約99%は病院や診療所であり、助産院等は1%に満たないのが現状です。高度な医療管理による安心がある一方で、かつての日本で「向こう三軒両隣」の人々が新しい命の誕生を共に喜び、見守っていたような、温かな地域との繋がりを実感する機会は少しずつ減っています。

2025年大阪・関西万博が掲げる「いのち輝く未来社会のデザイン」では、一人ひとりのいのちを慈しみ、持続可能な未来を共に創り出すことが提起されました。これからの建築には、誰かが一人で頑張るのではなく、社会全体で優しくいのちを包み込むような「開かれた居場所」としての役割が期待されています。



本課題では、北欧の「ネウボラ」のように妊娠期から子育てまで家族に寄り添い、専門的なサポーターである「ドゥーラ」や「ナニー」が自然に手を差し伸べられる拠りどころを計画してください。それは、「いのちを迎える人々」が、それぞれの形を尊重し合いながら、知恵を寄せ合い健やかに過ごせる、光あふれる交流の場です。

自然の摂理を感じながら、多世代が見守るなかで新しいいのちが育まれる「建築」の器。100年後の未来へ繋がる生命の神秘に敬意を払い、人々の記憶に優しく刻まれる「はじまりと継承」の場を提案してください。

設計条件

1. 建物の目的：既成概念にとらわれない『「はじまり」を灯す空間—いのちを迎え、共に育む「建築」の器』の提案（新築のほか、従来の建物の再利用も可能。）
2. 敷地：敷地の大きさ形状とも自由とし、具体的な敷地を設定する。
3. 規模：延べ面積、構造、階数は自由とする。
4. 所要室：使用方法を想定し、必要と思われるスペースを適宜設ける。

所要図等

（以下の1～8全てを記載することとし、不記載の場合は失格となることがある。）

1. 設計説明：設計意図を表すサブタイトルを必ずつけること。設計趣旨（敷地周囲の状況等についての説明はもちろん、「誰が、どのように、利用する場となるのか」について述べ、そのために設計では何を意図したのかを文章や図で簡潔に表現する）を記入する。
2. 建築概要：必要に応じて敷地面積、建築物の構造、階数、各階床面積および建築面積、延べ床面積などを示す。
3. 敷地周辺図：敷地周辺の環境や状況を示す。縮尺を明示する。
4. 配置図：敷地における建物の位置、道路との関係、方位、縮尺を明示する。
5. 平面図：室名、寸法を記入する。縮尺を明示する。
6. 立面図：縮尺を明示する。（2面以上）
7. 断面図：室名、寸法を記入する。縮尺を明示する。（1面以上）
8. 透視図等：設計意図が最も反映するところを表現する。
9. その他：応募図面には氏名学校名、マークなど応募者を特定あるいは類推できる内容は記載しないこと。

応募条件

1. 用紙：用紙は製図用紙A1判（594mm×841mm）1枚を使用し、所要図等をすべて表現すること。また、図面のパネル化等は認めない。
2. 応募資格：2026年4月現在、高等学校在籍もしくは高等専門学校、専修学校の高等課程の生徒で、個人または共同（3人まで）で制作したものとす。

審査員（50音順・敬称略）

審査員長 久保 岳／㈱昭和設計建築設計部部長
 審査員 糸嶺 円路／㈱大林組設計本部建築設計部副部長
 梅田 武宏／ウメダタケヒロ建築設計事務所代表
 惠本涼太郎／㈱日建設計設計部部長
 木内菜津子／nua 主宰

注意事項

1. 作品の意図等を表現する際に、写真や図表等を補足資料として用いることは妨げないが、引用利用する場合には著作権等に十分に考慮すること。

応募方法

1. 応募書類に、学校名、所在地、学年、氏名（ふりがな）を記入の上、封筒に入れ製図用紙の裏に貼りつけること。（応募書類が足りない場合は協会ホームページ（<https://www.aaj.or.jp>）からダウンロードすること。また封筒の貼り付けはテープ止め等で封筒がはがれない程度とすること。図面を破損する恐れがあるので、糊のべた塗りはしないこと。）
2. 応募作品は学校を通じて提出すること。

締切期日

2026年9月30日（水）の消印、あるいは受付印のあるものをもって締め切る。

送付先

〒540-6591 大阪市中央区大手前1丁目7番31号 OMM 7 階
 一般社団法人 日本建築協会 第72回工高生デザインコンクール係
 TEL：06-6946-6981 FAX：06-6946-6984
 E-mail：jigyoka@aaj.or.jp URL：https://www.aaj.or.jp

入選作品の数および賞

1. 入選作品は10点とする。
 2. 入選作品のうちから最優秀賞1点、優秀賞2点を選び、表彰式にて発表する。
 3. 最優秀賞、優秀賞作品には、賞状および表彰盾を贈り、その他の入選作品には、賞状を贈る。
 4. 応募者全員に参加賞を贈る。
- ※入選作品の著作権は本会に属する。

入選者発表および表彰式

審査の結果は、各学校ならびに本人に通知するほか、本会の会誌「建築と社会」11月号に発表し、入選作品は翌年1月号に掲載する。なお、表彰式は2026年11月14日（土）に行う。

高田 英治／㈱安井建築設計事務所大阪事務所設計部部長
 多田 正治／多田正治アトリエ主宰・武庫川女子大学 准教授
 根木 和人／㈱東畑建築事務所本社オフィス大阪設計室副室長
 野口 伸／㈱竹中工務店大阪本店設計4部門1グループ長
 柳沢 究／京都大学大学院工学研究科 建築学専攻・准教授

このコンクールは、工高生の設計技能の向上を目的とし、昭和30（1955）年より毎年テーマを変えて開催しています。

第12回学生のための 現場見学会 「大阪・関西万博 大屋根リング (南東工区)・ 日本館解体工事」 現場見学会

日時
2026年5月25日(月)
13:30~16:30
受付開始 13:15

講師
清水建設(株)河地建設所長(リング)、
清水建設(株)及川工事長(日本館)



お申込みはこちら

【見学概要】

2025年4月から10月まで「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに開催された日本国際博覧会の会場内では、現在解体工事が進行しています。その中で、大屋根リング(南東工区)と日本館の解体現場を見学することができます。

普段は立ち入ることのできない解体工場の現場にて、施工手順・安全管理・環境配慮(分別・リサイクル)などについて、現場で解説を受けながら見学いただけます。

日本館では、CLTのリユース解体をしており、新築時の逆手順で、部材を傷付けないように解体工事を行っています。(大屋根リングではリユース解体は完了し、大型重機による解体作業中)また、解体現場だけでなく、現場事務所に大屋根リングや日本館建設時の資料や動画により、建設時の工夫や苦勞した点についても解説してもらいます。

【建築概要(大屋根リング)】

工事名: 2025年日本国際博覧会 施設整備事業 PW南東工区建設工事

発注者: 公益社団法人 2025年日本国際博覧会協会

実施設計: 清水建設(株)関西支店
施工: 清水・東急・村本・青木あすなろ共同企業体

工期: 2023年4月~2027年6月(新築含む)

建築規模

階数: 地上2階
構造: 木造、S造
建築面積: 41,131㎡
延床面積: 50,620㎡

【建築概要(日本館)】

工事名: 大阪・関西万博日本館解体工事

発注者: 国土交通省近畿地方整備局

基本・実施設計: (株)日建設計
施工: 清水建設(株)関西支店

工期: 2025年11月~2026年11月

建築規模

階数: 地上2階
構造: S造
建築面積: 8,185㎡
延床面積: 11,192㎡

所在地: 大阪府大阪市此花区夢洲

集合場所 夢洲駅改札出口

定員 30名(先着順)

参加費 無料

申込方法

- ①催し名「大阪・関西万博 大屋根リング(南東工区)・日本館解体工事」現場見学会」
- ②学校名・学部・学科・学年
- ③学生氏名(ふりがな)
- ④引率者 職名・氏名(ふりがな)
※学生のみの場合不要
- ⑤連絡先電話番号・E-mail
上記を明記しHP又はE-mailにてお申し込みください。
参加証は後日送信します。

申込締切日

2026年5月18日(月)
*ただし定員になり次第、締め切らせていただきます。

問合せ・申込先

一般社団法人日本建築協会
(担当: 中内)
TEL: 06-6946-6981
FAX: 06-6946-6984
E-mail: jigyoka@aaaj.or.jp



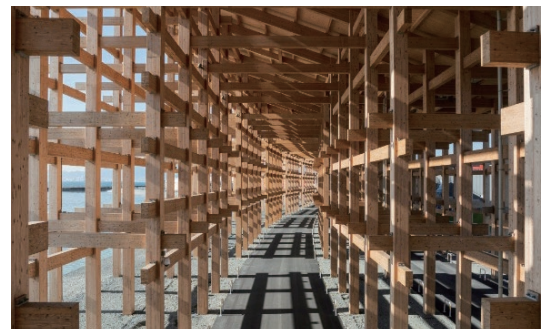
万博会場工区割図



日本館エントランス



大阪・関西万博会場全景



大屋根リング内部写真

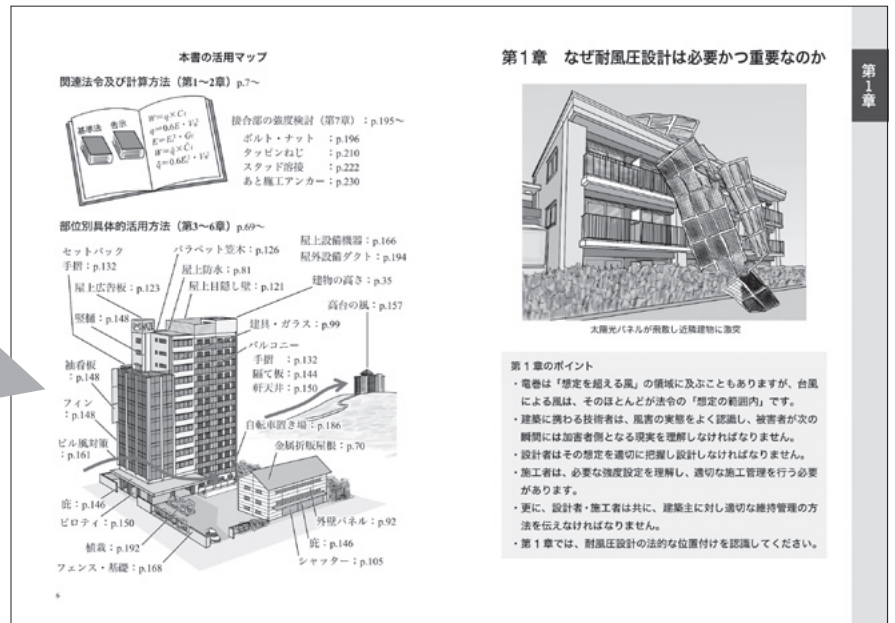
◆ 第9回 建築セミナー ◆

主催：日本建築協会出版委員会 共催：学芸出版社

日本建築協会出版委員会では、著者をお招きし、気軽にご参加いただける連続セミナーを開催しています。第9回として、日本建築協会企画・西博康氏著『イラストと計算例でわかる 外装材の耐風設計・施工』の出版を記念して実施いたします。お申し込みをお待ちしております。

イラストと計算例でわかる 外装材の耐風設計・施工

講師：西博康氏



10%超OFF・送料無料

使用テキスト A5判・256頁・本体¥2,700+税
受講者は税込¥2,970⇒**税込特価¥2,600**でご購入いただけます。

屋根、足場、庇、シャッター、防水、笠木、外壁、手すり、屋上設置物の飛散など、台風等による飛散被害が頻発するなか、すべての建物の設計・施工管理業務において耐風圧対策の重要性が高まっている。お客様を被害者・加害者にしないために、また生産者責任を追究されないために必要な知識を、実務者視点でやさしく解説。

〈講師プロフィール〉

西博康 (にし ひろやす)

1959年生まれ。1984年室蘭工業大学大学院工学研究科建築工学専攻修了後、清水建設株式会社に入社。以降、施工管理に従事。2011年関西事業本部建築技術部長、2020年関西支店品質長・上席エンジニア。2024年同社退職。「しずかるバー®」(遮音ルーバー)開発者(2019年プレス発表)。2013年一般社団法人日本建築協会常任理事・出版委員長。2025年 西建築エンジニアリング相談室代表。株式会社成和技術顧問。

このセミナーは、建築CPD情報提供制度認定プログラム申請中です。建築関連CPD (2単位)

日時：2026年4月15日(水)

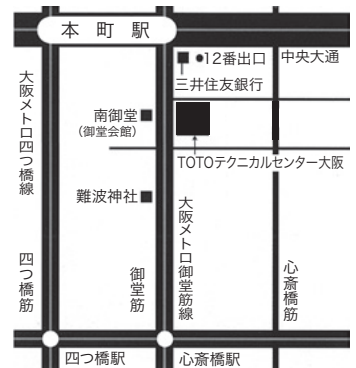
18:00 ~ 20:00 (17:45開場)

場所：TOTOTテクニカルセンター大阪

大阪市中央区久太郎町3-6-8 JRE御堂筋ダイワビル2F
地下鉄本町駅から徒歩4分

受講料：	一般	¥3,000
	会員・学生	¥2,000

定員：60名



【申込方法】 このセミナーは前払制です。

下記をご記載の上、E-mailまたはFAXにてお申し込みください。

- ①催し名(第9回建築セミナー) ②氏名(ふりがな) ③ご所属 ④一般・会員・学生の別 ⑤電話番号
- ⑥E-mailアドレス ⑦CPD単位申請希望の場合は申請先団体名と登録番号

申込先：(一社)日本建築協会 TEL 06-6946-6981 FAX 06-6946-6984 E-mail: ken-shaik@aaj.or.jp (担当: 福原)

●お申し込み受付後、協会より参加費の振込先をご案内します。ご入金確認後、受講票PDFをお送りします。

【テキスト購入方法】 オンラインでお申し込みください。

受講をお申し込みの皆様に受講票をお送りする際に、テキストを**特別価格¥2,600(税込)**(通常価格¥2,970円(税込))・**送料無料**でお求めいただけるクーポンコードと書籍販売ウェブページをご案内します。4月1日(水)までのお申込みですと、セミナー前にご指定の宛先にお届けできます。当日の販売は行いませんので、ご購入ご希望の方は予めお申し込みください。

「再生_regeneration」のデザイン

2026年度の特集テーマは「再生」です。「再生」という言葉は使う場面によって様々な意味を持ちます。身近なところでは録音・録画されたデータなどを音や映像として出力する「再生」を想起しますが、多くは機能不全になったモノを「再び生き返らせる」という意味で使われます。iPS細胞などで知られるようになった再生医療においては、機能を失いまたは欠損した体の一部を従来は人工物（例えば臓器や関節など）で補うしかなかったところ「体の機能や体そのものを修理・再生させる」ことが可能になるなど医療分野においては文字通り「再生」の技術が実用化されようとしています。また「再生」はモノだけではなく元気のなくなった組織や地域などを立て直して活気付けるといった社会的な復活を意味することもあり、より多層的・多面的な視点で捉えていく必要があります。

建築・まちづくりの分野でも、資材・資源のリサイクルをはじめとし、歴史的建造物の利活用による価値の継承や観光振興、廃校を活用した新たなコミュニティ拠点づくり、災害からの創造的復興など様々な「再生」が実践されています。これらは役目を終えたものや壊れたものを単に元の状態に戻すことだけではなく、過去を紐解きつつ次世代を見据えた、新たな価値を伴う「再生 (regeneration)」のデザインと言えるでしょう。

大阪・関西万博が行われた2025年度は「未来」をテーマにしました。2024年度に議論した「トランスフォーメーション」は不可逆的な変化を示すものですが、その先にある「未来」は持続可能でありながら成長していく循環型の社会を実現しなければなりません。本年度はこれからの循環システムを構築する多様な「再生」を考えていきたいと思えます。

本年度の『建築と社会』では新たな企画・連載を始めます。2022年より休載していた連載「建築と社会を考える」をすでに本年1月号より再開させています。その他「同時代の「建築と社会」―大林組設計部の歴史と実績を通して―」を本号より4回（予定）に渡って不定期に掲載します。また、2027年の本協会創立110周年にあたり「建築と社会賞」を再開させます。選考対象は「2026年1月から12月号までの協会誌『建築と社会』に掲載されたプロジェクトと各号特集記事や寄稿」ですので改めて掲載プロジェクトや記事に注目していただきたいと思えます。本年度も引き続き誌面の魅力向上に努め、本協会ならではの会誌をお届けします。会員のみならず皆様からのご意見・ご感想のほか、協会活動への参加もお待ちしております。



特集1 総論

木多道宏 脆弱化する都市における物語と背景の文脈（コンテクスト）の再生 12

特集2 各分科会・小委員会の考える「再生」

ひと・まち・建築小委員会 想い想いの「再生」 14

計画分科会 「計画」の概念を広げる「再生」 16

建築デザイン分科会 建築、都市空間に見る「サイセイ」 18

空間デザイン分科会 再生という視点で試される価値を見出す選択力 20

構造分科会 構造設計者の懺悔ができる再生について考える（Q&A） 22

環境分科会 それぞれの「再生」 24

施工材料分科会 ワクワクする「再生」 26

法令分科会 法令分科会委員が考える建築物の再生 28

特集3 座談会

市川雅也、永田琴乃、今井信之、安井さおり、井上雅祐

司会：岡村吉展

「再生」をめぐる 30

2025年度 特集テーマ「未来」について

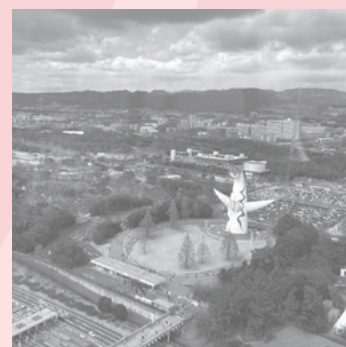
編集・企画に携わった委員によるあとがき

三宗知之・古谷隆祥・桑原悠樹・岡村吉展・澤田純一・吉村英祐・

杉江順哉・黒柳 亮・正野和司・橋本直樹・藤丸啓一・河野 学・

松本和也・古島正博・門野 陽・吉田悠起

36



脆弱化する都市における 物語と背景の文脈（コンテクスト）の再生

大阪大学 総長補佐 大学院工学研究科教授 木多道宏

■ 建築の喪失をこえて「再生」されるもの

建築・都市の分野での「再生」を考えると、空き家の改修や老朽建物の保全、資材のリサイクルなど、物質的なリソースの存在が前提となる。一方で、現代は大災害、紛争、縮退の時代でもあり、再生の対象となる建築そのものが喪失されてしまう。本稿で論じたいのは、建築が失われる現代において、再生とは何かを問い直すことである。

その糸口は過去の大災害からの復興に見出すことができる。1923年に発災した関東大震災からの復興では、猿江町に井戸端の空間を備えた同潤会アパートが誕生した。関東大震災の6年前に当たる1917年に、建築学・都市計画の専門家が自主的に都市研究会を結成し、日本における都市の近代化や生活環境の向上のために様々な研究と調査を行っていた。彼らはその活動の一環として、当時スラムであった猿江裏町を改善するために、居住者の暮らしを徹底的に調査し、居職や棒手振りといった生業が家計を支えていること、また、井戸端と路地が大切な作業場や社会的接触の中心としての役割があることを把握していた。震災によりスラム地区は破壊されたが、彼らは従前の調査と構想を基に、鉄筋コンクリート造のアパートにこれを具現化させたのである。

子ども、大人、高齢者が安心して過ごすことのできる井戸端や路地的空間は、小さなスケールに遊びや家事などの様々な振る舞いができるよう、地域の人々が作り上げた「空間の編成」である。木造のバラックから近代的なアパートへと建物が更新される中、地域コミュニティを支える「空間の編成」が再生されたのである。

「空間の編成」は再生を繰り返しながら進化することもある。神戸市兵庫区松本・上沢地区は1945年の第二次世界大戦と、1995年の兵庫県南部地震により二度にわたる深刻な被害を受けてきた。

元々、当エリアは明治29年～30年に新道開削事業が実施され、条里制の遺構による水田の区画に沿って街区が整備された地域である。当時の街区はサイズが大きいため、路地の発達が進まず、大正から昭和にかけて、路地における見守り、子どもの遊び、祭礼などを通して地域コミュニティが醸成されてきた。第二次世界大戦の空襲を受け、これらの空間組織は消失するが、上沢地区で1970年代から実施された戦災復興土地区画整理事業では、市民ワークショップが開催され、旧街区ごとに小公園をつくり、街区をこえてネットワークさせる計画が立てられた。これは人々をつなぐ「空間の編成」を路地から街区レベルへと開くものであった。この土地区画整理が途中、1995年の震災に遭い、未整備であった上沢地区の一部と松本地区の大半が消失してしまう。松本地区の人々がまちづくり協議会を結成し、コンサルタントによる伴走型の支援のもと復興計画が立案された。地区の全ての人々をつなぐ「せせらぎ」と公園の整備、さらには、歩きやすい道により周辺地域とも滑らかに結ぶというものであった。人々をつな

ぐ「空間の編成」が、二度にわたる再生の事業を通して、より多くの人々に開くための形態へと進化を遂げた事例である。

■ 地域社会の喪失をこえて「再生」されるもの

建築のみならず、そこに息づいてきた地域社会そのものも喪失されることがある。地域社会が入れ替わっても、「空間の編成」の価値は成立するのだろうか。ハンガリーの首都ブダペストに旧ユダヤ人地区と呼ばれるエリアがある。ここは、12世紀に成立した旧市街の囲壁の外側に形成された市街地であり、18世紀末ごろに建物が建て込み始めた（図1 タイプA）。やがて人口増が進むとともに、1838年のドナウ川の水害で多くの建物が建て替えられた結果、中庭をもつ建物群が街区を占めることになった（図1 タイプB）。これらの建物は、新しい事業に成功した人々に建てられた都市住宅であり、都市を創造的で文化的にする特別な「型」を有していた。街路側にオーナーや富裕層のための広い住戸、裏の中庭側に低所得者層や召使いのための小規模な住戸を配し、さまざまな立場の市民が混住する多様性を実現した。新しいビジネスや創作的活動に挑戦する人々も、安価な家賃で都市の中心部に居住することが可能となり、都市の創造性を高めていたのである。

1867年に誕生したオーストリア＝ハンガリー帝国がユダヤ人に市民権を認めたことがきっかけとなり、市街化が先行していた当エリアにユダヤ人の定住が進んだ。ユダヤ教の安息日は土曜日であり、地域コミュニティを大切にするため、家事も含め一切の仕事が許されなかった。

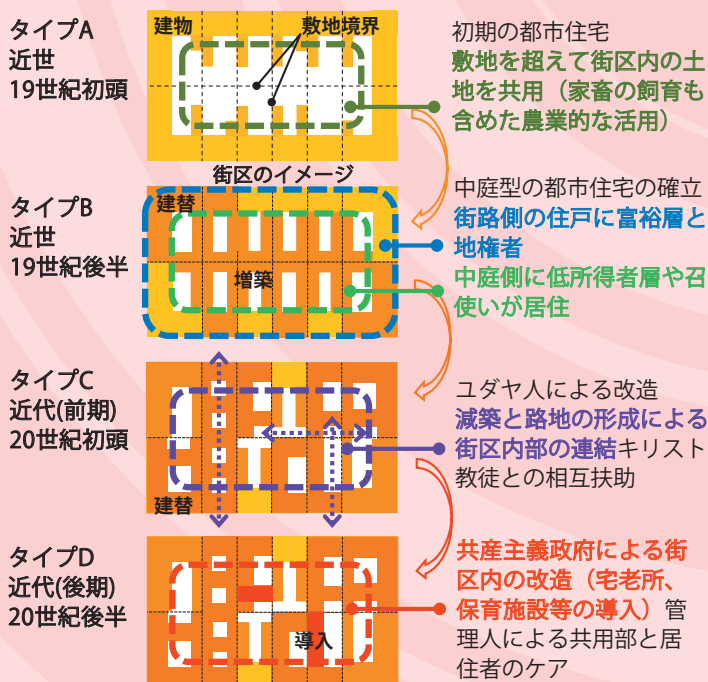


図1 各時代の街区における「空間の編成」のイメージ（黄色は当初の建物、オレンジ、赤は増築・改築・建替された建物）

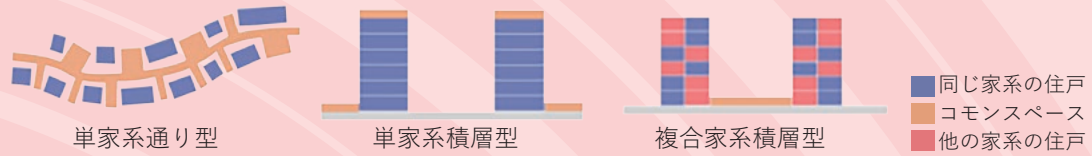


図2 住居の集合形態における「空間の編成」の変化 (作成: Alaa Riyadh Yousef Amro)

そこで、彼らはクリスチアンの女子大学生を「召使い」として家に招き、安息日に食事作りや買い物を任せた。実質的には家族の一員であり、個室も与えられ、食卓も共に囲んだ。学生は都会に下宿しながら大学に通うことが可能となり、給料を貧しい田舎の実家に送金することもできたのである。もはや、都市住宅において召使いが居住する裏側の狭いブロックは不要となった。ユダヤ人は裏側を減築することで、敷地境界をこえて中庭どうしを接続し、路地を形成した(図1タイプC)。ユダヤ人には、安息日に外出できる距離の制約があり、依然として差別も残っていたことから、表通りに出ず街区内の路地的空間を通して宗教施設や知人宅に移動できることは、近道や安全性の点でも有効であった。

第一次世界大戦(1914年~1918年)で敗戦国になると、国の体制は大きく変動し、ユダヤ人に対する政策も厳しいものとなった。1930年代後半にはナチス・ドイツによるホロコーストの影響を受け、ユダヤ人は抑圧の対象となる。1944年には当エリアの中心部が壁で囲われ、ユダヤ人ゲットー地区に指定された。周辺地域のユダヤ人もここに強制移住させられ、過密状態となった。筆者らのヒアリング調査では、いくつかの建物で多くのユダヤ人が虐殺され、広場には4000人の遺体が集められたとの証言もあった。

第二次世界大戦が終わり、ゲットー地区はソ連軍に解放された。1949年に誕生した新たな共産主義政府は労働者を都心に住まわせる政策を推進したため、都市住宅の住戸を小規模に分割したり、トイレ・浴室を共同化するなどして居住人口の増大を図った。ユダヤ人の人口統計はないが、ホロコーストによる抑圧や新政府による居住政策により急激に減少した。一方、居住者へのヒアリングを通して、ポジティブな面も浮かび上がってきた。ユダヤ人が街区内に残した通路や中庭に沿って、建物の小さな改造を行い、幼児や高齢者のためのケア施設の導入を行なった。現在も、高齢者の居場所や幼稚園として継承されている(図1タイプD)。

以上のように、街区内の内側における「空間の編成」を改造し進化させながら、社会階層や宗教を越えた共生、社会的な‘弱者’を大切に作る共生へと何度も共生のかたちが更新されてきた。地域社会が入れ替わりながら継承されてきたものは、「空間の編成」に宿る「立場を越えてお互いを尊重し助け合う」という共通の価値観であり、時代をこえた「普遍のテーマ」と言うべきものである。

■パレスチナ・ガザにおける文脈の価値

筆者は、普遍のテーマを解くために、地域の人々が積み重ねてきた努力や創意工夫の価値を「連鎖的文脈(物語の文脈)」と呼び、人々の物語が育まれる「空間の編成」とその成立を支える社会関係、生活様式、心的イメージの関係性を「組織的文脈(背景の文脈)」と定義している。災害や戦災により脆弱化した都市の文脈を読解することで、都市の本質

が見えてくる。筆者は、パレスチナのガザで再生するべき文脈とは何かを検討するため、パレスチナやヨルダンの研究者らと共同研究を始めている。ガザは、地理的な要衝にあることから様々な紛争に巻き込まれ、古代から中世、近世を経て第一次世界大戦に至るまでに7度の大規模な破壊を受けてきた。その後、イスラエルとの紛争により5回の戦闘があり、直近のものは過去に類を見ない深刻な被害をもたらした。

ガザでは、子孫が親元の住居に隣接する農地に住居を建て、これが繰り返されることで徐々に同一の家系による住居の集合体が形成されていった。その領域には通り状のオープンスペースも形成されたため、一帯の領域が「〇〇家通り」と呼ばれている(図2単家系通り型)。通りは居住者の社会的交流や子どもの遊び場として機能した。少なくとも第一次世界大戦よりも前には、このような領域がつながり合わされるように都市が形成されていたのである。やがて、土地が不足するようになると、住居を上方に積層化させて、子孫が上階に住むような形態へと移行する(図2単家系積層型)。第一次世界大戦後の英国委任統治時代には、社交空間として形成されていた通りが公共道路に転換されてしまったため、人々は積層住居の屋根と裏庭を社交空間として活用した。やがて、積層住居の土地が不足するようになると、子孫は他の家系の人々と共同で遠隔地に積層住居を建設し、複数の家系が混住する形態が生まれることになった(図2複合家系積層型)。この新しい型は、多くの社会問題を生じさせている。屋上が設備機器で占められることによる遊び場の喪失、建物の管理費の未払い、居住者間のトラブルなどである。パレスチナ政府は、建物の中間階に社交空間を創出するためのガイドラインづくりや、公園・広場などの公共空間整備により解決を図ろうとするが、解決には至っていない。

このような創意工夫や成功と失敗の連続こそが、ガザの人々が「家系をこえた共生と社交空間の創生」という普遍のテーマのもと、過去から現代にかけて実践してきた価値ある物語の文脈である。今回の紛争が終結し、UAE、エジプト、米国などから復興計画が提案されている。いずれも現代的な街区や施設が描かれているが、人々に紡ぎ上げられてきた物語の文脈には配慮されていない。筆者の提示する「再生」とは、普遍のテーマのもと、「空間の編成」を進化させながら、新たな共生のかたちを見出そうとする人々の営みを再起動させることである。



きた・みちひろ

博士(工学)、一級建築士、大阪大学総長補佐 大学院工学研究科教授。同大学大学院工学研究科建築工学専攻修士課程修了、株式会社日建設計、大阪大学工学部建築工学科助手等を経て2012年より教授。専門分野は建築計画、都市計画、地域コンテクスト論。近年は、アフリカにおけるスラムの改善、危機的改変を乗り越えて生き続ける都市・地域の地域コンテクストを継承するまちづくり。

想い想いの「再生」

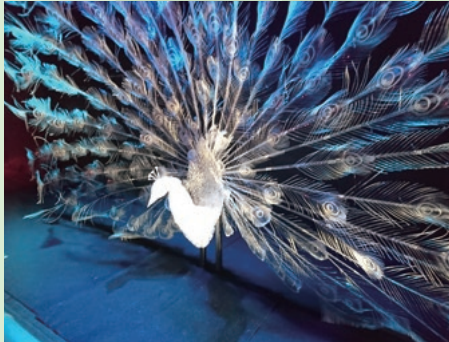
当小委員会のメンバーそれぞれが想う「再生」を集めました。じつに様々な「再生」がそろいました。共通して言えるのは、どの「再生」にも何かしらポジティブな期待や願いが込められていること。



■バルセロナの四つ角。かつて自動車が行き交う交差点であった場所が、いまは歩く人の居場所となっている。都市は用途を変えることで、あらたな公共性を獲得していく。（加嶋）

■ペットボトルをアートに蘇えさせる本間ますみ氏の作品。

2017年12月に目黒雅叙園で展示された「孔雀」です。空のペットボトルからどうしたらこのようなアートができるのか、彼女の手は本当に「神の手」としか考えられません。今回のテーマは再生でしたが、今にも動き出しそうで蘇生というワードの方が合っているかもしれません。今回、本間ますみ氏にも了解を頂き、掲載させて頂きました。（豊田）



■生－私が住む宝塚市内を流れる武庫川の中洲にある石積みモニュメントです。阪神・淡路大震災からの「街と人の心の再生」を願って創作されたものです。増水して流されるたびに1月17日に向け再生され、現在15代目だそうです。（澤田）

■伊吹山（滋賀県）標高1377m「日本百名山」であり「花の百名山」の一つでもある美しい山です。かつては冬季は「豪雪の山」としても知られていましたが、2023年7月12日の豪雨の影響により、麓から足で登る登山道で土砂崩れが発生し、現在も入山禁止となったままです。（※夏季のドライブウェイでの車両の通行のみ可能）

さらに近年、鹿による「食害」も進んでおり、貴重な植物が死滅しつつあります。いずれの事象においても、今後の『再生』への道のりは、非常に厳しい状況（ほぼ不可能と思います…）と言わざるを得ません。（佐伯）



■フィンランドでは質の良いものを何世代にも渡って長期間大切に使う習慣があるようです。写真はフィンランドのビルナスで年に一度開催されているアンティークマーケットの写真ですが、長い期間大切に使用されてきたであろうものが非常に良い状態でたくさん販売されていました。これらはもとの使い手から離れてしまいましたが、大切にしてきたその思いは再び次の使い手によって「再生」されていくのだと感じました。（浅田）



■世界最大の木造建築物であるとともに、世界最大のサーキュラー建築でもある万博リング。「Building as Material Bank：材料貯蔵庫としての建築」の実証/チャレンジの場として、半年という短い時間ではあるが、木材を一時的に貯蔵し、第二のライフサイクルへと繋げる。

リジェネラティブ（再生）デザインが当たり前の時代への布石になることを願う。（伊藤）

■再生と循環とは似て異なる。再生とは壊れ失われたものが、ある契機によってよみがえることでその軌跡は直線的。一方で循環は変化を抱えながら巡り続けることで、終始を内包した輪廻の運動。日土小学校はヘリテージとして“再生”され、今もなお生きている建築。廊下に満ちる光、階段を流れる川の音、学校を包み込むみかん畑の香り。過去と現在そして未来が穏やかに重なった空気。ぜひとも、その環境に身を置いてほしい。（片岡）



■学校のシンボルであったユーカリを建物の建替に際して、新しい形のシンボルとして生まれ変わるワークショップを児童たちと行う。樹木を残すことができない中で、葉っぱはアートへ、幹は建材へと形を変えて、新校舎の新しいシンボルとして継承する。形と活動で児童の記憶にもしっかりと刻み、継承することを目指す。（山本）

ひと・まち・建築小委員会

「再生」とは、よりよく蘇ることであると同時に、未来へつながっていくことであり、人を前向きな気持ちにする大切なことだとあらためて感じました。



■メキシコにあるグアナファトは、かつて銀山で栄えた街で、カラフルな美しい景観で有名な歴史地区はユネスコの世界遺産にも登録されている。地形的には周囲を急峻な丘に囲まれており、頻繁な洪水被害に悩まされていたため、対策として

中心地の嵩上げや地下排水トンネルを用いた排水路の整備により洪水対策を行っていた。その後、自動車交通量の増加による渋滞や駐車場問題に対応するため、この河川構造物を利用し、地下道路に転用するという大胆な計画が実施された。歴史地区の下にある、放水路の河床を利用した地下道路のネットワークにより、地上からは通過交通が排除され、世界遺産の街並みの魅力の保持に大いに役立っている。(増田)

■写真は明治期に建てられた味噌醸造などに用いた石倉。

この石倉は昭和の初め、道路新設により1街区(90m程)分解して移築され、醸造蔵として使われ続けてきた。現在は、用途が変わったが、移築の結果今なお使用されている。



各地で日常のように行われていた、建物を移築して使い続ける技術と文化。大切に使い続ける先に広がる「再生」も、あるのかもしれない。(上田)



■変わらぬ風景、世代が変わっても、家屋やまち、里山は人々によって再生し続ける…生きる (太田)



佐伯先史
清水建設
関西支店
建築設計部



澤田純一
兵庫県
まちづくり部
都市政策課



柄野淳司
竹中工務店
大阪本店
設計部



浅田翔大
日建設
大阪オフィス
設計部



豊田充広
高松建設
大阪本店
設計本部



伊藤 翔
大林組
建築設計部
木造木質推進部
兼務



平野尉仁
東畑建築事務所
本社オフィス 大阪



上田寛彬
環境創造
サポートセンター



増田敬彦
増田敬彦一級建築
士事務所
代表



加嶋章博
摂南大学
都市文化共生デザ
イン研究室



山本和宏
昭和設計
建築設計部



片岡政規
安井建築設計事務所
大阪事務所
設計部



〈編集サポーター〉
太田栄治
高松建設
東京本店



貴志泰正
貴志環境企画室
主宰

「計画」の概念を広げる「再生」

2026年度の「建築と社会」の年間テーマが「再生」に決まりました。われわれ計画分科会は、建築関連分野で「計画」と名がつくものであれば、基本的に何でも対象にしようとの姿勢で取り組んできました。私の専門分野である「建築計画」は、狭義には「生活空間を創造するために建築の内部で行なわれる生活や空間に対する要求を把握し、その生活がうまく機能するような形で空間を計画すること」ですが、広義には「建築の構造、材料・施工、環境・設備、歴史・意匠に関する諸技術や諸知識を総合し、これから建設する建築の全体像をつくる作業」とされています。

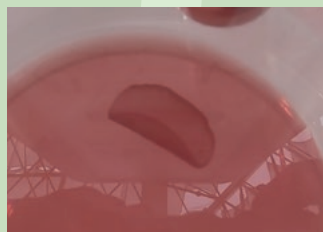
20世紀末頃から、人類の活動が地球環境に過大な負荷をかけることが問題となり、また日本では少子高齢化が急速に進展したことから、コンバージョン・リノベーションによる「建築の再生」が注目を浴びはじめました。その流れは「計画」の分野を直撃し、従来の「計画」の考え方に対する根本的な問い直しが迫られています。例えば、「建築計画」においては新たに「建築再生学」という分野が登場しました。「再生学」は、建築分野では始まったばかりで理論的に体系化されていない段階ですが、やがて大きな流れになっていくと思われます。「建築再生学」が目指す「再生」は、従来の修繕、リフォーム、リニューアルというまでもなく、コンバージョン、リノベーションをも超える概念を包括しています。わたしたちも、2026年度の活動を通して、建築と社会の「再生」とは何かを、「計画」の視点で考えてみたいと思います。

各委員による「再生」のとらえかた

「再生」の概念の拡張

吉村英祐

個人的には、まだ大阪・関西万博の余韻がさめやらないなかで「再生」と聞いて反射的に頭に浮かんだのが「大阪ヘルスケアパビリオン」です。このパビリオンでは、25年後の自分（アバター）と出会う「リポーン体験」、新技術開発などに取り組む中小企業やスタートアップ企業を応援する「リポーンチャレンジ」などが話題を呼びましたが、最大の目玉は、山中伸弥先生らが開発したiPS細胞による再生医療でした。定期的にゆっくり動く心筋シートを間近に見たときは、大きな感動を覚えるとともに、再生医療が本格的に始まることを実感しました。



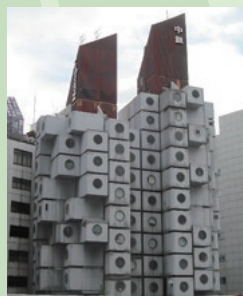
繰り返し動き続ける心筋シート（大阪ヘルスケアパビリオン）



ドバイ万博の部材が再利用されたウーマンズパビリオン

次に思い浮かんだのが、永山祐子氏が設計したウーマンズパビリオンです。このパビリオンは、ファサードとエントランスガーデンに、ドバイ万博で使用されたものを再利用しています。永山氏の取り組みは、1960年頃から始まったメタボリズムに通じるところがあります。メタボリズムの実作である中銀カプセルタワービル（1972年

設計：黒川紀章）は2022年に解体されましたが、中銀カプセルタワービル保存・再生プロジェクトが立ち上がり、状態のよいカプセルが各地で「再生」され、新たな用途で活用されています。これは、設計者も予想していなかったことかもしれません。



中銀カプセルタワービル



「再生」された23個のカプセルが世界中で展示・活用される

私は、メタボリズムの概念の拡張ともいえる新たな展開に、たいへん興味を持ちました。メタボリズムは実作が少なく、また半ば理論的に終わった運動でしたが、「再生」の時代に新たな形で進化・発展するかもしれません。

話を元に戻します。建築分野の「再生」は、まだコンバージョン・リノベーションの域を超えていません。医療分野における「再生」の概念や意味は、建築分野と大きく異なりますが、それゆえに建築分野の「再生」への新たな手掛かりが得られる可能性があります。X年後の「建築と社会」誌に、2026年は建築の「再生」の概念が拡張された記念すべき年であったという記事・論考が掲載される……。夢は大きいほど実現するものも大きく豊かになることを信じて、これからも活動していきたいと思います。

再生をユニバーサルデザインから考える

田中直人

再生とは、老朽化した建物や衰退した地域を単に「元に戻す」ことではない。時代の変化や人々の暮らしの在り方を踏まえ、既存の資源に新たな意味と役割を与え、再び社会の中で機能させる行為である。建築計画の視点において再生は、物理的な改修にとどまらず、人の関わり方や活動の内容まで含めて再構築するプロセスである。

ユニバーサルデザイン（以下UD）の視点から多種多様な活動が展開されているが、少数派であっても、特定の人々が感じている使いにくさを起点に、共に空間や活動をつくり上げていく共創の考え方である。

街の再生事例としては、尾道、小樽運河、熊本県荒尾市の万田坑などが挙げられる。いずれも役割を終えた空間や施設であったが、保存と活用を両立させることで、観光や交流、学びの場として再評価されている。

青森県黒石市では、雪や吹雪から通行者を守るために商家の軒先が連続する「こみせ通り」が、地域の生活空間として受け継がれてきた。人と人、人とまちをつなぐUDの考え方である（写真1、2）。



写真1 こみせ通り



写真2 こみせ通り案内サイン
(出展：黒石商工会議所)

計画分科会

その通り沿いにあった、かつて地域に親しまれていた銭湯を改修し、カフェとして再生した事例がある（写真3）。ここでは障害のある若者が接客を担い、来訪者と自然な交流が生まれている。雪国の暮らしを支えてきた空間構造を活かしながら、用途と担い手を更新することで、地域の中に新たな役割と関係性を生み出している点が特徴である。



写真3 「松の湯交流館」ここはかつての銭湯・松の湯で、現在は地域の交流施設・観光スポットになっている。



写真4 大島紬の伝統的柄を活かした商品開発

再生は建築や都市に限られるものではない。各地の特産物のアイデンティティの特徴を商品化させた事例も増えている。熊本郷土菓子であるいきなり団子は、家庭のおやつとして受け継がれてきた食文化であるが、現在では観光や食育を通じた地域活性化の要素として活用されている。また、超高級な織物として知られる奄美の大島紬も、着物としてだけでなく、バッグや小物入れ、羽織、スカートなど日常生活で使える形へと再生されている（写真4）。技術そのものは変えず、使われ方を現代の暮らしに合わせて翻訳することで、新たな価値が生まれている。

これらの事例に共通するのは、古いものを保存すること自体を目的とせず、それを媒介として人が集い、学び、関係を結び直す点に価値を見いだしていることである。再生とは、過去を抱えた空間や文化を未来の暮らしへとつなぐ計画行為であり、建築計画とUDの共創的視点が、今後ますます重要になるといえる。

傷も、しわも、美しいと思える社会へ

松田奈緒子

私は「再生」という言葉を、使われなくなったものに新しい命を吹き込むことだと考えてきました。でも最近は、むしろ古いものをそのまま大切に、長く使い続けることのほうに関心があります。正直に言えば、いまでも未使用で清潔なものは好きです。それでも少しずつ、古着を着たり、ヴィンテージの家具を使ったりするうちに、ほつれや歪み、時間を経たものがまとう静かな美しさに心が動くようになりました。フランスで少し暮らした経験も大きいと思います。そこでは、時間を重ねた建物や家具、そして人が、当たり前のように愛されていました。

一方で日本にも、わび・さびという、時間を愛でる文化がありました。けれど今は、新しさや若さが重宝される場面の方が多いのかもしれません。だからこそ、建物だけでなく、私たちの価値観も再生していけたらと思います。傷も、しわも、美しいと思える社会へ。その小さな転換が、未来を少し優しくするのではないのでしょうか。

「再生」の条件——残る建築と消える建築を分けるもの

浦山豊隆

昨年より、計画委員会の活動に参加しております、浦山と申します。本年度のテーマが「再生」ということになりました。

「再生」ということについて、数年前、建築家の坂茂さんの講演を聞く機会があり、その一部を思い返しました。

□紙の教会

阪神・淡路大震災があり、神戸で被災したある教会を、仮設として、紙管によって教会を建築することになり、その後十年間、神戸で使用され続け、ようやく本設の教会を建築しようという頃、1999年の台湾の大きな地震で被災した教会があったため、神戸の紙管でつくった教会を解体して、台湾に寄付しようということになり、移築、再建されて、台湾でコミュニティセンターとして、いまでも使用され続けている、とのことでした。

□赤坂プリンスホテル

赤坂プリンスホテルが築後約30年で、取り壊されましたが、構造素材として、鉄やコンクリートで建設された建築であっても設備の老朽化や最近のホテルの天井高さ比べて見劣りすることから、改修を行ったとしても、ホテルの商品価値としての豊かさを実現するにはおそらく限界があったということかと思われます。

坂茂さんの紙の教会は、仮設として生まれた建築が、愛されることによって、神戸から台湾にて移築され、「紙の教会」から「紙教堂」に再生し、現存している、一方で、赤坂プリンスホテルは、商品価値という波に押され、再生されることはなかった。

「再生」と聞きますと、「リニューアル」、「改修」をイメージしてしまいがち、いろいろな事例が考えられるかと思えます。

愛されている建築であれば、保存、再生されていくものなのかもしれないです。



飯田 匡
関西学院大学
建築学部
准教授



松田奈緒子
大阪産業大学
建築・
環境デザイン学部
建築・
環境デザイン学科
教授



田中直人
島根大学
総理工学部
建築デザイン学科
客員教授



山崎晋一
日建設計
都市・社会基盤部門
都市開発グループ
企画開発部
アソシエイト



吉村英祐
大阪工業大学
工学部
建築学科
客員教授



浦山豊隆
フジタ
計画設計第一部
課長

建築、都市空間に見る「サイセイ」

当分科会で建築や都市デザインにまつわる再生の事例を調べていく中で、機能の再生である修繕とは異なり、意匠や風景の再現の背景には記憶の再生があり、それこそが本質



Case.1-【スケールの再生】

吉田鉄郎の設計した旧・京都中央電話局（1926）は北側と西側の外壁及び奥行1スパンの躯体を残し、L型既存棟にコの字型新棟を加えた口の字構成で2001年に新風館として再生された。本誌では01/9月号や03/7月号等に取り上げている。私もそうだが平成後期の関西の学生で当地にてショッピングをした思い出のある方は多いのではないだろうか。

暫定開発を経て2020年にホテルや映画館、商業施設等を含んだ複合施設として生まれ変わった。電話局時代のレンガ意匠の再生や当地の庭の再生の他、隣接する姉小路通や東洞院通をつなぐように京都の町並みのスケールを感じさせる路地的空間が設けられ、地域との連続性を実現している。現地の記憶を再生した再開発事例とも言える。（杉江順哉）



藤原京跡 太極殿跡



藤原京跡 模型



コスモス畑

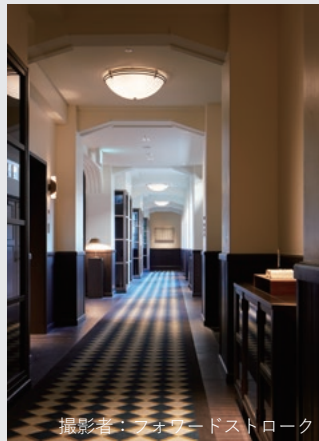
Case.3-【都の再生】

藤原京跡は、今から1300年前に存在した「都」を再生した場所だ。ただ、それはお城のように形を復元した「都」ではなくインスタレーションのみ、イメージでつくる「都」である。そこに立ち入れば、奈良盆地が広がり、大和三山（香具山、畝傍山、耳成山）に囲まれた風景が、万葉集の歌を想起させる。資料館にある模型と合わせれば、1300年前に暮らしていた人々の営みや踏み込んだ大地など空気が伝わってくる。また、そこに咲いているコスモスやナノハナ等の草花を見れば、1300年という長い時間の大地の風化と生命を感じることができる。あえてハリボテでつくり、復元しないことでイメージさせる「都」を再生させた事例である。

（平岡翔太）

Case.2-【思い出の再生】

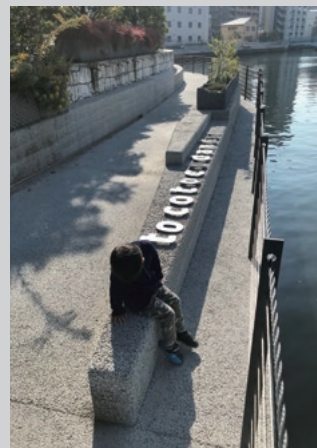
ザ・ホテル青龍 京都清水は1933年竣工の清水小学校をラグジュアリーホテルへコンバージョンした事例である。子供達が学んだ思い出の校舎であり、地域社会の中心でもあった建築をコンバージョンし、宿泊者のみならず地域の人々にも愛され続け、新たな思い出を生む施設として再生させた好例である。（篠木大輔）



撮影者：フォワードストローク



撮影者：フォワードストローク



Case.4-【ポテンシャルの再生】

トコトコダンダンという木津川の防潮堤周辺を遊歩道と広場空間に再生させたプロジェクト。単なる防災設備であった堤防を人の居場所として再生させた成功例。もともとあった周辺マンションの人の気配や植物などのポテンシャルを上手く活かし、かつての“水の都大阪”の記憶をも蘇らせることに成功している。

（桑原悠樹）

建築デザイン分科会

的に人々が建築/都市に求める「サイセイ」なのではないかという輪廓が見えてきた。ここでは各委員の着目するサイセイを紹介する。



Case.5- 【歩行者賑わいの再生】

かつて御堂筋道頓堀前橋廻りは歩行者が行き交い、多くの人々の賑わいがあったそう。車社会の発展に伴い車道が拡幅されていたが、現在では歩道エリアが逆転し、ゆとりある歩行空間となり観光客も相まって賑わいが再生されている。はり重や金龍ラーメン前は道幅も狭く、肩が触れるほどであったと記憶していたが整備後に歩いてみると、非常に開放的で道頓堀のネオンの写真を撮る多くの外国人やランニングをしている人、買い物客、飲み歩いている人…これまでとは違った大阪に見えた。ただ歩道幅が広がっただけで地味に思えるかもしれないが、都市景観や人の往来の変化・再生を知らず知らず享受していることもあると感じた。
(松本和也)

Case.6- 【営みの再生】

尼崎の森中央緑地は、製鉄所があった埋立地に生物多様性の森を再現する取組である。近年、尼崎の海岸沿いは工業地帯が埋め尽くしているが、元々は海辺に人や生物の営みが溢れる自然豊かな海岸であった。そこに地域生態系を考慮した苗木を植え、100年後には人や生物が集まる新しい森を市民活動で育てている。生態系保全活動を通じて、海辺の人の営みを再生している事例と言える。(田中和八)



田中和八
安井建設事務所
大阪事務所
建築設計



篠木大輔
大林組
大阪本店
建築設計



杉江順哉
梓設計
関西支社
建築設計



樋口展寛
鴻池組
東京本店
建築設計



平岡翔太
梓設計
関西支社
建築設計



米山剛史
ユー・アール設計
建築設計



松本和也
東畑建築事務所
本社オフィス大阪
建築設計



桑原悠樹
竹中工務店
大阪本店
建築設計



田中裕大
日建設計
大阪事務所
建築設計



小林啓明
鹿島建設
関西支店
建築設計



中村匠吾
大建設計
大阪事務所
建築設計

再生というテーマは、相当に使われてきたものであり、身近な言葉だ。現代日本社会は、一つの区切りとして戦後にスタートし、高度経済成長による発展、停滞を経て、80年経った今現在は何を目指すべきかが見えにくくなっていると感じる。

再生という視点で試される 価値を見出す選択力

—————空間デザイン分科会の皆さんが普段働いている中で感じる「再生」への考えや思いを教えてください。

東：まず、再生をどう捉えるか考えるかということについて話したいと思います。人間は長い時間をかけて進化してきたのに対し、近年のAIなどの技術の急速な発達を目の当たりにすると、生活が便利になるメリットを感じつつも、昔はよかったなと感じることもあります。しかし、これは回帰であり、再生とは違いますよね。ただ元に戻す、昔あったものを復活させることは再生ではないと思います。

2025年12月号の未来をテーマとした空間デザイン分科会の特集を思い返すと、リノベーションなど再生を含むプロジェクトがいくつかありました。それらのプロジェクトから、再生とは、過去の中にある本質的なものを探り、未来を見据えて進化させていくことではないかと感じました。つまり、何を選んで、何を守って、何を変えていくか。選択のあり方そのものが再生ではないかと思います。

また、AIは条件を入力すると無数の選択肢を出してくれますが、多くの情報を得られたら魅力的な解が得られるかということ、必ずしもそうではなく、むしろ振り切ったものやいびつなもの、バランスの悪いものから生まれるという感覚があります。正しいけれど平均的で可もなく不可もない意見よりも、個性的でユニークな意見が飛び交うディスカッションの方が面白いと感じる場面はありませんか？

清水：会話をしないと生まれないアイデアもありますよね。働く場所においては、単に仕事をし、情報をやり取りするだけでなく、人と人が出会い、雑談から生まれる突拍子もない意見や冗談を言い合える環境が、新しいイノベーションを生む上で大切なかもしれません。

宗田：私が入社したころはちょうどコロナ禍で、出社できない状況でした。対面での会議がオンライン会議に置き換わり、チャットなどオンライン上でのコミュニケーションが浸透していった時期でした。今は100%在宅勤務している方は少なく、対面でのコミュニケーションが復活しました。結局顔を合わせてコミュニケーションをとることが重要視されているように思います。

黒柳：確かに、最近の働き方の変化と言えば、AIの発達による影響が大きくなってきています。AIにできることはここ数年で広がり、議事録、翻訳、建築のバース作成までできるようになってきています。これからさらに技術が進化し、AIが仕事のツールとして当たり前になるほど、逆に建築家、デザイナー、設計者としての生の意見が重要になり、人間らしい人と人の関わり方や仕事の仕方が際立っていくように思います。

昔、図面やバースは全て手書きで、非常に人間らしいアナログな働き方をしていました。時代は変わってモノづくりは細分化、デジタル化し、さらにオートメーションが加わってくる。しかしそうなるほどに、人間らしさとの組み合わせが重要になってくると思います。ファッションと同じで、結局が一番大切なものは何かということに帰ってくるように思います。

清水：私も試しに仕事で検討している内容をAIに入力してみると、いくつもの選択肢が根拠も付けて一瞬で出力され、とても驚きました。便利に感じる一方で、怖くも感じたのが正直なところです。今黒柳さんのお話を聞いて、いくつもの選択肢がある中で、どの案を選ぶか、それをどう売り込むかという選択力・提案力が大事だろうと思いました。そういったところがこれから働く上で伸ばしていかなければいけない能力ではないかと感じます。

黒柳：AIに頼めば10通りでも100通りでも選択肢を出すことができるようになった一方で、あくまでAIは選択肢を出すツールであり、選択する行為こそが大切になります。また、事業主にとってもAIの浸透によって、選択肢が無数に増えています。その中で何をもって決定するかを考えると、「あの人が言っているから」という、人同士の信頼関係がより大切になるのではないかと感じています。AIによって人の働き方は変わる一方で、それによって人に対する評価が際立つようになってくると思います。

東：確かに、多くの情報を集められるという点ではもう人間はAIに及ばないかもしれません。一方で、自身の経験に基づく限られた情報しか集められないからこそ、それを咀嚼して吟味できるのが人間の良さですね。

—————働くことは生活の一部であり、住むこともつながりの深いことだと思いますが、住む場所や暮らし方、生活に纏わる再生については、皆さんいかがでしょうか。

佐々木：私は今、会社の先輩と一緒に、先輩が購入した山科の長屋を改修し、住まい手を募集するという活動をしています（図1）。古い長屋をわざわざ買い取ってお金をかけて改修することに対して、少し前であれば理解されなかったように思います。しかし、空き家問題が深刻化し、家が余っている今の時代だからこそ、古い住宅を改修して住み続けることに価値を感じる人が多く、社会全体の価値観が変わってきているのではないのでしょうか。

この長屋改修の活動では施工も含めすべて自分たちで行っています。自分たちの手で作業するからこそ、様々な発見や驚きがあります。長屋は眺望の良い場所に建っているのですが、改修の過程で景色が抜ける気持ちの良い場所を見つけました。改修しないと見つけられなかった景色だと思います。過去のいびつな社会構造の中で生まれた住宅の中に、かつて生きていた人の営みや場所の持つ魅力を再発見し、少しずつ形を整え直す作業こそが、住宅再生の魅力なのではないかと思います。

宗田：住宅の再生はその場所の魅力だけでなく、プロセス自体も価値となっている事例が多いのではないのでしょうか。住宅の持つ文脈を重んじ、新築にはない魅力を受容するという楽しさがあると思います。

東：教育現場にいて、活用されていない住宅や建築が若い人の目には価値のあるものに映ることもあると感じています。一から作るよりも再生の方が制約は大きく、佐々木さんの長屋の再生もAIに言わせれば「非合理的」という評価を受けるかもしれませんね。（AIは学習してそれらしい答えを出すかもしれませんが。）しかし、宗田さんがおっしゃるように、非合理性の中こそ楽しさと価値があるのだという一例だと思います。

空間デザイン分科会

ここ数年、数十年でドラスティックな技術進歩が起こるだろうと言われている中、それを取り込んだ上で先に進むためにも、日本の根底で本当の意味での「再生」が必要な時代なのだと思う。身近だからこそ重要な「再生」というテーマで1年間皆で掘り下げることは、とても有意義であり、ワクワクする。

2025年12月号特集のFILE06「森ある暮らしラボ」に取材に行った際に、大工の沖本さんが「いつ倒れてもおかしくない建物だが、その建物を倒すのは、まるで命を絶つようで忍びない」と思ったことが再生プロジェクトに繋がったという経緯が印象に残りました。その場に行ってみないとわからない、受け継がれてきたものに息づく記憶に触れ、そこに新たな用途や価値を吹き込むことができるのは、人の成せる技ではないでしょうか。

清水: 今まで丁寧に家を守って暮らしてきたということや、それまでどんな人が暮らしてきたかという文脈を大切にしている、人と人との感性が響き合うことで、こういった再生が実現したんですね。

黒柳: 私も15年ほど前、京都の町家を改修して住んでいました(図2)。明治時代に建てられた町家で、私の前に住んでいた方(ある職人さん)の趣味がいたるところに残っていました。特徴的な絵柄の襖もおそらく前住んでいた方が残していったものです。私も7年間住んでいる間に和紙のクロスを貼ったり、扉をつけたりと、居心地がいいように少しずつ自分で改修していきました。今住んでいる方も、きっと自分の好きなように改修して住んでいるだろうと思いますし、大切に住み継いでいくことで、前に住んでいた人の痕跡がどこかに残っていくことに魅力を感じます。

ちなみに、ヨーロッパの家具屋に行ったときに家具にタグが付いているものをみかけたことがあります。店主に聞くと、その椅子を代々所有してきた人の名前がタグに書いてあり、タグが多いほど家具の価値が高いと教えてくれました。こうした価値観は日本ではあまり一般的ではないので驚きましたが、様々な人の手に渡りながらも修理を重ね、使い続けることの価値を改めて感じました。

————— **教育の現場において「再生」はどう捉えられているのでしょうか。**

東: 最近は大学の設計課題でもリノベーションを題材とした課題が増えてきています。実際、町家再生の課題もあり、歴史的な町家も持っている価値を読み解き、住み続けるためのデザインを提案するというものです。人口減少が進み、空き家が増加する中で、現存する建物をどう活用するのか、縮小させながらどう残していくかということは、これからの社会において大切なテーマだと思います。

黒柳: 実際、若手の皆さんはそういった「再生」に関する課題はありましたか？

清水: 私自身は課題で再生に関するものはありませんでしたが、長屋改修や団地再生などの題材のコンペティションが多くあり、たくさんの学生が参加していました。土地に根付いたものづくりや建築に対して魅力を感じる学生が多いのではないかと思います。

佐々木: 学生の頃を思い返すと、再生に関する課題があるということではなく、古いものを大切にすることが普通で、当たり前だった感覚がありますね。

黒柳: かつて、改修は古くなってしまったものを新しく作り直すというイメージで、改修プロジェクトのことは「リニューアル」と呼んでいましたが、今や「リノベーション」という言葉が当たり前になりました。今回の座談会で話題に挙がった事例のように、景色や魅力の再発見、そして付加価値の創出が、再生の重要なポイントだと感じています。



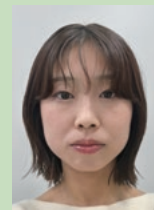
図1 改修中の長屋の様子



図2 何代も住み継いでいく京都の町家



黒柳 亮
竹中工務店
大阪本店
インテリア設計



清水香澄
安井建築設計事務所
大阪事務所
インテリア担当



今井充彦
日建設計
大阪オフィス
スペースデザイン



神田健吾
UR都市機構
西日本支社
技術監理(建築担当)



河西孝平
大林組
設計本部
建築設計



東実千代
畿央大学
健康科学部
住環境学



佐々木琉偉
積水ハウス
デザイン設計部
プロダクトデザイン



宗田菜々
竹中工務店
大阪本店
インテリア設計

構造設計者の懺悔ができる再生について考える (Q&A)

我々は考えました。構造分野からの「再生」とはいったい何を意味するのでしょうか？一般的には、耐震改修が頭に浮かびます。しかし、それは既存建物が前提の話であって新築時も「再生」を考えて設計を行うことが常識なのではないでしょうか。「再生」を意識して設計しなかった構造設計者たちがこの場を借りて懺悔したいと思います。

再生キーワード

材料再生…土木分野の研究ですが、電磁波で金属を再生、コンクリートの自己修復などが研究されている。材料リユースを前提として建築することを目の当たりにしたのが、2025関西万博だったのかもしれない。

震災復興…能登半島地震における伝建保存地区の復興を鑑み、文化財の保全・活用など企業・大学の研究レベルで進められるレベルなのでしょうか。

万博の後始末…仮設建築としての材料利用などいろいろな挑戦が見れた関西万博であったが、材料認定や法令上の問題などどこまで自由度が利くのでしょうか。



瀧野敦夫
大阪大学
大学院工学研究課
地球総合工学専攻
准教授

瀧野Q

「そもそも構造設計者のみなさんは設計段階で“再生（リユースも含む）”ということ意識したことってありますか？」との問いに、その場におられた全員が「考えたこともない」という返答でした。

改めて振り返ってみれば、私が学生の時は、スクラップアンドビルドという用語をよく聞いていて、その後、スケルトンインフィルや200年住宅（長期優良住宅）といったキーワードとともに、建物をどれだけ長寿命化させるのが重要なことであり、おそらく構造設計者もそのような意識の中で設計されていたかと思うと、当然の返答だったのかもしれない。

万博のような特殊な機会でもない限り期限付きの建物を設計する機会はなく、「再生」を意識した設計とは無縁だったと思われます。そこで、みなさんに質問です。これから再生（リユース）を踏まえた設計をするとなったら、どんなことを考えますか？万博の建物でもその他の一般の建物でも構いませんが、具体的な建物で自分だったらこんな風にリユース材として使ってみたいというものってありますか？



山下真輝
北條建築構造研究所
構造設計

山下A

私が「再生」を考慮したうえで設計したい万博の建物を挙げるのであれば、ブルーオーシャン・ドームのように、現在は建築材料としてあまり使われていない素材（ブルーオーシャン・ドームであれば竹、カーボンファイバー、紙管）を用いて、再利用を考慮した設計をしてみたいと考えました。また、都市部の設計では、荷重条件や建物規模の変化が激しく「再生」を考慮した設計は難しいが、幼稚園や学校建築は同じ敷地で建て替えられることが多い。そのような場合であれば、「再生」を考慮した設計として、杭の再利用や建築資材の再利用も考えられるのではないのでしょうか。

「再生」を考えた設計というのはこれまであまり行ってこなかったもので、この機会に半世紀から1世紀先までを考えた設計をし、スクラップアンドビルドではなく、未来を見据えた設計につながることを期待しています。



吉村純哉
竹中工務店
設計部
構造第2部門

吉村A



再生（リユース）を脱炭素や廃棄物削減の観点から考えると、愛され、使われ続ける建築の重要性に改めて気づかれます。伝統建築が再生・再利用され続ける所以は、美しい建築、空間、骨組が人々に愛されているからではないのでしょうか。高度成長期ではない人口減少時代の再利用像として、愛着の染みこんだ建築や部材のスケールダウンを想像するのも大切ではないかと思えます。例えば、あらかじめ、かぶり厚さを大きくとっておくことで、減築時に表面が中性化した壁も再利用できるかもしれません。応力が小さい範囲で簡易接合した梁部材の一部もリユースの可能性があると思えます。木質構造材から家具への転用は最も身近な気がします。消費される建築ではなく、再利用したくなる建築を目指し、強度や長寿命といった構造体の本質的な特性を損なわないまま、素直で美しい構造デザインを実現していきたいです。



古島正博
大林組
大阪本店
構造設計

古島A

構造設計を30年以上も行ってはいますが、再生の取り組みをしないといけないという意識を持ちながら、あまり成果をあげられていないのが実情です（反省。。。懺悔です）。阪神大震災後、旧耐震の建物を耐震診断により建物の耐力が不足していれば耐震補強工事（+改修工事）を行えば、建物を再生？しているのではと考えていました。

2000年代に入ると従来のスクラップ&ビルドの考え方から変わり、建物をより長く使えるようにと躯体工書の品質アップに対する取り組みが増え始めました。例えば集合住宅では住宅品質確保促進法で躯体に対する劣化対策等級が定められ、建物を長期間利用できるように構造設計者も具体的に考えるようになりましたが、再生の実現までには至りませんでした。大阪関西万博では閉幕後に構造躯体を解体して、次の建物に使う再生への取り組みのチャンスでしたが、残念ながら一部を除いて実現していないような気がします。鉄骨は接合部や継手の工夫によりリユースの可能性はありますが、コストや材料の品質保証など様々な課題を乗り越えなければなりません。

構造分科会



水島靖典
神戸大学
大学院工学研究科
建築学専攻
准教授

水島A

正直に言えば、私自身も懺悔から始めなければなりません。企業にいた頃、リユースを意識して設計したことは一度もありませんでした。大学に移ってからと同様で、研究テーマとして正面から扱ったことはありません。ただ、施工時の構造解析に携わる中で、仮設材が「使い回すこと」を前提に成り立っている世界を見えてきました。そこでは、劣化や履歴を抱えた部材をどう扱うかが常に課題です。本体構造と同じ性能を期待するのは簡単ではありません。さらに、市場価値や受け入れられ方には慎重であるべきでしょう。もし自分が長く使う建物のオーナーなら、あえてリユース材を望むかと問われれば、今のところ答えは少し迷いながらも「ノー」かもしれません。「適材適所」が新品を使った時以上に大切になるかもしれません。



藪田智裕
大和ハウス工業
本社総合技術研究所
住宅技術研究部
リブネスグループ

藪田A

リユース関連の研究開発ですぐに思いつくのは、例えば鋼構造の溶接部を高力ボルト接合部に置き換えられるよう、高力ボルトを用いた場合でも剛接合とみなせる接合部を開発することです。ボルトを外すだけで解体ができれば、溶接よりもリユースしやすいだろうと思います。一方で、色々な方にご意見を伺うと発注者側の利点が課題としてあげられると感じます。例えば店舗をリユースする場合は、同規模の店舗の閉店のタイミングと建設のタイミングが同じ場合にリユースを検討するため、閉店というネガティブな要素が先に立ち、ポジティブな要素が少ないのが現状です。研究者としては、例えば、解体や運搬を含めても大きなコストメリットがある工法の開発など、リユースにポジティブな要素を付け加えられる技術開発を行っていきたいです。



榎原啓太
日建設計
エンジニアリング
部門
構造設計グループ

榎原A

「オリンピックや万博で使用された材料」といった付加価値があれば別かもしれませんが、新築建物の構造部材に他の建物で使用された材料を再利用するという考え方は、投資者の立場に立って考えると、心理的なハードルが高く、大きな投資に対して容易には受け入れがたいのではないかと感じます。また、再利用を前提とするあまり、合理性を欠いた構造計画を無理に採用することは本末転倒であり、再生のあり方をより広い視点で捉える必要があるのではないのでしょうか。

構造部材の再利用に限定するのではなく、仕上げ材、設備、外構なども含めた建築全体としての「再生」を目指す中で、構造設計者として何が出来るのかを探っていきたいと考えています。



多田全希
東畑建築事務所
本社オフィス大阪
構造設計室

多田A

鉄骨分野ではスクラップから製造される電炉材、RC分野では建物解体時のコンクリート片を使った再生骨材など、材料まで立ち返れば再生できている部分もありますが、部材丸ごと再生（再利用）することを設計時に考えたことはありません。増築や改修をする際も、たとえ計算上OKであっても、既存構造躯体の耐力に期待するような設計はできるだけ避けたいと考える構造設計者が多いのではないのでしょうか？

再生する前提での計画となると、例えば鉄骨柱梁の部材長を規格化し、全てピン接合のブレース付きラーメン架構とした建物を多く作っておけば、数十年後解体した時に部材再利用がスムーズにできそうと考えたりもします。ただ、そこまで規格化された建物を構造設計したいと言われると…。本気で再生することを考えると、構造設計の面白味は無くなってしまいそうで怖いのです。



山本佳明
鴻池組
本社設計本部
建築設計第1部

山本A

万博のナショナルデーホールの設計初期のころ、意匠担当者から屋上の床材としてリユース材を使用したいとの提案がありました。構造設計者としては、仮設建物とはいえ不特定多数の来場者が歩く屋上に対し、強度の裏付けのない部材を使うことに抵抗がありました。

検討の結果、解体後の再利用を見据え、木材を極力加工せずには使用することになりましたが、その再利用先としても外装材などの非構造部材としての利用に限られると考えています。

建築材料のトレーサビリティが重要視される昨今、環境配慮という側面だけで構造部材を再利用することに建築主の理解を得るのは難しいのが現実です。設計者や建築主が納得して建築部材を再利用するためには、部材の耐力・耐久性の評価、解体や新設建物への取付などについての法律や技術の確立が必要ではないのでしょうか。



正野和司
安井建築設計事務所
大阪事務所
構造設計

正野A



私も皆さんと同様の感覚をお持ちで安心すると共に、気が引き締まる思いです。5年後に取り壊される仮事務所を設計したことがあります。経済性は意識することはあっても、「再生」を意識したことがなかったです。ただシンプルに仮設的な材料を選んではしまうと、空間としての魅力が下がってしまうと考えています。そのため、私は可逆的な材料の開発を行ってみたい。同時に、「あ！これが再生部材なんだ！」と目に見えてわかるような構造を取り入れた建築を世に浸透させたい。構造限界がますます盛り上がっていきますように。

それぞれの「再生」

新しさと再生の歴史

日本建築は伝統的に木でできており、西洋の石と比較してどちらが強いかは明白です。また、伊勢神宮の式年遷宮*や、「女房と畳は新しい方が良い」という、今となっては問題がある言い回しからもわかるように、新しい建物を良しとしてきました。

一見「再生」とは相反する伝統ですが、決してそうではありません。たとえば式年遷宮では、神宮で山を持ち計画的に木を育て、廃材は他の神社で利用し、若手で参加した大工が20年後に指導者として活躍するなど、サーキュレーションの知恵には目を見張るものがあります。畳も単に取り換えるのではなく、表替えをして大事に使ってきました。新しさと再生を見事に両立してきた歴史があります。(橋本直樹)

*『建築と社会』2013年3月号「伊勢神宮と式年遷宮／飯田喜四郎」



音楽聴くのも「再生」だワン (撮影／橋本直樹)

自己の再生

先日、健康診断の結果とともに「再検査」の通知をもらいました。今まで会社の健康診断では年1回の定期検診で問題のない健康体を維持していましたが、ついにこの時がやってきたと思いました。日頃のメンテナンスを怠るとこのようになるのだなと。

老朽化した建物でも躯体を残したままリニューアル、改修する案件も多く、既存を活かす取り組みは今後も重要な要素になっています。無駄を省き、より良いものに作り変える、まさに体の再生と同じではないでしょうか。体は替えのきかない大事な資本なので、まずは余分な肉を落とし、自己の再生を優先したいと思います。(仲村憲一)

毎年の「再生」

大学教員となり早8年。建築が時代の空気をまとうように、学生たちは社会の「今」を鮮明に映し出す。特に4月、新入生ガイダンスではじめて全員が揃う瞬間に立ち会えると、その学年特有の空気を肌で感じ、私自身も新鮮な気持ちに包まれる。

巷では「学生の線が細くなった」との声も聞かれますが、それは彼らが古い枠組みに縛られない、柔軟で繊細な感性を持つ証でもある。講義室や製図室、ゼミで見せる彼らの予想外のアプローチに、私自身がいかにも一義的な「正解」に囚われていたかを痛感させられることも少なくない。彼らを通して時代とのズレを直し、心をチューニングする。この毎年の出会いと摩擦こそが、私にとっての「再生」の儀式となっている。

(大橋 巧)

環境とは身のまわりの全てです。分科会のメンバーは環境すなわち身のまわり全てを良くしようと、いつも心を砕いています。

再生と向き合う

再生というとアンチエイジングを始めとする「再生医療」という文字が頭をよぎる今日この頃。日々のケアだけではなかなか追いつかないことが多々出てきます。設備機器や配管等も同じで、どれだけ日々メンテナンスをしていても限界はあり、更新が必要となります。設備機器類の寿命は建築躯体より短いので、設備を主体とした改修工事に出くわすことが多々あります。過去の図面を見ると、先人が創意工夫を凝らしていることに気づき学ぶこともあります。建築躯体にダメージを与えずに、いかに設備機器類を更新し建物を再生させるかには苦慮させられます。それぞれの時代やニーズにあった「再生」に近づいていくためには、AIなどの文明の利器を利用しつつ、自分自身の頭の「再生」も必要かと感じました。(寺井千佳)

再生の時代を生きる

建築の世界ではスクラップ&ビルドの時代はすでに終焉を迎えている。かつては時代を巻き戻すだけの単なる改修が多かったのではないかと思うが、最近では新しい価値を加え、建物を再生するものが増えてきたと感じる。その流れは私自身にも重なります。年齢とともに体は変化し、日々のメンテナンスが欠かせません。だからこそ、人生もまた再生し続けるべきもの。古きを活かし、新しきを加える——その姿勢の大切さを改めて感じました。(齋藤悠輔)

MOTTAINAI

少し前ですが、「もったいない」が世界に認知されたことがあります。そして、再使用、再生ということばも最近よく耳にします。再使用とは、一度使用したものを元の材料に戻すことなく、再び使い回す事、また、再生とは、そのままでは働かない状態から働く状態にすることとあります。資源の枯渇が危惧される中、古紙、アルミ缶、プラスチック、都市鉱山の資源利用、廃食用油からの航空燃料、帰還後再使用を目指す宇宙ロケット等々、そして建物も例外でなくリニューアルの動き、使い捨てでない多方面に亘る有効利用がこれからも加速することを望みます。(梶井貴廣)



MOTTAINAI名車 (撮影／梶井貴廣)

環境分科会

「再生」は環境を良くするために欠かせない重要なテーマです。これをお題にすると、メンバーから多種多様な考えが集まりました。環境分科会の頭の中を少し覗いてみてください。

「再生」への道しるべ

4月号特集は「再生」「もう一度生かす」という言葉で、建築でも多用される言葉である。だが再生からイメージする印象は電気工事業者であれば「再生可能エネルギー」が頭に浮かぶ。それは、「太陽光、風力その他非化石エネルギー源のうち、エネルギー源として永続的に利用することができる」と認められるものとして政令で定めるもの」と定義されている。石油は掘削し枯渇すれば終わりだが、再生可能エネルギーは「永続的に利用」と定められているので、心が和む。ただ、再生可能エネルギーはインシャルが高価なので、多用されない。建築物の再生も当然インシャルコスト・ランニングコストも必要で、今後の進展の要因は価格低減が一番に必要なのかもしれない。(北野勝也)

再び輝く

大量生産・大量消費の社会と言われるようになってから半世紀以上経過する。自分が子供の頃から3Rという言葉が社会一般には広がっていたが、最も馴染みのあるリサイクルという言葉に対し、それによって資源利用が抑えられている実感はあまりない。リユースという観点では、個人で容易にネット販売ができる時代になり、様々なものがリユースされやすくなった。一方、転売目的による大量購入など、大量消費の助長になっている矛盾もあるのではないかと。私は本来、3つ目の『リデュース』が最もシンプルで重要な要素だと考える。自分の生活においても、現在従事する設計業務においても、モノを減らすことをより意識したい。ちなみに最近では、自分が子供の頃遊んだおもちゃを自分の子供が使っている「再生」に感慨深さを感じている。(持留崇志)



遊び過ぎて腕がもげて「再生」！親子二代のウルトラマン人形 (撮影/持留崇志)

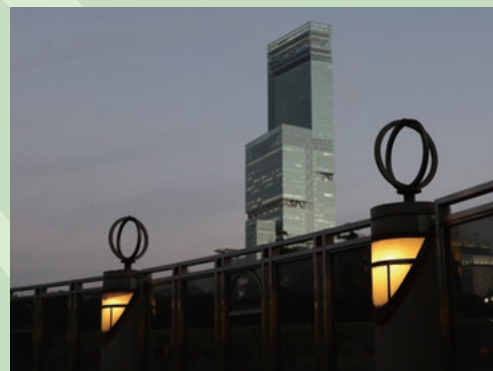
“つかいつづける”ということ

再生とは「役割を終えたものに新たな役割を与える」だけでなく、「同じ役割のまま補修しながら長く使う」ということも含まれている印象をもっています。どちらも「つかいつづける」という点は共通していますが、前者は「形を変え」、後者は「そのまま」という点において相違点があります。建築においては以前より「再生」という思想が浸透しており、近年は脱・炭素の切り口で、更なる追い風が吹いているように感じます。しかしながら、設備領域においてはまだまだ事例が少ないイメージです。今後の設備が「つかいつづける」ものとして進化し、社会に浸透していけば良いと切に感じます。(松本 健)

再生との関わり

「再生」ということばを紐解いてみると「人が場所や物と、再び責任を持って関わること」ということばがありました。非常に重みのある良いことばだと思います。歴史のある建築の再生にも大きな意味を持ちますし、人口減から生まれる空き家の活用の考え方にもつながることと思います。私に関わる「あかり」の面からも、使われなくなった建物や街並みに、照明によって人の気配や温度を取り戻す。あかるさを足すだけではなく、安心や記憶、人と場所のつながりが残るようなかたちを生みだしていければと思います。

(生野大輔)



古きを活かし、新しきを加える (撮影/榊井貴廣)



橋本直樹
日建設計コンストラクション・マネジメント
ユニットコーディネーター



大橋 巧
摂南大学理工学部
住環境デザイン学科
建築環境工学



北野勝也
きんでん本店
技術本部
電気工事



齋藤悠輔
大林組
設計本部
機械設備設計



生野大輔
コイズミ照明
近畿市場開発統括部
店舗施設開発



寺井千佳
安井建築設計事務所
大阪事務所
機械設備設計



仲村憲一
総合設備コンサルタント
電気設備設計・監理



榊井貴廣
総合設備コンサルタント
電気設備設計・監理



松本 健
竹中工務店
大阪本店
機械・電気設備設計



持留崇志
竹中工務店
大阪本店
機械・電気設備設計

ワクワクする「再生」

東海道新幹線の車両を再生

「グラビオルーバーUS/UBボルト固定式 新幹線再生アルミ芯タイプ」は、廃車となった東海道新幹線車両の車体に使用されていたアルミと、未利用資源である火山性ガラス質材料（シラス）を基材として作られた突板仕上げルーバー材です。駅舎の内装材などに使われています。

JR東海のアルミリサイクル技術とDAIKENの建材開発技術のコラボレーションによって実現しました。廃棄物と地域産材を使用可能にし、地球環境負荷低減・持続可能社会の実現に大きく貢献できる製品です。

環境課題に積極的に取り組み、地球にやさしい、人にやさしい社会実現に関わることは、全世界・全世代に共通する働き甲斐のある・やりがいのある仕事だと感じています。 (今井信之)



【アルミ芯材】東海道新幹線再生アルミ

東海道新幹線車両に使われていたアルミを活用。高純度のアルミ合金を抽出して再生アルミ合金ビレット（元素材）に成形。ルーバー芯材として再成形し、不燃化粧材でカバーリングしています。

画像提供/DAIKEN

万博・大屋根リングの再生

長く建設の仕事に携わってきた身として、大阪・関西万博で使われた大屋根リングの再生は、これからの建設業の姿を象徴する取り組みだと感じています。イベントが終われば役目を終えるのではなく、使われた木材を丁寧に解体し、次の建物や公共空間へと生まれ変わらせていく。そんな循環の考え方は、資源を大切にしながら新しい価値を生み出す、これからの建設のあり方そのものです。

木材は手を加えれば何度でも活かせる素材です。傷んだ部分を削り直したり、別の用途に加工したりすることで、万博の記憶をそっと残しながら、地域の建物や施設に新しい表情を与えてくれます。

建物も材料も、そしてそこに込められた思いも循環していくような、やさしい建設の未来を育てていくこと。それが、これからの私たちの大切な役目だと感じています。 (能瀬直樹)



会期中の大屋根リング (撮影/能瀬直樹)

循環型社会を形成するために、建築現場で大量に発生する廃建材の「再生」は建設リサイクル法など義務的に行わなければならないものが多いですが、もっとワクワクする

再生による私地公景への取り組み

再生とは「ただ修復するのではなく過去の思想を受け継ぎ未来の美学へと翻訳すること」。これは宝塚市の雲雀丘にある「旧安田邸」の再生に向けたプロジェクトのミッションである。大正時代に作られ、今や解体の危機にある建物を再生しようという住民らの機運により始まり出した。

20世紀初めまで米国で流行したクイーン・アン様式を取り入れ、洋風の暖炉がある一方で和室も設けるなど和洋折衷の独創的な構造になっている。大正期に開発された郊外住宅地・雲雀丘地区の代表的な建物の一つである。

宝塚市景観形成建築物である旧安田邸の保存・活用等を図ることにより、地域の景観及び発展に貢献する、との考えのもとにこのプロジェクトは今、動いている。地域住民としてバックアップしていきたい。

(吉田正友)



旧安田邸の現状 (撮影/吉田正友)

都市で続く建築の再生

建築の再生という言葉には、保存や改修以上の広がりがあるように感じます。たとえば旧九段会館の保存・再生は、歴史的建築をそのまま残すか、新しく手を入れるかという二択ではなく、都市の中で使い続けるという現実的な道を選び取った事例です。昭和初期の意匠と現代の耐震性や設備性能は、相性が良いとは言えません。それでも、その違和感を避けず折り返しを探っていく過程に、再生の面白さがあります。既存の躯体や仕上げを読み取り、新旧の材料や技術を重ねる判断には、決まった正解はありません。過去から引き継いだ制約は、厄介に見えながらも、発想を広げるきっかけになります。完成した建築が、新築とは違う表情を見せるのは、時間の積層を素材とともに受け止めているからでしょう。その先に、前向きな気持ちと呼び起こす、ワクワクする再生が立ち上がってくるのだと思います。 (上原秀介)



九段会館テラス (旧九段会館) (パース画像提供/鹿島建設)

施工材料分科会

「再生」について、当分科会のメンバーに論じていただきました。

再生で未来を創造する

山間に佇む古民家が、再び息を吹き返そうとしています。かつて人々の暮らしを支えた木の柱や梁には、木材特有の時の流れとともに刻まれた温もりが残っています。地域の人々は、この「古き良き」風景を未来へと繋ぐため、力を合わせて再生に取り組み、大工の技、職人の知恵、若者たちの情熱が交わり、ひとつの家が拠点として、住蘇るたびに、地域の絆も深まっています。また、観光客が訪れる新しい拠点として、住民が集う心のよりどころとして、古民家は再び地域の中心になっています。古を敬い、未来を紡ぐ風が確かに吹き始めていることは皆さんが感じるところだと思います。古民家の再生は、建築物の再生にとどまらず、地域住民のあらたなコミュニティを創りだしており、再生が未来のための創造につながっていることが重要だと考えます。(南野貴洋)

能登半島地震における黒瓦の再生

能登地方で使われている表裏両面に釉薬がかけられた黒瓦は海風や寒さに強く、この地域特有の美しい景観を形成していました。しかしながら、地震により黒瓦を葺いている数多くの家屋が倒壊しています。

「瓦バンク」は、壊れた家屋のまだ使える瓦を保管し、屋根用の建材としてだけでなく、住宅の意匠として、庭の造形として、あるいはアート作品として、再利用の方法を考える取り組みを行っています。「能登の伝統的風景を未来へと継承していくための共同プロジェクト」は黒瓦を粉碎しタイルなどの建材にアップサイクルを行っています。



倒壊した黒瓦を葺いた建物 (撮影/藤丸啓一)

災害により壊れた建物はこれまではそのまま処分されていることが多かったと思いますが、建材を再生することにより、地域の記憶を未来へつなぐ取り組みが行われています。(藤丸啓一)



最終処分場のどかな風景に！ (撮影/門野 陽)

本物みたいに再生

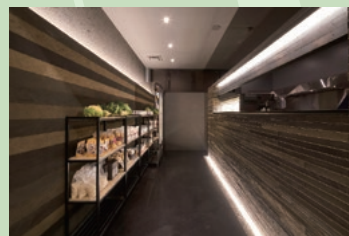
工事現場から排出される産業廃棄物の多くはリサイクルされ、同じ建材か形を変えて再利用（再生）されますが、リサイクルされなかった産業廃棄物は最終処分場に埋め立てられます。この最終処分場に対するイメージは、多くの方はマイ

ナスのイメージを持っているのではないのでしょうか。しかし、この最終処分場の跡地を公園としている場所がありました。もともとは谷地であったようですが、産業廃棄物で埋め立てられ、人工的にほぼ平らな形状の土地に整地され、時間をかけてどこにでもあるような自然の姿が再現されていました。リサイクル建材や循環型のリサイクルが脚光を浴びがちですが、最終処分場のこういうプラス思考の再生の取り組みを紹介しました。(門野 陽)

古くて新しい、循環のカタチ。

脱炭素社会実現に向け「2050年度までに、温室効果ガスの排出を実質ゼロにする」と政府の方針が出され、各企業が新たな取り組みを開始しています。キーワードは、①資源の循環、②自然・社会との共生という2点でしょうか。

“土”に着目し開発された内装デザインとして、ある店舗で土壁が既実装されています。日本建築に慣れ親しんだ土を主材に、建設発生土や藁スサ、おがくずなどの自然由来の素材を用いた土と木の積層壁で、種々の技術基準をクリアしているとのこと。一方、古民家（かやぶき家屋）をまるごと貸し切って使えるレンタルもあります。江戸時代後期に建てられた築およそ250年以上の歴史ある建物をリノベーションした“茅葺”一軒家の再生例です。ワクワクする「再生」の鍵となる建設副産物のリサイクル循環と適正処理および自然素材を活用した循環型マテリアル技術の応用例は、実はごく身近にたくさん触れる機会があるみたい。(河合智寛)



“土”壁の内装 店舗



“茅葺”古民家 (撮影/河合智寛)



藤丸啓一
清水建設
関西支店
建築技術
好きな四文字熟語
温故知新



今井信之
DAIKEN
市場開発部
特命担当
好きな四文字熟語
一期一会



上原秀介
鹿島建設
関西支店
施工管理・施工技術
好きな四文字熟語
泰然自若



門野 陽
鴻池組
大阪本店
品質管理・社員教育
好きな四文字熟語
切磋琢磨



河合智寛
浅沼組
技術研究所
建築材料・工事騒音
好きな四文字熟語
全力脱線



能瀬直樹
大林組
大阪本店
品質管理
好きな四文字熟語
悠々自適



南野貴洋
大和ハウス工業
総合技術研究所
地盤基礎研究
好きな四文字熟語
雲外蒼天



吉田正友
大阪工業大学
八幡工学実験場
耐火性能・火害診断
好きな四文字熟語
和敬清寂

①10年ぶりの再訪！龍谷大学深草町家キャンパス

京都市では、歴史的価値を有する建築物を後世に残すため、建築基準法第3条の適用除外規定を活用した京都市歴史的建築物の保存及び活用に関する条例を運用している。

その中で、同条例に基づく京都市初の法適用除外事例である「龍谷大学深草町家キャンパス」を、今回、10年ぶりに訪ねさせていただいた。当該建物は、伏見区の旧街道沿いに建つ文久元年（1861年）築の京町家であり、手続当時の2012年頃は躯体の傷みが激しい空家状態であったが、先祖から受け継がれた建物を再生したいという所有者の強い思いと関係団体の協力により、龍谷大学のサテライトキャンパスとしての活用・改修の方針が決まった。そして、法適用除外という手法によって、京町家の風情を残しながら増築・大規模修繕・用途変更などの工事が可能となった。

現在、同キャンパスでは、学生組織「京まちや七彩コミュニティ」による月見やもちつきなどの地域連携活動や、教員志望の学生が小中学生の学習支援を行う「京町家学習会」など、幅広い地域交流が行われている。また、正課活動であるゼミや、学生サークルの利用についても、コロナ禍の後、活動が再開されている。

通り庭では、おくどさん（かまど）を使って薪をくべて火加減を見ながら煮炊きを行う体験が人気であるとのことで、条例の手続時に設計者のこだわりによって、おくどさんが再現されたことが懐かしく思い出された。

最後に、多忙の中対応していただいた、龍谷大学REC京都様には、改めてこの場を借りてお礼を申し上げます。（奥山陽二）



通り庭とおくどさん



深草町家キャンパス外観



②再生し続ける、ゆるぎない存在～太陽の塔～

2025年8月27日、太陽の塔が重要文化財（建造物）に指定された。太陽の塔は当初、万博期間中のみ使用する仮設建築物として計画されたが、閉幕後にはその芸術的・文化的価値が評価され、高度経済成長期の日本を象徴する存在として50年以上にわたり保存されてきた。建築基準法上の扱いは仮設建築物から工作物へと移行し、長らく内部に人が立ち入らない状態で維持されていたが、近年の耐震補強や避難安全検証の実施により、現在では地下1階・地上2階建ての建築物として安全に利用できるようになった。避難安全検証法の性能評価を経て大臣認定を取得し、工作物から建築物へと再生されたことは、仮設建築物の保存と活用を両立した象徴的な事例である。さらに重要文化財としての指定により建築基準法第3条が適用され、今後も継続的な保存と再生が期待される存在となった。

また、太陽の塔はその強烈な存在感ゆえ地域に深く根つき、近隣住民にとって特別な親しみを持つ対象である。太陽の塔を模した小さな置物や土産品が各家庭でさりげなく飾られていることも多く、レガシーとしての枠を超えて、日常生活の中に自然に溶け込んだ身近なモチーフとして定着している。

さらに、太陽の塔が立つ万博記念公園周辺は、大阪中央環状線やモノレール、高速道路が交差し、大阪国際空港や千里ニュータウン、堺・泉北臨海工業地帯ともつながる交通の要衝である。万博当時のテーマ「人類の進歩と調和」に由来する「進歩橋」「調和橋」の周辺にはパナソニックスタジアムやエキスポシティなどが整備され、地域の再生と発展にも寄与している。

太陽の塔は、保存と再生を積み重ねてきた建造物である。その価値は、2025年大阪・関西万博の開催を契機としてさらに高まりつつあり、文化としても地域の象徴としても、これからも再生し続ける揺るぎない存在であり続けるだろう。（日下部美嘉）

参考文献

・大阪府：登録有形文化財（建造物）太陽の塔 調査報告書 令和6年11月<（本編）登録有形文化財（建造物）太陽の塔 調査報告書_241017（2026.02.01閲覧）>

③昭和モダニズム建築の再生：津山文化センター

法令分科会委員が考える建築物の再生として、私は津山文化センターを取り上げたい。こちらは昨年の11月に学生の建築物見学の引率で伺う機会に恵まれた。この建物は、設計：川島甲士、構造設計：木村俊彦、グラフィックデザイナー：粟津潔、陶芸家：白石齊4名の専門家によって手掛けられている。1965年築の昭和のモダニズム建築で、2020年にリニューアルされた。私が建物の特徴として最も目に惹かれたのは、やはり日本の社寺建築で見られるような斗拱構造で上階を支えている外観である（写真1）。この外観から、専門家による評価は高い。さらに、立地は津山城跡そばにあり、津山文化センターでの各種イベントに加え、津山城（鶴山公園）で行われるさくらまつり、もみじまつりなどのイベントもあり、市民に慣れ親しんだ場所でもある。リニューアル工事について、耐震改修に関しては、3層吹き抜けのホワイエに耐震壁を入れてはいるが、補強に対する平面計画の大きな変更は少なく済み、また、バリアフリーのためのエレベーターの増築工事は、この外観を尊重し、軽やかなガラスを用いたデザインで正面ファサードを避け、利便性のことも考え駐車場側に配置するなどの配慮が行われている。このよう

法令分科会

建物の再生は、ただ建物を残すことだけではない。保存に至るまでの経緯や思いを整理し、その後の活用、運用があって建物は再生する。

④鉄炮鍛冶屋敷の整備 建築基準法第3条の指定

鉄炮鍛冶屋敷は、令和2年度から進めていた文化財建造物としての保存修理工事を終え、令和6年3月より「鉄炮鍛冶屋敷（堺市立町家歴史館 井上関右衛門家住宅）」として公開されている。北旅籠町に位置する本建築物は、江戸時代にさかのぼる町家であり、その外観は歴史的町並みの重要な景観要素となっている。敷地は中浜筋から西六間筋までを一区画とする広さを持ち、主屋のほか、座敷棟、道具蔵、俵倉、附属棟などが建ち並び、江戸時代の鉄炮鍛冶の屋敷構えをよく伝えている。特に主屋は江戸時代前期の建築で、鉄炮生産の現場が残る全国唯一の建物として歴史的価値がきわめて高く、平成16年に堺市指定有形文化財となった。

この鉄炮鍛冶屋敷を保存活用するにあたり、住宅から資料館への用途変更及び大規模修繕を行う場合には、建築基準法が適及し、原則として現行法に適合させるよう改修する必要がある。

しかし、そのような改修を行えば文化財としての意匠等を保持することが困難となり、歴史的価値を損なうおそれがある。このため、建築基準法第3条第1項第3号の指定を行い、法の適用除外とすることとした。

こうして鉄炮鍛冶屋敷は、歴史的価値を守りながら新たな役割を担う場として再生を果たした。

(時見正人)



鉄炮鍛冶屋敷 内部



鉄炮鍛冶屋敷 外観

⑤震災遺構としての再生～能登町白丸郵便局～

2024年1月1日に発生した令和6年能登半島地震は、建築物やインフラに甚大な被害をもたらした。特に古い木造住宅は大きな損傷を受け、多くの住民が長期にわたる避難生活や仮設住宅への移転を余儀なくされた。復興への道のりはいまだ途上であり、石川県や被災市町による様々な取り組みが続けられている。

その中で、能登町白丸地区に位置する白丸郵便局は、地震と津波の両方によって甚大な被害を受けた。建物の外形はかろうじて残ったものの、特に開口部や内部は大きく損傷している。震度6弱（能登町）、津波高4.8m（白丸地区）が観測されており、郵便局の姿は自然災害の脅威を如実に物語っている。

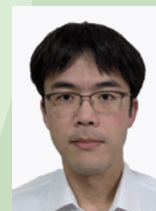
当初、白丸郵便局は公費解体が予定されていた。しかし、町の提案により2024年11月、震災遺構として保存されることが決定した。郵便局長から町への寄付を経て、石川県内で初めて自治体が震災遺構として保存を決めた建築物となる。能登町は保存のための予算を確保し、内部の修繕などを含む保存事業を進めていく予定である。一方で、東日本大震災の際には、被災した建築物を震災遺構として残すかどうかは、被災住民の思いを背景に大きな議論的になった。白丸郵便局もそのような議論の対象となり得る建築物ではあるものの、令和6年能登半島地震においては、初めて震災遺構として保存される事例となった。

震災遺構としての白丸郵便局は、「被災建築物」から、災害の記憶と教訓を後世に伝える「生きた教材」へと生まれ変わろうとしている。今後は、防災教育の拠点や地域資源としての観光活用も期待される。被災建築物が、地域の未来を支える新たな役割を担う——まさに「再生」の物語が、ここから始まる。

(吉田悠起)



被災した白丸郵便局（2024年1月29日撮影）
（出典：石川県「令和6年能登半島地震アーカイブ 震災の記憶 復興の記録」）



奥山陽二
京都市役所
建築指導課
建築指導行政



日下部美嘉
株式会社大林組
建築法制部
設計法制第二課



河野 学
関西学院大学
建築学部
教育技術職員



時見正人
堺市役所
建築安全課
建築指導行政



吉田悠起
三菱UFJ リサーチ
& コンサルティング
株式会社
政策研究事業本部
研究開発第1部
(大阪)

に、竣工時にある程度の耐震性があり、耐震補強や機能更新による大きな改修が抑えられ、市民からも慣れ親しんだ愛される建築物は再生され、建物の長寿命化につながるのだろうと、改めて感じた。（河野 学）

参考文献

- ・津山文化センターパンフレット（2025.11.15入手）
- ・津山市：津山文化センター耐震補強及び大規模改修事業基本計画説明書.平成29年7月<<https://www.city.tsuyama.lg.jp/common/photo/free/files/9900/201707281626030801969.pdf>（2026.01.28閲覧）>



写真1 津山文化センター外観（2025.11.15筆者撮影）

座談会：「再生」をめぐって

■導入——「再生」というテーマと座談会の流れ

岡村：本日はお忙しいところお集まりいただき、ありがとうございます。事前に皆さんにアンケートにご協力いただきました。その内容を拝見しながら、「再生」という今日のテーマにどのような共通点があるか、どんな切り口で議論できるかを整理してみました。

『建築と社会』2026年度の特集テーマとして掲げられた「再生」は、非常に幅の広い言葉です。アンケートを分類してみると、大きく次の4つの方向性が見えてきました。

1. 建築・公共空間・インフラの再配置・再編
2. 公園・ストリートなど公共空間の再生
3. 既存建築ストックの再生・保存活用
4. 資源循環・廃棄物の再資源化、地球環境の再生（リジェネラティブ）

もちろんこの4つにきっちりと当てはめる必要はありませんが、今日はこの辺りを主な軸として議論を深められればと思っています。

アンケートでは、再生の必要性そのものは多くの現場で共有されている一方で、

- ・コスト
- ・合意形成の難しさ
- ・判断主体の不明瞭さ
- ・評価制度がかえって足かせになること

といった「ボトルネック」も共通して挙げられていました。一方で、各所で確実に「再生」が動き始めている実感も書かれていて、そこに希望も感じました。

本日の流れとしては、まず皆さまお一人お一人から、

- ・ご自身の専門分野でどのような「再生」の実践をされているのか
- ・そこで生まれつつある新しい芽
- ・逆にどのようなボトルネックがあるのか

をご紹介します。その後、専門領域を超えてクロストークを行い、「再生を広げるための視点」や、日本建築協会・『建築と社

会』が果たせる役割についても議論できればと思います。

●自己紹介とそれぞれの「再生」

今井：DAIKENの今井です。建築資材メーカーとして、内装建材の開発・製造・販売を行い、一部は施工にも携わっています。『建築と社会』4月号（P26）では、新幹線の廃車両と自社残材を組み合わせたルーバー材について寄稿しました。

本日お持ちしたのは、天然木の突き板とJR東日本の新幹線廃車体アルミを組み合わせたルーバー材です。壁や天井に使えるよう商品化したもので、自社のボード材「ダイライト」と組み合わせたシリーズとして展開しています。

この開発は、「大量に廃棄されるアルミをどう価値化するか」という課題意識からスタートしました。廃車体アルミには使い込まれた独特の“表情”が残っており、突き板と合わせることで深みのある質感が生まれます。こうした“物語性”は実際の採用場面でも評価され、「建物のストーリーが深まる」とおっしゃっていただくことが多く、取り組みを続ける励みになっています。

一方で、通常品の約1.4倍のコストがかかることやロットの不安定さ、加工精度の確保など、普及に向けた現実的なハードルは大きく、採用はまだ限定的です。「面白い」「共感できる」という声を頂きながらも、広く使っていただくためには、まだ工夫が必要だと感じています。

井上：井上です。今日は大林組の設計者として、そして日本建築協会副会長として参加しています。近年は「保存活用デザイン」に関わる仕事が増えていて、帝国ホテル 京都（旧・弥栄会館）のプロジェクトでは、1936年竣工の建物の外観と構造を可能な限り残しながら、ホテルとして再生させる計画を担当しました。



提供：(株)大林組



提供：(株)帝国ホテル

日時 | 場所：2026年2月17日（火） 17：30～19：30 | 日本建築協会会議室
 出席者（順不同）：市川雅也／U-35委員会・竹中工務店、永田琴乃／竹中工務店、／今井信之／DAIKEN、安井さおり／東畑建築事務所、井上雅祐／大林組
 司会：岡村吉展／大林組

弥栄会館は、新築すると高さ12mまでしか建てられないエリアにあります。もし完全に建て替えると、ラグジュアリーホテルとしては採算が合わない。そこで、既存建物のシルエットを守りながらホテルとして必要な増改築を行うことで、町の風景と記憶を継承し高さの特例許可を得る、というアプローチを取りました。

南面・西面はおおよそ90年前の躯体と外装材を残し、北面・東面は一旦解体してタイルを生け捕りし、選別を行い南西面で再利用しています。テラコッタなどは落下防止対策を行い存置、銅板瓦葺屋根はすべて同じ形状で更新しています。ホテルとして機能するために窓も増えています。景観審査会では専門外の委員からも「前と変わらない」と言っていただき、「継承」としての保存再生が評価されたと思っています。

同時に、大阪のイケフェスなどの建築祭を見ていると、近代建築や保存再生への市民の関心は確実に高まっていると感じます。

永田：竹中工務店で設計をしています永田です。特定の分野に特化しているわけではありませんが、昨年「リジェネラティブ（再生）」をテーマとした社内海外研修に参加し「再生」に関連する様々な建築作品を見学したことや、ヘリテージデザインを専門とする設計事務所の講演会を社内向けに企画したことなど、保存・再生に触れる機会があり、そうした経験がご縁となって本日はお声がけいただきました。実務では、竣工から約30年が経過した某美術館の増築・改修プロジェクトを担当しています。展示空間や設備機能の増強、さらなるメンテナンスを行うことで、100年後も愛される、芸術・文化の発信拠点を目指して計画を進めています。

市川：竹中工務店の市川です。日本建築協会のU-35委員会では、大屋さん（大林組）をリーダーとして、私と倉知さん（日本設計）の2名が副リーダーを務めています。今日はU-35メンバーと、竹中工務店の設計者、その両方の立場からお話しします。

U-35ではパブリックスペースの再生に寄与する「nomadogi」という可動・可変できる木製家具を開発し、社会実験やイベントなどで使っています。社会実験のたびに安価な家具をレンタルしたり、創っては捨てる、倉庫に眠らせるといった状況に疑問を感じ、地域で共同所有し、日常はベンチとして、イベント時には組み替えて屋台等になるような家具として企画しました。現在は京都を拠点に、貸し借りのネットワークが広がりつつあり、その場所の特性に合わせて日々使われ方が変化しています。

また実務では、「おにクル」という公共施設の設計と、その周辺エリアのまちづくりに関わっています。大学院ではランドスケープを専攻



nomadogi

していたこともあり、「都市をランドスケープの視点から再生する」ことに関心を持って取り組んでいます。

安井：東畑建築事務所で機械設備（空調・衛生）の設計をしている安井です。入社後、岡山県真庭市でバイオマス熱源空調のプロジェクトに携わった経験があり、「エネルギー循環・再生」の視点でお話しできればと思います。

真庭市は林業が盛んな地域で、木材の端材からペレットやチップを製造し、地域でエネルギーとして活用する取り組みが進んでいます。その中で、冷暖房の熱源をバイオマスボイラーとし、地産地消の燃料で快適な熱環境を実現すべく取り組みました。ペレットよりも加工度が低く、コストの安いチップを積極的に使うことで、その土地ならではの循環モデルを模索しました。

また、同志社大学・致遠館の建て替えでは、「記憶の継承」をテーマにした設計に携わり、その中で設備はどうあるべきかを考えました。

●ZEB（ネット・ゼロ・エネルギー・ビル）評価制度、そしてリジェネラティブの本質

岡村：アンケート回答で気になったのが、安井さんが書かれていた「ZEB認定が逆に動きを悪くしている面があるのではないか」という指摘です。私自身も現場で似た感覚を覚えることがあり、とても共感しました。

安井：ZEBが言われ始めた当初は、皆よく分からないまま、とにかく断熱を厚くする、窓を小さくする、高効率機器を入れる、という発想で手探り状態でした。ところがだんだん計算ロジックが分かってくると、「ZEBの点数になるか（BEI値低減に寄与するか）どうか」が優先され、設計で本当にやりたいことが後回しになる場面が増えてきました。



致遠館でカーペットから穏やかに気流が立ち上がる「全面床染み出し空調」を採用しました。風が直接当たらず、冬は床暖房のように足元から暖かく、非常に快適性が高い方式です。蓄熱効果もあり居住域空調なので、省エネルギーにも寄与します。当時はこうした方式を積極的に提案できましたが、近年ではZEBの評価項目に適合させようとすると機器選定が難しく、コストも上がるため、同じような提案がしにくくなっているのが正直なところ。快適性と機能性を両立する良い方式でありながら、評価制度の枠組みによって選択肢が狭まってしまふことへの課題を感じています。

井上：本来の目的は「人が快適に過ごせる空間」をつくることであり、省エネもその一部のはずです。計算テクニックの開発競争になってしまうと、本末転倒ですよね。

市川：おにクルでは、全フロアに床輻射空調を採用しました。コンクリート躯体に冷温水管を打ち込んで、床全体を静かに冷やしたり温め

たりしています。ZEBの計算上は大きな加点にはならないのですが、長く使われる公共施設としては、レイアウトが変わっても快適性を維持しやすい“インフラ”として重要だと考えました。

実際にはZEB-Orientedの認証やCASBEE-Sランクも取得していますが、「ZEBを取るために床輻射をやった」というより、「人にとって心地よい空間を長期的につくるために必要だからやった」という順番です。

岡村：ある大規模再開発では、一期では自然換気を大胆に取り入れたファサードや通風ボイドなど、空間と環境の工夫に積極的に挑戦していました。しかし二期に入る頃には、「ZEBさえ取得していれば良い」という空気が強かったのか、そうした取り組みが姿を消してしまったように感じました。実際に完成した建物を見たとき、本質的な工夫が削がれつつあることに、強い危機感を覚えました。

一方で、永田さんの海外研修では「リジェネラティブ」という言葉がキーワードだったと思います。サステナブルとの違いについて、もう少し詳しく教えていただけますか。

永田：一般的に、「サステナブル」は環境へのネガティブな影響をできるだけ減らし、「これ以上悪化させない」ことを目指す考え方を指します。一方で「リジェネラティブ」は、あらゆる領域でポジティブな影響を生み出し、より豊かな地球を未来に引き継ぐことを目指す概念として用いられています。



現地を見学する前は、「先進的な技術や環境再生の手法を取り入れれば、リジェネラティブは実現できるのではないか」と考えていました。しかし、実際に訪れてみると、日本と極端に異なる技術や手法による事例ばかりではなく、むしろ身近な取り組みも多くみられました。

こうした見学体験を通じて、最近では、リジェネラティブを実現するうえで重要なのは「手法そのもの」よりも、様々な領域でポジティブな循環を生み出すための「アプローチ」や考え方そのものなのではないか、と考えています。

●嫌われ施設を「愛される山」に

永田：印象的だったのが、デンマークのコペンハーゲンにある廃棄物発電施設「Copen Hill（コペンヒル）」です。山がないコペンハーゲンのコンテキストを逆手に取り、「ゴミ山で山をつくる」という壮大な発想のもと、発電所の屋根全体にスキーやハイキングが楽しめる人工



茨木文化・子育て複合施設おにクル_床輻射空調

の山がつくられました。15万世帯分の電力を供給するインフラ施設でありながら、生物多様性を育む立体的な自然公園でもあり、地域の憩いの場でもあります。楽しく、そして環境への意識も醸成される。国内外から観光客が訪れるランドマークとしても親しまれていました。

また、通常焼却場と聞くと「臭



Copen Hill外観

い・汚い・近くにあってほしくない」というNIMBYの対象になりやすいです。Copen Hillでは、その価値が「YIMBY（自分の裏庭にあっても良い）」と思える存在へと転換されていました。

●実験区デクーベルと「続けられるかどうか」

永田：オランダ・アムステルダムでは、工業地域の造船所エリアを再生した実験区「De Ceugel（デクーベル）」を見学しました。土壌汚染が進んだ土地を再活用するために、期間限定で開始されたサーキュラーエコノミーの先進的なプロジェクトです。

ここでは、植物を活用した土壌再生や、ハウスボートのアップサイクルなど、多様な循環システムが導入されており、少ないエネルギーで活動するための様々な試行が行われており、これらの仕組みが実装されれば、環境負荷の軽減に大きく貢献できる可能性があると感じました。



De Ceugel アップサイクルされたハウスボード

一方で、こうした新しいスタイルを広く普及させていくためには、精神的な面でも設備的な面でも、誰もが取り組みやすく、継続できる仕組みづくりも重要だと思いました。

私自身、建築における「リジェネラティブ（再生）」とは何かについては、まだ模索している段階ではありますが、現時点では「環境に良いから我慢する」という発想ではなく、事業者・利用者・地域・環境が互いに利益を生み出す循環を意図的に組み込むことだと考えており、ポジティブな相互利益のループをデザインすることが、リジェネラティブ（再生）の本質なのではないかと感じています。

市川：エコ→サステナブル→リジェネラティブと、言葉だけを見ると時代ごとの新しさが強調されていますが、1990年代半ばに唱えられた「ランドスケープ・アーバニズム」という理論では「土地の視点で都市課題を統合的に解決する」という考え方があり、土地の再生までを包含していました。言葉は変わっても、本質的な価値観は連続していると感じます。

●共感を軸にした建築の価値形成

岡村：お話を聞いていて、ZEBの話も、リジェネラティブの話も、根底には共通するテーマがあると感じました。それは「共感をどう生み出すか」という点です。ZEBは単なる評価制度ではなく、「ZEBなら環境にいい建物だ」「価値がある」という、社会が納得しやすい共感の枠組みとして機能しています。



おにクルの床吹き空調の心地よさは、利用者の身体感覚として共感を生むものです。

さらにCopen Hillの事例は「いいよね」っていうファンが増え、共感によって、ポジティブな価値へ転換していました。「共感」が一つのキーだと感じました。

その意味で、おにクルで床吹き空調を導入された際、どうやってその価値を関係者に共有し、合意形成したのか。設計側でどのように“共感の仕組み”として位置づけ、進めていったのかをぜひ詳しく伺いたいです。

市川：床輻射空調の導入は、建物を長く、市民が主体的に使い続けられる場にするために不可欠だという判断から提案したものです。

もともと茨木市長が「箱モノ建築にしない」ことを非常に重視していたのも大きな背景でした。建物をつくる前から、市民が公共空間をどう使いこなすかを「練習する場」が必要だという考えがあり、旧市民会館跡地につくられた「実験広場：IBALAB@広場」では、約6年間にわたって市民と一緒に公共空間の使い方を試し続けていました。

その結果、おにクルが完成した瞬間から、市民側に

「この場所で何をしたいか」

「どう使いたいか」

という具体的なイメージが自然と湧き上がる状態になっていました。つまり、建物ができる前から“使いこなしの文脈”が育っていたわけです。私たち設計側はその文脈を踏まえ、用途が変わっても、レイアウトが変わっても、どの場所においても快適でいられる空間の基盤として、床輻射空調が最も合理的だと判断しました。風の偏りがなく、長期的に柔軟性が保てるという点は、まさに「箱モノにしない」という市の方針とも合致していました。

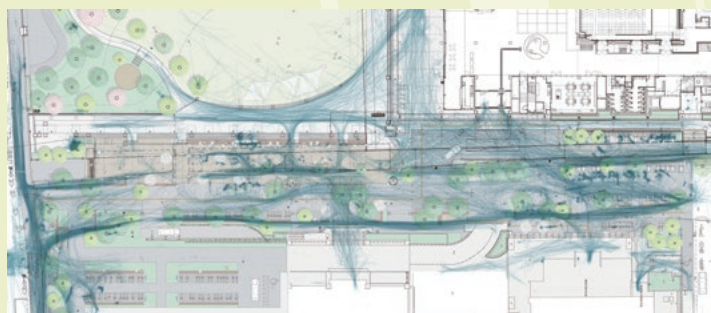


■都市空間・nomadogi・万博——再利用と再生の境界線

●道路空間の人流から考える再生

市川：茨木市では、おにクルと市役所の間を通る道路空間のあり方を見直すプロジェクトも行っていきます。かつては車にとって重要なルートでしたが、現在は交通の役割が変わり、別の道路ネットワークで十分補える状況になってきています。

そこで一時的に車の流れを止めて社会実験を行い、人流データを計測しました。幅8~10m、長さ50mほどの空間の中で、人が実際に通っている場所／ほとんど通らない場所を可視化し、その結果をもとに「流動のためのスペース」と「滞留のためのスペース」を再構成する計画です。



人流測定をベースとしたストリート再編計画

単に「並木道にしよう」「ベンチを置こう」という発想ではなく、人の動きを根拠に配置の手掛かりとすることで、行政や周辺関係者への説得力が格段に増しました。道路も公共空間の一部と考えれば、限られた公共空間の面積をどう再分配して、まちの好循環を生み出す為に充てるかが大事だと考えています。

井上：「かもしれない」ではなく、実測データをもとに議論できるのは大きいですね。都市も建物と同じくコンテキスト（文脈）を持っており、それを読み直して再編集する行為こそ再生だと感じました。

●再生とは、止まっていた価値を動かし直すこと

井上：改修と新築、という議論は建築単体ではよく行われますが、都市のスケールで見れば、新築とは「都市の改修」と言える。そこには敷地にも建物にも固有のコンテキストがあり、都市としての文脈が生きていて、その読み取り方も様々ではありません。だからこそ、「再生」という言葉の定義は簡単ではないと感じます。

再生という言葉には、元に戻すという修復的な意味だけではなく、本来あるべき姿や、使われるべき状態へと向かって、止まっていたものを再び動かし出す、というニュアンスが含まれているのではないのでしょうか。「再生」といえば、今や懐かしいテーブルデッキの「再生」ボタン。ここでの再生とは、「聴きたい」という意思がボタンを押す事を促し、その結果潜在的なコンテンツや価値が「顕在化」する、とも捉えられます。このテーブルを「再生」という行為が、単なる再生ボタンの操作以上の意味を持つように、建築や都市の再生もまた、価値の向かう方向を問い直す行為だと思います。

市川：道路のあり方も同じですね。20年、30年前には「正しい」とされ、高い価値を持っていた道路空間が、時代や社会の変化によって、その価値を更新する必要に迫られる。かつての役割を否定するのではなく、今の都市にとってどう位置づけ直すか、という視点が求められていると感じます。

井上：再生は一度きりの行為ではなく、連続して行われるものだと思います。京都でよく言われる「伝統とは革新の連続である」という考え方のように、再生もまた、過去を断ち切るのではなく、積み重ねながら更新していくプロセスです。そうした連続性があるからこそ、建築や都市は持続的に生き続けることができる。再生とは、その継続を支えるための行為なのだと、今日の議論を通じて改めて感じました。

●再利用から再生へ——思想と物語

井上：物としての再利用であっても、そこに意志や思想、さらには共感が伴えば、それは「再生」と呼べる行為になっていくのだと思います。先ほど触れた、建て替えると高さ12mしか確保できず採算が合わない、というのは一つの現実ではありますが、その前提として、その建物自体が長く愛されていて、残したいあるいは残るはずという想いが共有されていた。だからこそ、結果として一部は物として再利用され、建物全体としては再生へと向かったのだと思います。再生が成立するためには、やはり思想や意図、そして共感が欠かせないのではないのでしょうか。

岡村：材料の世界でも、単純な再利用や再資源化——例えばチップにして溶かし直す、といった循環以外に、何か別の潮流は生まれてきているのでしょうか。

今井：メーカーの立場で言えば、物流や保管の問題、不純物の混入をどう取り除くかといった現実的なハードルは依然として大きいです。ただ最近では、養生材や戸建て住宅の耐力面材に使われるインシュレーションボードなどでは、ほとんどバージン材を使わず、建築廃材由来のチップが主流になっています。需要が高まり、むしろ品薄になりつつある状況です。呼び方としてはリサイクルかもしれませんが、確実に循環は進んでいます。

岡村：私たちの新事務所でも、床材に長年工事現場で活躍してきた足場板を使いました。使ってみると意外と反りも少なく、乾燥しきっている分、今でも安定しています。材料は、うまく回していけば、使い込まれることで味わいだけでなく、性能自体も高まっていく。結局は物流や保管の工夫が鍵なのだと実感しました。

今井：そこに加えて大事なのが、共感や物語の部分だと思います。その足場板が、どこの現場で使われてきたのか、といった背景が分かるだけで、材料への向き合い方は変わる。そうした物語が共有されて初めて、単なる再利用が「再生」として受け取られるのではないのでしょうか。

●万博パビリオンの「再生」は本当に実現しているか

今井：少し話題を変えますが、大阪・関西万博のパビリオンや大屋根

構造の「再生」は、実際どの程度進んでいるのでしょうか。当社にも大屋根リングの木材をリユースできないかという相談がありましたが、条件面などから実現しませんでした。

岡村：『新建築』の万博特集を読むと、多くの作品が「再利用可能なディテール」をアピールしていますが、「行き先が確定している」のはごく一部です。一方、ドバイ万博では、会場の多くの建物をそのまま残し、市街地として活用する方針が採られていました。

日本では「技術的には再生は可能だが、実際には解体され、せいぜい再資源化どまり」というケースが多く、仕組みや文化、政治としての“次の使い道”の設計が追いついていないと感じます。

市川：再利用は「場所を変えてもう一度使う」ことですが、再生はもう少し概念的で、資源や空間にどんなストーリーや思想を与えるか、という部分まで含むと思います。

●nomadogiと小さな循環のコミュニティ

市川：U-35で開発したnomadogiは、家具レベルではありますが、資源の小さなサイクルを回す実験です。最初はホームセンターなどで購入可能なツーバイフォー材で製作し、社会実験やオフィス、協会事務所の改修など、これまでに6～7回用途や場所を変えながら使い続けてきました。

京都では、FabCafe KYOTOにストックしておき、使いたい人が自分の車で運んで借りていく、といった貸し借りも生まれています。今はお金ではなく、「使った様子をSNSで発信してもらう」ことを



nomadogi

対価にするなど、緩やかなコミュニティとして運用しています。追加で製作したいときは、誰かの予算でつくった分を全体のストックに加え、みんなで資源をシェアしながら、個々では持てない量の木材を使うようにする、そんな関係性も生まれてきました。

安井：その木材は今どのようなものを使っているのですか。

市川：現在はツーバイフォー材が中心ですが、今後は京都産材「みやこ杉木」など地域材への切り替えも検討しています。ストーリーとしてはそのほうが筋が通るのですが、コストとのバランスもあり、試行錯誤しているところです。

井上：nomadogiのように、使い方や場所を変えながら「物語」が蓄積されていくと、それ自体が再生の一部になりますね。単なる再利用ではなく、共感や意図が伴って初めて「再生」と呼べるのだと改めて感じました。

■協会の役割、世代を超える共感のネットワーク

●協会という「ゆるやかな共同体」の力

市川：nomadogiの活動がうまく回っているのは、日本建築協会という「会社を超えたゆるやかな共同体」があるからだと思っています。協会には、設計者だけでなく、メーカー、行政、大学の先生、施工者など、多様な立場の人が参加しています。



協会の改修工事では、会員である工務店の方が制作に協力してくださったり、U-35の活動を通じて培ったネットワークが所属する組織でのプロジェクトに活かしたりと、組織の枠を越えたスパイラルアップが起きています。

今井：協会は中立的な立場で情報発信ができるので、「建築版のメルカリ」のような、利益追求とは違うかたちで資源や知識の循環を支えるプラットフォームになれる可能性もあるのではないかと感じます。

井上：メーカー、行政、学校、設計者、施工者……さまざまな立場の人が集まるからこそ、一つの課題に対して多角的な見方ができるのがこの日本建築協会の強みです。困っている当事者だけではなく、「別の角度から見ている友人」がいることで、課題の再解釈や解決策のヒントが得られるのではないのでしょうか。

●U-35と「35歳」という絶妙なライン

市川：U-35は、35歳で必ず世代交代が起こる仕組みになっています。行政の方からは「常に若い世代と付き合える組織」という点が評価されました。新陳代謝を続ける組織体であることが特徴です。メーカーの若手開発者などを招いた「建築と集合知」というイベント（本誌2026年2月号参照）では、普段表に出てこない商品開発の担当者と設計者がフラットに議論しました。

終わった後も「自分が開発した材料がどこでどう使われているか初めて知った」といった声があり、同世代の価値観を共有・共感しながら一緒にものづくりを考える場になっています。

安井：社内でも、上司には聞きづらけれどネット検索だけでは不安、ということはよくあります。協会のような場で「ちょっと教えてください」と言えるネットワークがあれば、若手にとってはとても心強いと思います。

●縦の蓄積と横のつながり

市川：一方で、協会には長年の活動の蓄積や膨大な資料がありますが、若手がそれを十分に活用できているとは言い難い面もあります。協会誌や蔵書の充実ぶりは、改修プロジェクトで初めて意識したくらいでした。

井上：大学にもないような古い雑誌や貴重な資料が揃っていて、研究者の方が閲覧に来られることもあります。こうした「縦の蓄積」と、U-35のような「横のつながり」をどう結びつけていくかが、これからの協会の課題でもあり、可能性でもとらえています。

■まとめ——再生に必要なのは「共感」という土台

井上：今日の議論を通じて見えてきたのは、「意思や共感がなければ、再生は単なる再利用にとどまる」ということです。物を残す理由、循環させる意図、地域や利用者の思い——それらがそろって初めて「再生」と呼べるのだと思います。今年度のテーマに「再生」が選ばれたのは非常に良いタイミングであり、協会こそこの議論を深めるのにふさわしい場だと改めて感じました。



2025年度 特集テーマ「未来」について編集・企画に携わった委員によるあとがき

①万博の体験や1年間の特集企画をふまえて自分が感じた「建築」や「社会」の「未来」

②2025年度の特集記事の中で印象に残ったものと感想



三宗知之
編集企画委員会
2025年度委員長

万博は建築や場所の力を再認識させてくれた。DXは革命的であるが、やはりリアルが人を感動させるのである。10月号の「未来のものづくり」は日本のものづくりの再興を感じさせてくれ、未来への期待を感じた。近年ようやく経済の停滞感に動きが感じられるようになったが、協会誌制作に関わる中で多くの「明るい未来」が見えた気がする。また様々な技術の進化とともに複雑化する社会の中で、まだまだモノや建築を創ることに意義があるような気がして少し嬉しくなった。



古谷隆祥
編集企画委員会
2025年度副委員長

未来を年間テーマに視野を広げた1年となった。中でも12月号特集では、「想像した未来、創造する未来」とし思いをカタチに奮闘されている多様な活動を目の当たりにし、カタチにすることの大切さと魅力を再確認した機会となった。今年は特集記事に加え、分科会・小委員会の会員による万博レポートも現地のリアルな時間や様子が捉えた貴重で有意義な取り組みとなった。これからも顔やカタチの見える誌面づくりを心掛けたい。



澤田純一
ひと・まち・建築
小委員会
2025年度小委員長

特集ページの取材のため6月下旬に万博会場を訪れた。取材後せつかなので、会場内の各国パビリオンを見て回った。非日常の「未来」空間は建物の外観を見て回るだけでもとても楽しかった。たそがれ時、会場を出る前に冷たいビールを一杯!! 暑い中を歩き回った後のビールはとても旨かった。この先、社会がどんなに変わっても、想像がつかないような未来が訪れてもこの味だけは変わらないでほしい、そう思いながら会場をあとにした。



吉村英祐
計画分科会
2025年度委員

2024～2026年度の年間特集テーマは、順に「トランスフォーメーション」「未来」「再生」ですが、並べてみると、相互のつながりが浮かび上がります。テーマは編集企画委員会で自由に議論して決められますが、これはまさに編集企画委員会の「集合知」の賜物でしょう。印象に残った特集は、われわれ計画分科会が担当した「EXPO2025は何を拓くのか」-2025年大阪・関西万博を終えて(2026年1月号)です。産みの苦しみが大きかった分、特集号を手にしたときの喜びはひとしおでした。他の特集号とともに、時代を記録するという使命を十分に果たせたのではないかと思います。



正野和司
構造分科会
2025年度幹事

大阪・関西万博『EXPOcolumn』では、8月号にて空間デザイン分科会とコラボさせていただきました。その後の座談会でも現地に行けなかったメンバーと話が弾み、面白い特集記事になったと自負しています。万博会場は「実験建築の集積」であり、技術が空間に落とし込まれた姿は未来の建築の在り方を強く示唆していました。この経験が、各世代の構造設計者はどう感じているのだろう…という11月号の構造特集に繋がりました。ご協力いただいた皆様に感謝いたします。



橋本直樹
環境分科会
2025年度幹事

①万博は未来への期待を感じさせてくれました。一方で、日常は「もう第三次世界大戦は始まっている」という声が聞こえてくるほど物騒で、暗い未来ばかり感じられます。「平和」とは誰もが明るい未来を疑わない状態であると気づきました。
②11月号 構造分科会 40年以上前の学生時代に、「趣味の構造力学」という本の存在を知り驚いたことを思い出しました。特集を拝見し、みなさんが構造という仕事に真摯に向き合いながらも、楽しそうだと感じたからです。



松本和也
建築デザイン分科会
2024年度幹事

①わたしはこれまで開催された万博へ行く機会がなく、昨年あった大阪・関西万博がはじめての万博であった。世界各国が手を取り合って輪になるような万博を体感できたことと、この体験が大阪で過去(1970)とも繋がった開催ということが大変意義深いと感じた。
②担当した8月号の総論に万博プロデューサーの1人である福岡伸一先生に寄稿いただいたことは「建築と社会」誌で将来に亘って残る記事として個人としても嬉しく思った。



古島正博
構造分科会
2024年度幹事

①大阪関西万博には何度も足を運びましたが、数多くのパビリオンの素晴らしさと創意工夫を自分の目で見て感じ取ることができました。万博のレガシーをこれからの若い世代が引き継いでくれるのを期待しています。
②1月号「EXPO2025は何を拓くのか」では万博を終えてリングの残しを取り上げられていましたが、閉幕後に構造躯体を解体して次の建物に使う再生への取り組みはこれからの課題だと感じました。



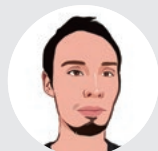
桑原悠樹
編集企画委員会
2025年度副委員長

9月号では、未来のまちづくりをテーマに多岐にわたる視点の論考が取り上げられ興味深かった。最小限の手数で既存の価値を有効活用しながら最大限の効果を発揮することが大切な時代になってきた。既存の枠組みの中では限界が来た時に、デジタル技術や伝統技術の導入を駆使し、法解釈を見直すことで新しい価値が発見される可能性がある。その先に見えるものが来年度のテーマである「再生」につながっていくのではないかと期待している。



岡村吉展
編集企画委員会
2025年度委員

昨年11月に編集企画委員の委嘱を受けました。1月号「EXPO2025は何を拓くのか」は興味深い内容でした。万博設計には関わりませんでしたが、協会に新たに加わった立場として、万博のその後の評価を客観的に見つめていきたいと考えています。パビリオンやイベント施設などが示した未来は何だったのか、妥当だったのか、また今後の「建築」と「社会」に適応するには何がネックか、一つずつ検証することが真の「未来」につながると思います。



杉江順哉
建築デザイン分科会
2025年度幹事

- ①自分が中高生だった平成中期に比べ、現在は同時代性を感じにくいように体感しているが、万博の持つエネルギーには社会のうねりのようなものを感じた。人の根源的な祝祭への欲望、集合への欲求は未来でも変わらないであろうから、そこに建築の可能性が見える気がした。
- ②12月号の空間デザイン分科会の特集は未来につながる種々の取組みの紹介となっており、委員の集合知から生まれたバラエティに富んだ内容が興味深かった。



黒柳 亮
空間デザイン分科会
2025年度幹事

大阪万博で、その熱気と共に私が特に感じたのは、「未来社会」とは「社会課題の解決」に直結しているということ。そしてそれは様々な視点、文化、哲学によって多様性があり大いに勉強になった。又、本年の記事の中にNEXT21（5月号）があったのは大変面白かった。学生時代に100年先を考えた住宅として興味深く見学した記憶が鮮明に残っている。時代に合わせてアップデートされ、フェーズ毎に課題に取り組む長期的実験住宅を更に未来まで見守りたいと思う。



藤丸啓一
施工材料分科会
2025年度幹事

- ①万博というお祭りが終わって寂しいですが、これから万博で見た未来が少しずつ現実になっていく、あるいは現実になっていかない様を見ていきたいと思えます。急遽始まった『EXPOcolumn』の取材で万博に行ったのがいい思い出です。
- ②5月号環境分科会の「企業ミュージアムは未来を拓く窓」さまざまな会社のミュージアムを取り上げられており興味深く、機会があれば訪問したいと思えました。過去の積み重ねがあつての未来です。温故知新は大事です。



野野 学
法令分科会
2025年度幹事

万博は向かうべき未来の都市・社会を人々に問かけ、またそれを積極的に示してきたと考える。例えば、日本館で展示された藻類スツールやバイオガス発電は、循環社会としての未来の一つを示しており、このような技術が、「建築」や「社会」に広まる可能性がある。2025年の記事の中で私の印象に残ったものは、2025年12月号の大阪・関西万博の風景（2026年1月、2月も継続掲載）である。四半世紀後、この記事を見て、このころの思い出に浸りたいと思う。



門野 陽
施工材料分科会
2024年度幹事

- ①7月号の分科会万博レポート企画の取材が初めての万博でした。直前の編集企画委員会でコロナ企画となり不安いっぱいでしたが、意外なことに会場内を散策するだけで発見があり、施設の外観を眺めるだけでも楽しめる万博なのだと思えました。
- ②5月号の企業ミュージアム、一同に並ぶと圧巻でした。昔のアイデアや取組みが今に繋がり、それが繰り返される未来にも繋がる。施工材料分科会の4月号の企画と重なる部分が多く、印象に残りました。



吉田悠起
法令分科会
2024年度幹事

- ①過去と現在の積み重ねによって未来が形づくられることを改めて実感した。大阪・関西万博でも、未来社会を提示する展示が並ぶ一方で、1970年大阪万博へのオマージュや当時の内容を踏まえた表現が随所に見られ、未来像が歴史の延長線上にあることを強く感じた。
- ②5月号環境分科会「企業ミュージアムは未来を拓く窓」：過去の蓄積を未来へつなぐ視点が印象的で、各社の工夫が興味深かった。

連載をはじめるとにあたって —その意図と背景—

武庫川女子大学 教授 石田潤一郎

■連載企画の契機と目的

生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪、通称イケフェス大阪において、ここ数年大林組主催プログラムに協力してきた。2023年度には大阪公立大学 倉方俊輔教授と共に、「関西モダニズムにおける大林組旧本店・大林組設計部」と称したトークセミナーにて講演を行い、また2025年度は、「大林組設計部1905年発足！“石田潤一郎”が選ぶ戦前の建築家たち」および「天神橋の“おおばやしむら”本店ビル西館（1964）の再評価」と称する特別展示に関わりと同時に、特別展示パネルを前にした“ギャラリートーク”を行った。主催者から、トークセミナー、特別展示ならびにギャラリートークに関して、好評であった旨を聞き、一安心している。

この2025年度の、「大林組設計部の歴史および大林組の建築家達（戦前篇）」と「天神橋の“おおばやしむら”本店ビル西館（1964）の再評価」の展示について、学識経験者や設計従事者を含む多くの参加者から、「ドキュメントとして残すべき」との声が挙がったと聞く。

そこで今回の企画と繋がるのであるが、「建築と社会」への連載にあたり、“社会性”について語るべきであろうと考えた。一企業の歴史や実績を振り返りながら、当時の社会、すなわち“同時代性”に目を向ける事とし、次の2点に目的を集約する。

1. 大林組設計部の歴史および実績を改めて社内外に正確に述べる。
2. 一企業の歴史を切り口として、“同時代の「建築と社会」”について語る。

独立系建築家、組織設計事務所、他のゼネコン設計部の動きなど。

1892年創業の大林組は、現在スーパーゼネコンと呼ばれている会社の中では、比較的遅い創業ではあるが、その動きを通して、改めて時代を俯瞰する試みである。

連載としては、4月から3か月おき、合計4回を予定している。各回で大林組の当時について述べ、3か月後にそれに応答した“同時代性を語る”という形である。従って、初回4月号では大林組設計部の1920～30年代を述べ、次回7月号ではその同時代である戦間期の建築界と社会について語り、さらに大林組の1950～60年代を述べる。10月号で戦後1950～60年代、27年1月号で1970～80年代の同時代性を語る予定である。

右の写真は大阪歌舞伎座（1932年竣工）の東北隅階段室の見上げである。このような斬新な造形がなされていたことを知る人も今はないが、ドイツ表現主義を咀嚼したデザイン手法にほかならない。未だ知られていない、あるいは忘れ去られた歴史や実績から、何が浮かび上がるのであろうか。



大阪歌舞伎座「東北隅階段室」
「建築と社会」1932年11月号

■変革の時代を生きる

大林組設計部は1905年（明治38）に発足した。この年は、歴史に詳しい読者はすぐに気付くように、日露戦争に勝利した年である。日露戦争は巨大な分水嶺として日本近代史に横たわっている。人々は「一等国」になったと歓喜するとともに、明治国家がめざしてきた「坂の上の雲」が消えた空虚感を味わう。誰もが「新紀元」の到来を感じることになる。この文化的・社会的画期に大林組設計部が生まれたことは注目されてよい。

もう一点、今号で眼を向けたいのは、紹介される作例に四角いビルと小住宅が多いことである。戦前は官庁官営が大きな力を持ち、建設活動の中核になっていた。また各財閥も充実した官営組織を備えていた。その構図の中で、建設会社設計部はいわば街場の建設需要を受け持ってきた。一般の「民」が洋風建築を求める契機となったのは第一次世界大戦（1914～1918）がもたらした社会的変化であった。この変化の端的な反映がオフィスビルの出現と郊外住宅の発達である。

二十世紀初頭、ゼロ年代と20年代前半とにおいて継起した変動は建築においても大きな画期をなした。大林組設計部が成立され、その地歩を固めていく過程はよくこの時代と重なっている。それゆえ、この組織のあゆみを語ることを通して、時代の総体を語る事が可能だと考えた。本連載のタイトル「同時代の「建築と社会」」には、大林組設計部の活動と「同時代」との応答を浮き彫りにしたいという願いが込められている。

連載を始めるにあたり、まず、いわば総論として1910年代から20年代の建築の世界において何が起こっていたのかを概観しておきたい。

■1910年代の煩悶

1910年代前半つまり明治末期の転換はさまざまな角度から訪れた。

まずアール・ヌーヴォー、ゼツェッションなどの世紀末造形の情報が伝えられた。「ぬーぼーとした顔立ち」という表現がある。「つかまえどころのない」といったニュアンスであるが、これはアール・ヌーヴォーの曲線的造形に由来する。新しい語彙を生むくらい広まったのである。

一方で鉄骨、鉄筋コンクリートといった新構造の情報ももたらされた。技術としての性能が高いというにとどまらない、何か建築全体を変える画期となるのではないかという予感をもって迎えられている。

建築思想の面でも、ジョン・ラスキン、ウィリアム・モリスら、今日、アーツ・アンド・クラフツ運動と総称される建築観がさかんに紹介される。ここで、さらにもう20年遡ってみよう。われわれは「様式主義」という言葉からは意匠と構造のズレに無反省であり、創造性などは軽視するといった態度を連想する。しかしそうした建築観は1890年代にはすでに批判されていたという事実がある。武田五一が自分が受けた、つまり1894年から97年までの辰野金吾の教育について「シャムコンストラクションだのスレーピッシュコピーだの善くないことは随分耳にタコの出来るくらい聞かされた」と回想する。sham constructionは、たとえば木造の建築の表面に煉瓦を貼って煉瓦造に見せかけるといった偽装構造の意味であり、slavish copyは独創性のない丸写しの意味である。さらにいえば、19世紀の様式選択主義、折衷主義は行き詰まりの現象であるという認識も広まりつつあった。こうした素地の元に、明治後半になると、ラスキンの倫理意識やモリスの様式批判は深い共感を持って受容されていた。

もう一つ、日本固有の問題として日露戦争勝利後の一等国意識に対応した民族的表現の希求があった。当時の言葉を使えば「日本趣味」の導

入である。すでに1890年ごろから西洋への同化を志向する「欧化主義」に反発して、日本の特質を生かした近代化を志向する動きがあった殊に日清戦争勝利（1894～95）によるナショナリズムの高揚は文化面にも現れた。そもそも19世紀は、民族性とその文化的特徴が強く意識されてくる時代であり、また折衷主義では、さまざまな様式を、意匠に新機軸をもたらすため、あるいは社会的要請に応えるために組み合わせ、変形するのは自然なことであった。

日露戦後にいたって、欧米と対等になったという意識から、これからの文化の創造には日本も参加できるはずだという気概が高まる。建築においてもいわば「日本の現代建築」を創造しようという機運に発展する。おりしも1908年（明41）に議院建築（国会議事堂）の新築計画が浮上し、その設計者選抜方法とその意匠のあり方が建築界の重大問題となる。1909年に建築史家の伊東忠太は「建築進化の原則より見たる我邦建築の前途」を発表して、日本建築は木造で培われた形式を元にして石造に進化することを説いた。日本固有の建築様式という問題は1910年には建築学会が「討論会「我国将来の建築様式を如何にすべき乎」を開催するほどの注目を集める。

こうした、あらゆる局面での変化に直面して、建築家は「覚醒し」「煩悶」したのである。だが、言ってみれば建てられるビルディングタイプは前代と変わっていない。3階建てまでの公館か企業社屋、学校であった。それを「復興式（ルネサンス様式）」で設計するか「セセッション式」にするか、煩悶といってもその判断の難しさであり、冷たく言えば肚を括ってエイヤツで決断してしまえば、あとは自ずから建ち上がっていった。

1920年代はそうではなかった。問題は、鉛筆と製図板の間だけで起きていたのではなかった。鉛筆を持つまでに問いただしたい不満があり、描かれた図面が実体化するまでの過程もまた未知の世界として広がっていた。

■第一次大戦期以降の社会変化と建築

19世紀、「都会」は建築物の背景として華やかに広がっていた。あるいは新しい建築を待望する舞台としておとなしやかに静まっていた。しかし、日本が産業革命に成功したことによって、農村から労働力人口が「都会」へと流れ込む。市街地では過密居住と住宅不足が惹起し、近郊は工場とその労働者住宅の簇生によって蚕食される。「都市問題」の発生である。

こうした趨勢を加速させ、社会不安を引き起こしかねない水準にまで激化させたのは第一次世界大戦が引き起こした未曾有の好景気だった。大戦景気による企業活動の活発化と投機の盛行は驚くほどの地価の暴騰を招いた。1919年、北浜の地価は前年の坪1700円が4500円を付けている。家賃は高騰し、借家は払底した。一方で、会社が盛んに新設され、

そのためにオフィスの床需要が急増し、「ビルディング」が続々と建てられる。

従来、都市の整備は土木工学の領分とされてきた。街路の造成や河川の整備がその中心だったからである。しかし、都心にビルが揃ひし、周縁においては郊外住宅地という新しい生活空間が生まれる。ここにおいて、建築にたずさわる者は都市の空間と活動とを見つめないわけにはいかなかった。その視野に映るのが、先に触れた「鉛筆」の手前と「製図板」の先にわたる領域である。

その領域を大きく3つに分けてみよう。ひとつは都市問題に露呈する社会的矛盾への眼差しである。村野藤吾は早稲田大学の卒業論文（1918年）『都市建築論』の「結論」において「私は一個のBuilderである事よりも一個の社会改良家でありたい」と書き付ける。あるいは分離派建築会の一員であった矢田茂は東京帝国大学の卒業設計（1920年）で「職工長屋」をテーマとする。自分の設計する建築は民衆のために役立つのか、その疑問がこの時期、開花していく。それはやがてモダニズム建築に結びついていくことになる。

二つ目はオフィスビルを孵化器とした建築の「性能」への眼差しである。大戦期に関西随一の設計事務所の地位を獲得した渡辺節の建築事務所はモットーに「安く、早く、良く」を掲げた。工期の短縮を重視した施工計画、関東大震災以前から耐震性に立脚した構造と充実した設備は、まさに経済活動の装置としての建築がめざす性能を具備していた。

合理主義は住宅改良運動にも通底していた。床座よりも椅子座を、接客よりも家族団らんを推奨する科学主義が生活空間を染めていった。その趨勢は密かに建築の概念をも変えようとしていたのである。

三つ目に西洋文化との共時性というべき性格を挙げたい。

平たく言うと、海外の文化現象が時間差無しで到来するようになったのである。この事態の代表が映画である。さらにグラフ雑誌、レコード、ラジオ、岩波文庫の赤帯（翻訳小説）など、戦間期の欧米の情報が生きのよいまま享受された。タイムラグのなさは建築においてもあてはまり、たとえば1929年刊行の田辺泰『近代建築様式概観』には、1931年に完成するファン・ネレ煙草工場が早くも「すこぶる明快」と紹介されている。そこでは、明治時代のように主流を見定めて正統的な傾向だけを学ぼうといった外発性は消えて、今の自分が求めているものを貪欲に取り入れる主体性が成立している。

問題意識の拡大は、いみじくも日本建築協会の結成の動因でもある。「現代の建築は其の関連する方面実に広範にして…各自相扶け最善の努力を以て其の解決に励む」ための団体——その組織化を唱えた片岡安がみずから会長となって1917年に関西建築協会を結成する。もはや欧米のお仕着せをキャッチアップする時代ではなかった。真の20世紀が日本でも始まろうとしていたのである。



浜甲子園健康住宅地開発 1929

1905（明治38）年に誕生した 大林組設計部と建築家たち（戦前篇）

武庫川女子大学 教授 石田潤一郎（企画構成 大林組 井上雅祐）

■1905年 建設会社の中でいち早く「設計部」を組織した大林組

建築の設計という行為と施工というそれは果たして明確に区分できるのであろうか。幸田露伴『五重塔』に美化されたような、棟梁による普請では設計と施工が一体化しているというべきであろうし、経済活動として捉えるなら、異なる主体による峻別すべき業務と考えたくなる。日本の近代洋風建築の出発点に目を向けると、事態はさらに微妙である。辰野金吾が屋根葺き材のスレートを成形する器具を留学先の英国から持ち帰ってきたというエピソードが示すように、いや、辰野についていうならば、一度は日本土木（のちの大成建設）に籍を置いたという行動が示すように、日本に西洋建築を定着させるには、設計と施工が一心同体で取り組むべきという観念が、明治10年代には存在した。

しかし、辰野金吾の日本土木入りは2ヶ月ほどで終わり、同じく工部大学1期生の佐立七次郎が藤田組に就職したもののすぐに退社した。この事態に見てとれるように、西洋近代的建築家像と近世的な請負業のあいだには深い溝がたしかにあった。それゆえ洋風建築の技法が定着してくると、外部の設計者が基本設計をなし、建設会社の技術者は施工図を整えて現場に出るという分業が通例となる。そこではおのずからアーキテクトが施工業を指導し鞭撻するという上下の関係が成立する。監理の厳格さが武勇伝のように語られる時代だった。

そんななかでも建設会社においては、設計施工一貫を理想としたい思いがあった。施工図の作成だけにとどまらず、自ら基本設計をおこなう能力を備えたいという願いは消えることはなかった。日露戦争の後、その動きは明確なものとなる。明治38年、大林組が海軍省技師の船越欣哉を技師長として招く。また清水組は田辺淳吉ら3人の東大卒業生を相次いで設計担当として雇う。大林組は明治45年に木子七郎、竹中工務店は大正3年に藤井厚二を採用し、設計施工一貫の体制が形作られていくのである。そうした動きの中で、従来、製図場、技術部などと呼ばれていた設計担当部職員のグループが「設計部」の名を与えられ、設計専門の陣営を作ることになる。そうした中、大林組は特に早く、明治38年に「設計部」を組織している。

大正期は建築の変革期であった。意匠の変化以上に、構造技術があらたまり、設備面でもめざましい発展を遂げる。構造設計家が設計部に加わり、意匠設計担当者と一体のチームを組んだ。大林組では黒田茂、竹中工務店では青柳貞世、清水組では海野浩太郎と、それぞれに構造設計の立役者が腕を振るった。設備設計は外注する状況が続いたが、大林組では昭和6年に電気設備の専門家として杉浦豊を設計部に招いている。こうした動向の中、大林組では昭和初期には、技術系の新入社員は全部設計部に所属し、1～2年の見習期間内に各人の適性を観察して、設計部あるいは現場に配属されるシステムを築いた。

■建設会社の設計組織

あらためて明治中頃まで遡って、建設会社内の「設計組織」の形成状況を見てみよう。

1884年（明治17）8月、藤田組、佐立七次郎を招聘。

1886年（明治19）2月、辰野金吾、大倉喜八郎率いる大倉組に入社。

1886年7月、清水組は、技師長として工部大学3期生の坂本復常を招き、設計部の原型である「製図場」を設置した。

1887年（明治20）大倉組と藤田組が統合、日本土木会社設立。工

部大学卒業生5名（田中豊輔、鳥居菊助、中浜西次郎、新家孝正、船越欽哉）、留学経験者1名（高原弘造）を擁した。

1891年（明治24）清水組、内務省技師・渡辺譲を3年契約で招くとともに岡本釜太郎（帝大選科明治23）、藤森松太郎（工手学校2期生（明23年2月））、神谷邦叔（帝大選科明24）、田島禎造（帝大明25）を採用し、設計を担当させる。同社はさらに明治36年以降、田辺淳吉、北村耕造、田中實ら東大卒業生を採用していく。

■「建築家と現場をつなぐ」役割

明治中後期の建設会社設計組織の役割について『清水建設二百年生産編』は次のようにいう。「最新の職能としての設計技師の知識と技術体系を理解し、もう一方では符牒飛び交う伝統的な生産様式をとどめる工事現場と連携するため」であり、「設計技師が描いた基本設計図をもとに、実際の工事にあわせて詳細な図面を起す施工図作成」が主要な業務だったと。そうした性格のため、設計担当職員は「図工」と呼ばれ（『大林芳五郎伝』）、職場は「製図場」と呼ばれた（『清水建設二百年』）。また技師長格（たとえば清水組における田辺淳吉）もしばしば現場に出向いていた。

■大林組の登場

大林組は1892（明治25）年の創業と後発ながら、1905（明治38）年に「設計部」を設けた。清水組がそれまでの「技術部」を「設計部」と改称したのが1916年（大正5）、大倉土木が「設計係」を設置したのが1925年（大正14）であったからきわめて先駆的であった。

1905年（明治38）に呉鎮守府建築課長の船越欣哉（工部大学校明治16年卒）を技師長として招聘したのに続き、1911年（明治44）に藤泉賢四郎（後大林賢四郎・同年、東大卒）、木子七郎（同年、東大卒）、1912年（明治45）に鈴木甫（1911年東大卒）を採用した。

木子七郎（1884-1955）は1913年には退職し、事務所の自営を開始した。ベニヤ板、動力ベルトの製造で成功した愛媛県の実業家・新田長次郎の娘婿となり、新田家、および松山藩主だった久松家のパトロネージの下、大をなす。



木子七郎肖像
（『萬翠荘物語』）

大阪武徳殿附属事務所について「設計及び施工は一点非の打ちどころのない優秀なもので・・・それもそのはずで、当時大林組に職を奉じていた東大出身の新進木子七郎の設計になったもの」

（『大林芳五郎伝』所収の池田實（大阪府建築課長）の回想）

右：大林組在籍中に担当した北浜銀行堂島支店（1912年）
中：大阪武徳殿附属事務所（1911年ごろ）
左：久松家別邸萬翠荘（1922年）



■理想としての設計施工一貫

清水組の明治36年以降の設計部門強化の背景について、中村伝治は「立派な技師のいる設計部を社内に置き、設計の当初から施主の意見を聞き、施主の気に入ったものを作り、店の信用を得たいというのが理由であった」と回想（『清水建設二百年 経営篇』）している。設計事務所（横河工務所）幹部の見解だけに意味深いものがある。同社は、大正年間に入って、「工事そのものの請負に止まらず各種建築の意匠、材料強弱の計算、電燈暖房、室内装飾の考案、門牆壁の如き付属物の設計等、何れも弊社は三十余年の経験と特別な技能を以てし……その任を全うしたること実に弊社の特徴とするところ」（大正4年刊行『清水組技術部設計建築作品集』の緒言）と誇らしげに述べる。

洋風建築の設計能力が底上げされ、施工体制が整備されてくるに従って、少数のアーキテクトに従属する施工業者という従来型の分業体制とは異なった、設計施工一貫を理想とする建築観が芽生えたことがこれらの言説から見てとれる。そうした新しい職能観は、ひとり清水組にとどまらず、多くの建設会社においても共有されていくことになる。

■多元的な組織が生んだ時代を超える建築

建設会社の設計組織は、多種多様な施主から示されるさまざまな依頼に即応する必要がある。設計事務所であれば、施主側もその作風を承知し、設計者の持ち味が発揮されることを期待して依頼することになる。向き合うべき課題の広狭には大きな違いがある。このことを意識して大林組の設計陣を見てみると納得するところが多い。

初代設計部長の松本禹象は工業学校教員養成所で学び、官庁営繕に長く勤務していた。初代住宅部長の松本儀八は工業学校の教員だった。つまり、それまでの経歴を通じて建築全般にわたる知識を身につけていた人物がリーダーとなったのである。さらに付け加えれば大林賢四郎も新情報を設計部にもたらすことを楽しみとしていた。組織の長は多能型の人材が配されていたことが見てとれる。

これに対して、個々の部員はそれぞれに明確な得意分野を有していた。すなわち古今の装飾を駆使して劇場を彩ることに長けた木村得三郎、1920年代ヨーロッパの新造形を咀嚼していた平松英彦、大胆な構想の下にモダニズムへの展開を導く小田島兵吉、スパニッシュを自家薬籠中のものとして非日常の空間を飾った中村一秀——などに多士済々であった。

彼らの業績と人となりについては、千原昭彦氏によって、1997年に「大林組建築家列伝」としてまとめられている。しかし、この著は広く流布されておらず、今回、新たな知見を加えて語り直そうとするものである。



曾根崎新地歌舞練場
1915年（大正4）
京都府技師・亀岡末吉を顧問として、松本禹象を主任、木村得三郎が補佐した。
（写真出典：『近代建築画譜』）

組織の特徴として注目されるのはそれら設計部のメンバーの協働である。たとえば、旧本店の設計過程を見ると、小田島兵吉が平面計画を構想し、平松英彦が立面意匠を決定し、中村一秀が実施設計をまとめた。こうした連携や分担は多くの作品でたどることができる。大林組設計部が形成されていった明治末から昭和初期は、建築の意匠・構造・設備、そして社会がそれぞれに劇的に変わっていく時代であり、

建築像もまた動揺した。そうした時代にあって、大林組設計部の多元的な組織は、その都度の最適解を獲得し、さらに時代が変わっても変わることはない価値を生み出してきたのだ。

■大林組の建築家たち（戦前篇）



大林賢四郎〈建築家スピリットに溢れた経営者〉

進取の気性に富み、大林組に近代的建設技術とスパニッシュ様式を導入する。設計部を愛し、薫陶を忘れなかった。



松本禹象〈設計施工の一貫性を主張した初代設計部長〉

和風建築の名手として優婉な曾根崎歌舞練場をまとめる一方、箕面桜ヶ丘の住宅改造博覧会では社を率いて我が国初のスパニッシュ様式住宅の仕掛け人となる。



木村得三郎〈劇場で花開く華麗な装飾〉

松竹座、先斗町歌舞練場、弥栄会館……古今東西の装飾モチーフを自在に折衷し、格調高い名作を次々と生む。



小田島兵吉〈清新なランドマークを生んだ構想力〉

阪神甲子園球場を皮切りに、大軌上本町ビル、大阪歌舞伎座と骨太なデザインで新しさを追求する。戦後設置された研究部（現・技術研究所）の初代部長を務めた。



平松英彦〈様式の中に独創を潜ませた夭折の天才〉

若くして旧本店の外観意匠を任された才幹。ヨーロッパの新動向に思いを寄せ、深い情念の籠もった造形を生み出すが、33歳で早世する。京都大学建築学科1期生。



松本儀八〈スパニッシュ様式流行の立役者〉

堅実な住宅観に基づいて、日本的なスパニッシュ住宅を完成させる。初代住宅部長であり、住宅部の後進の育成にも力があつた。武田五一の愛弟子でその信望は特に厚かった。



毛利泰三

大阪倶楽部の設計チームの一員として活躍後、大林組にて越前屋百貨店を残す。旧本店ビルデザインコンペ2等。



中村一秀

戦前のリゾートホテルの第一人者にして、豪華客船の内装を手掛けた初めての建築家。

■大林組設計部とは

1971年に創業80年を期してまとめられた『大林組設計部略史』という小冊子がある。その巻頭で当時の社長、大林芳郎は「折々の制約に対局し、これを超克して、すばらしい作品が生まれた」ことを評価する。これは型どおりの挨拶ではなく、「折々」に惹起するあらゆるタイプの「制約を超克」することが建設会社設計部の使命であるという特性をよく捉えているというべきである。これから大林組設計部の足跡を紹介していくが、描き出されるのは個々の構成員が企業の使命にどう応えたかを「作品」として世に問うた、その累層にほかならないのである。

石田潤一郎が選ぶ大林組の建築家たち（戦前篇）

■松本禹象

（まつもと うどう 1871～1945）

熊本県生まれ。1896（M29）年熊本県庁入庁。1906（M39）年10月大林組入社。1908（M41）年初代設計部長。1915（T4）年曾根崎新地歌舞練場。1917（T6）年関西建築協会設立に参加（他に大林賢四郎、今林彦太郎ほか）。1916（T5）年株式会社大林組本店建築部長（兼設計部長）。1919（T8）年平賀義美邸（施工鴻池組）。1920（T9）年4月社長大林義雄と共に米国・欧州視察。12月取締役（現業部長兼務）。1922（T11）年「日本建築協会主催 住宅改造博覧会 出品委員長」。1924（T13）年常務取締役。1927（S2）年監査役。1930（S5）年顧問。



曾根崎新地歌舞練場（北陽演舞場）



平賀義美邸



住宅改造博大林組B号



松本禹象自邸

■木村得三郎

（きむら とくさぶろう 1890～1958）

仙台市生まれ。1914（M3）年4月大林組入社。松本禹象の下で曾根崎新地歌舞練場の設計担当。社寺建築の大家、京都府技師亀岡末吉氏が顧問。1922（T11）年春海商店本店。1923（T12）年大阪松竹座。1924（T13）年第三期歌舞伎座（東京）。1927（S2）年先斗町歌舞練場。1930（S5）年東京劇場。1933（S8）年日本劇場、1936（S11）年11月弥栄会館。1941（S26）年監査役。1947（S22）年嘱託を辞し、事務所を開設。1952（S27）年再び大林組の嘱託となる。



春海商店本店 第三期歌舞伎座（東京）
（協力 松竹株）

“大正三年上野の美術学校（現在の東京藝術大学）を卒業した木村は、学校時代の恩師岡田信一郎を援けて東京の歌舞伎座の設計に当たったのである。（村松貞次郎著「日本の建築家山脈」より）



大阪松竹座
（協力 松竹株）



先斗町歌舞練場



東京劇場
（協力 松竹株）



日本劇場



弥栄会館

■小田島兵吉

（おだじま へいきち 1899～1976）

秋田市上着町生まれ。1922（T11）年東京帝国大学工学部建築学科卒。同年4月設計部配属。1944（S19）年設計部長、1948（S23）年研究部部长兼務（研究部は現在の技術研究所の前身）1949（S24）年取締役、1958（S33）年顧問。作品は、1924（T13）年阪神甲子園球場、1926（S1）年大軌ビルディング、大林組本店（平面計画）、1930（S5）年熊本市公会堂、1932（S7）年大阪歌舞伎座、1961（36）年秋田大学大学院国際資源学研究所付属鉱業博物館。1948（S23）年「みなさんへの奉仕」大林組設計部『復興住宅建築図集』発刊。



阪神甲子園球場



大軌ビルディング



大阪歌舞伎座



秋田大学大学院国際資源学研究所付属鉱業博物館

■平松英彦

(ひらまつ ひでひこ 1895~1928)

東京高輪生まれ。東京帝国大学数学科を中退し、京都帝国建築学科第一期生として入学。1923 (T12) 年4月大林組入社、1926 (T15) 年東京支店設計部主任。同年大林組本店ビル竣工。1924 (T13) 年伊吹合名会社、日本麦酒鉾泉川口工場、1927 (S2) 年京王ビル、順天堂病院、など多くの作品を手がけ、また個人として1925 (T14) 年戎橋の意匠設計を担当。1928 (S3) 年11月15日逝去。新建築1929 (S4) 年3月号にて追悼特集が組まれる。



伊吹合名会社



戎橋 (大阪市建設局所蔵)



大林組本店 (四代目)

■松本儀八 (まつもと ぎはち)

1885 (M18) 年佐賀市生まれ。1908 (M41) 年7月京都高等工芸学校図案科卒。広島県立工業高校、大阪府西野田工業学校の教諭をへて1925 (T14) 年5月大林組入社。1927 (S2) 年芝川又右衛門邸増築。1928 (S3) 年初代住宅部部長。1929 (S4) 年浜甲子園健康住宅地開発。1935 (S10) 年米本儀之助邸。1936 (S11) 年内外木材常務取締役。1947 (S23) 年退任。



芝川又右衛門邸増築



米本儀之助邸

■毛利泰三 (もうり たいぞう)

1914 (T3) 年3月兵庫県立工業学校建築科卒。1916 (T5) 年辰野片岡事務所、1920 (T9) 年大阪市臨時技手、1921 (T10) 年片岡建築事務所 (大阪倶楽部臨時建築事務所)、1924~43 (T13~S18) 年大林組設計部、1968 (S43) 年安井建築設計事務所。大林組では1931 (S6) 年越前屋百貨店を担当。



大阪倶楽部



越前屋百貨店

■中村一秀 (なかむら かずひで)

1902 (M35) 年大阪生まれ。1920 (T9) 年大阪府立今宮職工学校建築科卒。同年大林組設計部。1921 (T10) 年12月日本建築協会『第二回改良住宅設計図案懸賞』一等当選。1929 (S4) 年日本郵船北米航路船浅間丸、龍田丸の一部内装の設計。1932 (S7) 年東京支店設計部。1936 (S11) 年桜井兵五郎熱海別邸、山中温泉ホテル・河鹿荘。1937 (S12) 年白雲楼ホテル。1946 (S21) 年5月退社。



山中温泉ホテル (観光ホテル 河鹿荘)



龍田丸 (船内装飾)



白雲楼

注：写真掲載にあたり、撮影者不明のため、ご許可をいただいているものがございます。恐れ入りますがお気づきの際は、撮影者様よりご一報いただければ幸いです。(大林組)



火に代わり太陽光を灯す、 現代の行燈「EN」

～生産から使用まで、社会的価値を生み出す照明～

ソネングラスジャパン株式会社代表取締役 村山修平

■ エネルギー転換期における灯りの再定義

焚き火、油灯、ろうそく、ガス、そして電気。人類が多様なエネルギーによって暮らしを照らしてきた歴史を経て、21世紀の個人用照明は、近代インフラ以前の「電源の制約を持たない灯り」の知恵を継承しつつ、太陽光という持続可能で自律的なオプションを選択し始めている。

■ 「誠実なデザイン」と持続可能性の理想形

当社は「デザインによる社会的インパクト」を掲げ、「地域社会の活性化と環境負荷の低減を実現する、持続可能なソーラー照明の開発」を事業の核に据えている。製品は「使う人」「作る人」、そして「地球環境」にとって理にかなうものでなければならない。この哲学を、「誠実なデザイン (Design with Integrity)」と定義している。こうした理念を追求する過程で、日本の伝統工芸がその当時から調達可能な技術や資源を以て最適化され、現代まで続いてきたものであることを再認識した。そしてそれは、現代社会が目指すべき持続可能性の一つの完成形と考えるに至った。

その中で深い感銘を受けたのが、静岡県の伝統的工芸品〈駿河竹千筋細工〉であった。その最大の特徴は、国内の他地域の多くで見られる「平ひごを編む」技法とは異なり、「丸ひごを一本ずつ組み立てる」という独自の技法にある。直径1mm前後という繊細な丸ひごが生み出す線は、天然素材の質感と相俟って極めて繊細な陰影となり、洋の東西や時代を問わず、現代の空間においても普遍的な美しさを宿す「しつらえ」として、新たな価値を放ち続けている。

■ 21世紀の行燈「EN」がもたらすインパクト

この伝統技法と当社のソーラーライトが融合して生まれたのが、「EN (えん)」である。本製品は、オフグリッド*かつポータブルな自社製ソーラーライト「Sonnenglas® SOMO」と、〈駿河竹千筋細工〉を担う、みやび行燈製作所の職人が仕立てる竹を主材としたシェードで構成される。

「SOMO」は南アフリカ・ヨハネスブルグの自社工場で適正な賃金や福利厚生、労働条件を厳守するフェアトレード体制で生産されている。深刻な失業率に直面する同地域において、あえて大規模な機械設備を導入せず、ハンドメイドによる生産体制を採用す



21世紀の行燈「EN」

ることで、若年層に安定した雇用を生み出している。作り手が工程の全体を理解し、技術を習得していくプロセスにより、技術が資本集約的なインフラに独占されず、地域の共有財産として根づいてゆくことを目指している。

■ 社会の「資産」としての製品

持続可能な原材料である「竹」を主材とし、再生可能エネルギーである「太陽光」で灯す「EN」。照明ユニットからシェードに至るまで、一点一点が人の手によって生み出される。それは伝統や技術が人の手によって、受け継がれてゆくことも意味している。資源を換金し未来に負債を回すという「消費」の形で



繊細な陰影を楽しむ

はなく、作られ、使われるほどに社会や環境にポジティブな影響が積み重なっていく「資産」となる製品を目指した。

建築・設備の分野においても、電源につながれていることを必要としない照明は非常用光源の確保や災害時のレジリエンス向上に寄与する。また、茶室や縁側といった日本建築の空間において、伝統的な行燈の佇まいを現代技術で再解釈した「EN」は、電線や電源の制約から解放された新しい空間演出の可能性を示唆している。

現代社会に生きる限り切り離すことのできないあらゆる製品は、「効率」や「性能」だけでなく、人・社会・環境との関係性をも問いかねる存在であることを、「EN」という照明を通じて示すことができれば望外の喜びである。

* off grid:電力会社の送電網(グリッド)につながらない状態

「EN」スペック

充電方法：太陽光充電 / USB-C充電対応
点灯時間：通常使用 約30時間 (光量5ルーメン設定時、最長約100時間)
明るさ：5-100ルーメン (光量調整可)
色温度：電球色 (3000ケルビン)



むらやま・しゅうへい

ソネングラスジャパン代表。ロンドン大学東洋アフリカ研究学院 (SOAS) 修士。国際貿易を一つの「社会設計」と捉え、フェアトレードと太陽光照明を通じ、南部アフリカと東アジアをつなぐ持続可能な交易のあり方を実践している。

完成の先にある現場

～大阪・関西万博ハンガリーパビリオン 解体工事を通して～

株式会社橋本組 マネジャー 望月貴之

■ つくる会社が、壊す現場に立つ

大阪・関西万博は、未来社会のビジョンを提示する国際的な祝祭であり、その会場に立ち並ぶ各国パビリオンは、短い会期のために高度な設計と施工がなされた建築である。華やかな完成の姿が目される一方で、会期終了後には必ず解体という行為が待っている。

筆者の所属する株式会社橋本組は、ハンガリーパビリオンの建築工事から解体工事までを一貫して請け負った。しかし筆者自身が現場に立ったのは、建物がその役割を終えた後の解体工事である。完成時の高揚や来場者の反応を直接知ることなく、静まり返った会場で建築と向き合う立場は、万博建築を別の角度から捉える契機となった。

■ 解体のために初めて向き合った建築



解体前のハンガリーパビリオン外観

解体工事に着手して初めて、ハンガリーパビリオンの内部構成や納まりを詳細に把握することとなった。仮設建築として計画されているものの、その構成は恒久建築そのものであり、素材の選定やディテールには強い思想が感じられた。

解体という行為は、完成形を逆方向から読み解く作業でもある。仕上げの裏側や構造体の関係性を確認しながら、設計者や施工者がどのような意図でこの建築を成立させたのかを想像する場面が幾度もあった。完成した姿だけでは見えなかった建築の素顔が、解体によって初めて露わになる感覚である。

■ 解体工事の現場管理という実務

解体工事における監理技術者の役割は、単に建物を撤去することではない。関係法令を踏まえた安全確保と工程全体の統括を前提に、作業手順の立案、重機と人力作業の適切な使い分けなど、多岐にわたる判断が求められる。

万博会場という特殊な環境下では、周辺工区との調整や厳しい工期条件も加わった。建築施工時の施工方法や納まりが、解体手順の制約

として現れる場面も少なくなかった。解体作業を進めながら、建築時の判断が持つ影響の大きさを改めて実感した。

壊しながら建てた側の思考を読み取るという行為は、解体工事ならではの経験である。建築は完成した瞬間に終わるのではなく、その後の解体まで含めて一連の行為であることを、現場管理の立場から強く意識させられた。

■ 建築と解体の関係性

一般に、建築工事と解体工事は制度上・工事区分上、別の工程、別の専門分野として捉えられがちである。その結果、設計や施工の思想が解体に十分引き継がれないことも多い。仮設建築である万博パビリオンは、とすれば「使い捨て」として扱われやすい。

しかしながら、解体工事は単なる後始末ではなく、建築行為の延長線上にある重要な工程である。解体を前提とした設計や施工がより意識されれば、安全性や環境負荷の低減といった面でも、新たな可能性が広がるはずである。

■ 次の建築のための解体

ハンガリーパビリオンの解体工事を通して、解体は終わりではなく次の建築へとつながる行為であると感じた。万博という一過性のイベントで得られた経験を、今後の建築にどう生かすかが問われている。

設計・施工・解体が法令遵守と責任体制を共有しながら分断されることなく連続したものとして捉えられるとき、建築はより社会に開かれた存在となるだろう。元請施工者の監理技術者として、その橋渡しを担うことが今後の課題である。



解体工事が進むハンガリーパビリオン



もちづき・たかし

2017年7月 株式会社橋本組入社
監理技術者として、2025年大阪・関西万博ハンガリーパビリオン解体工事の現場管理を担当。

AI時代のヒューマンファクターデザイン

立命館大学・教授 近本知行

■ヒューマンファクターの導入

従来、建築や室内環境の制御では、空間のどこにいても誰もが快適に過ごせるよう、温度、湿度、気流、CO₂濃度、照度などの物理量をセンシングし、それらを「快適とされる一定範囲」に維持することを目標としてきた。しかし、人が感じる快適性は単純な物理条件だけで決まるものではない。体温や皮膚温、活動量、心拍数、さらには睡眠状態や疲労度など、人の生理状態によって同じ環境でも感じ方は大きく異なる。また、人の状態は時間帯や作業内容、心理状態によって常に変化している。

このような人の非定常的な特性を考えると、環境要素のみを一定範囲に保つ従来の制御だけでは、本質的に快適な環境を実現することは難しい。人が環境をどのように知覚し、どのような生理反応や心理反応を示すのかという視点を取り入れることが重要となる。

こうした人の特性を中心に据えて環境や設備システムを設計する考え方は「ヒューマンファクター」^{※1)}と呼ばれ、近年、建築環境工学や空調分野においても注目されている。さらにAIやセンシング技術の進展により、人の状態をリアルタイムで把握しながら環境制御を行う可能性が現実のものとなりつつある。本稿では、人の生理・心理特性と環境との関係を示す研究事例を紹介するとともに、AI時代の建築環境制御の可能性について考えてみたい。

●人の移動による環境体験の違い

同じ環境でも実際に人の感じ方が異なってくる例として兵庫県立芸術文化センターで検討した内容を紹介する^{※2)}。この研究では夏期に、駅からホールに着席するまでの移動過程において、人がどのように感じるかを検討した。実験は、夏場の非常に暑い32°Cの屋外から、ホールに至る経路で32°Cから28°C、ホールでは26°Cとゆっくりと温度を変えていってあげる「順応ケース」と、それとは反対に、一旦、寒い環境を経験する「コールドショックケース」の2つを設定した。コールドショックケースは、暑い屋外から喫茶店に入ったとき寒いくらいクーラーをかけていると気持ちいいと感じるイメージである。

順応ケースでは26°Cのホールに到達した後に、実線で示した快適感が上がり、点線の温冷感は涼に近づく。コールドショックケースだと、一旦、快適感、温冷感ともに中立に近づくが、ホールに入ると温かさが増し、快適性が崩れてしまう結果となった。この違いは、体の中の生理反応が影響していると思われる。脳血流計を用いたTOIという「生理活動量の強度」の計測では、順応ケースでは生理量の大きな変化は見られない反面、コールドショックケースでは、寒さに対する適応で生理量が高まり、血流が活発になったことで、産熱し、結果的にホール到着後に涼しさが薄らいだ(図2)。

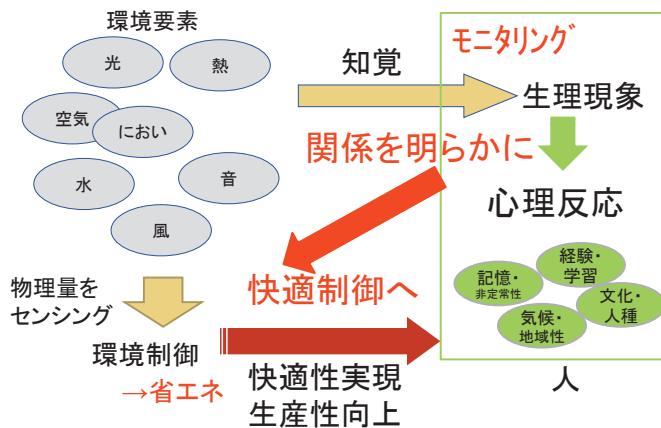


図1 ヒューマンファクターによる快適制御

■人の感じ方は環境条件だけでは決まらない

ヒューマンファクターを考えるにあたっては、その人が環境要素をいかに知覚し、人の体内で起こる生理現象、さらに、そのことによってどのような心理反応が促されているかということを知ることが重要となる。生理現象さえわからないことが多い上に、心理に至っては、記憶・非正常性、あるいは経験・学習、文化・人種、気候・地域性などに大きく左右され複雑極まりない。家庭では自分自身で気持ちいいと感じるようにエアコンや照明のスイッチをオン、オフし、吹き出し口の向きや風量を変え、カーテンや窓の開閉をすればいいのかもしれないが、多くの執務者と同じ空間を共にしているオフィスではなかなか難しく、空調システムや制御法の開発とともに人の特性から学ぶことが鍵となる。

以下では、人の感じ方が環境条件だけでは説明できないことを示すいくつかの研究事例を紹介する。

(1) Case 1.2 (順応、共通ロビーに30 min 滞在)

(2) Case 2.2 (コールドショック、エントランスロビーに30 min 滞在)

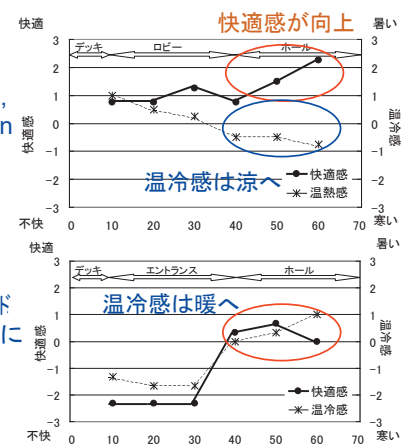


図2 Case 1.2 (順応) とCase2.2 (コールドショック) の比較

●外気温度の変化による快適温度（中立温度）の変化

次に、夏期に空調された屋内で過ごしながら、快適と感じる中立温度が変化するかを検討した研究である^{※3)}。

結果は省略するが、まず普通に室内にいた状態での実験である。室内にいて、当然ではあるが外気温度が変化しても快適と考える中立温度は変わらないはずである。しかし外気温が上昇している時間帯にその変化をある程度感じるという結果が現れた。室中で過ごしているのに、外気温度が上昇していることを想像し、自分自身で中立温度を変化させた可能性がある。

今度は、室内で過ごしながらも外気温を教えるという実験である。結果は外気温が高ければ高いほど、自分が快適だと思う温度を自身で高めに誘導してしまうというものだった。

さらに、1回外に出て暑さを体験するという行為を挟んだ実験である。これまでよりもさらに中立温度が上がり、また高い温度となっても快適だと認識しているという結果であった。

●一日の気温の変化の感じ方に合わせた制御の可能性

一般的に空調の設定温度は終日一定に制御されている。一方でオフィスワーカーの代謝量は出社後や昼食後をはじめ、一日の行動履歴に合わせて変化している。この代謝量の変化により、室温一定の空間内であっても暑い・寒いなど不快に感じることがある。そこで代謝量の変化に合わせて、不快感を和らげる方向に室温を制御することにより、オフィスワーカーにとってより快適で生産効率の高い空間を生み出せるのではないだろうか、と考えた。

そこで、一日の行動パターンに基づいて室温変動を行った被験者実験を行い、室温変動がオフィスワーカーの心理・生理に及ぼす影響を調査した^{文4)}。実はこの制御は設計者時代に1999年竣工のアジア経済研究所で実際に導入したもので、その検証でもある。

実験の室温設定及び手順を示す(図3)。case1を室温一定(26°C)、case2を室温変動(25~28°C)としている。まず、被験者に前室(24°C)で安静にしてもらい(15分)、次に出勤時の代謝量を再現するためにスクワット運動(5 Mets)を行った(5分)。その後、実験室にて実験準備を行いつつ、実験開始まで安静にもらった(10分)。

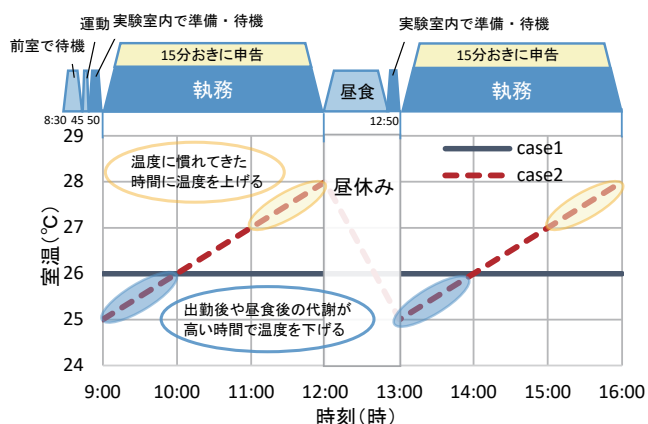


図3 一日の変化を与えた実験

結果は省略するが、9時台、13時台は暑い・不快側の申告が緩和され、9時台は出勤を模擬した運動、13時台は食事によって代謝量が大きくなるが、設定室温低下が有効であった。一方、10時台、11時台、14時台には、室温を緩和しても許容され、室温が高いにも関わらず、温冷感や快適感で不利になっていないという結果となり、1日の外気温度変化に対する経験や情報・体感は、快適と感じる中立温度を修正することがわかり、室温変動制御が有効であった。

●情報による温冷感の変化

快適だと思う温度を、自分自身で操作をしている可能性に関し、少しやり過ぎではあるものの、あえて「うその情報」を流す実験を行った^{文5)}。

正しい温度情報、外気温度を与えるケースに加え、「ちょっと高い」と、うその情報を与える。あるいは「低い」と反対の情報を与えるという実験である。正しい温度上昇に対して、少しだけ高いという情報を与えると、涼しい側の申告が増加した。外は暑いだろうから、それに比べて部屋の中は涼しいはずだと、外よりも十分涼しいという認識をしたものである。快適感に関しても同様に、快適と感じる比率が増えた。うそばかりついていると、そのうち慣れてしまうが、情報により温冷感を操作することができた。

●コミュニケーション、競争意識による温冷感の変化

コミュニケーションによっても感じ方が変わるという例である^{文6)}。実験は大阪ガスの北部事業所で行った。BEICSというBEMSにコミュニケーションシステムを載せたツールを入れてこういった画面を執務者に表示している(図4)。

ここでは、各フロアの温度を出し、各フロアでの省エネの達成率を表示して、そのフロアごとの競争をすることができるようにしており執務者の「競争意識」を促している。Opowerというアメリカの会社は顧客の省エネ対策推進にAIと行動科学を取り入れ、省エネ達成度によるランキングとランキングを上げるための具体的な省エネ対策のアドバイスという事業を進めている。こういったことは東京電力の「でんき家計簿」や関西電力の「はびeみる電」でも行われており、同じことがフロア間のエネルギー消費の対決による省エネ行動の向上につながっていた。



図4 コミュニケーションBEMSの画面例

●無知覚の環境要素による意識の変化

さらに、温熱環境の要素だけではなく他の要素も影響するのではないかと検討したのが、立命館中・高の長岡京キャンパスで、室内の環境の変化と生徒の図形テストの成績との関係を解析したものである(図5)^{文7)}。

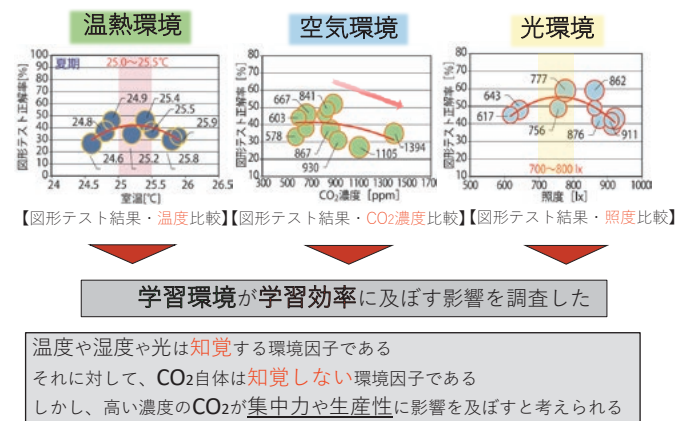


図5 環境の変化と学習効率の関係

まずは温熱環境と光環境。左側の結果が夏期冷房時の温熱環境による成績の変化のグラフ、右側が光環境と成績のグラフである。温熱環境では成績が一番高くなるのが25~25.5°Cということで、それより暑くなると成績が下がる。それよりも寒くなっても下がる。光環境も大体700~800ルクスぐらいでピークになる。

そして空気環境。CO₂は無味無臭なので実際の濃度なんて感じることはないはずだが、CO₂濃度が高くなると成績が下がってしまうという結果になった。建築基準法でのCO₂濃度の上限は1,000ppmで、学校建築の場合は1,500ppm上限ではあるが、学校の教室であっても1,000ppmから1,500ppmでも成績が下がってしまうという結果となった。

CO₂は知覚しない環境因子であっても、集中力や生産性に影響を及ぼす。実験室でCO₂濃度を600、1,500、3,500ppmと変えていった^{文8)}。

1,500ppmは1人着座でしばらく作業した状態、3,500ppmが複数

人着座でのイメージになる。実際に温度と湿度それから照度を一定に保つことのできる実験室で実験したものである(図6)。

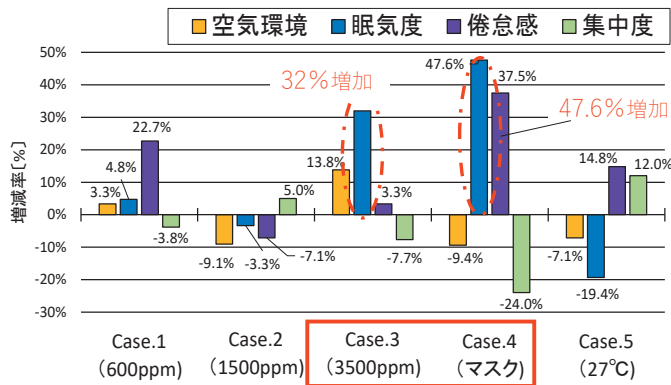


図6 CO₂濃度変化に伴う作業前後の申告値の変化

CO₂濃度が上がると、眠気感がまずは大きくなる。コロナ以降マスクをつけることも増えたが、マスク内のCO₂濃度は5,000ppmから20,000ppmと非常に高いCO₂濃度になっている。コロナ禍の期間中、日常的にマスクを付けていたと思うが、空気環境的にはあまりよくない状態を過ごしていたことになる。

比較対象として、26°Cから27°Cに温度を上げたケースを示しているが、温度を上げて、27°Cぐらいだと大した影響はでない。しかしながらCO₂濃度を上昇させると、倦怠感が特にマスクをした状態で大きく増えており、作業前後で集中力が下がったという結果になっている。部屋の環境要素の変化にあまり気づかない状態であっても、その人の快適性や、作業性、生産性にも影響を及ぼしている。CO₂濃度の上昇によりタイピング時の入力文字数も下がり、誤入力率も上昇した。さらに先ほどのTOIも変化し、血流量とも関係し、いろいろな生理量とも密接に関係しているというところなどがわかってきた。

●渦輪を用いたパーソナル空調

さて今度はいかに設備システムに導入するかである。空調でヒューマンファクターを最も実現しやすいものに「パーソナル空調」が挙げられる。その中でも「渦輪」を使ったパーソナル空調に取り組んでいる。でんじろうの空気砲といったほうがわかるかもしれない。箱をぼんとたたくと、輪っかがぼんと出てくるものである。この輪っか、つまり「渦輪」は非常に直進性がある、ピンポイントに人に当てることができる(図7)。



図7 渦輪を用いたパーソナル空調

連続して十分な量の渦輪を送出可能な吹き出し装置を開発し、渦の送出量、送出間隔、送出速度などを変化して渦輪の挙動、渦の崩壊現象の解明の他、被験者を使った快適性の検証実験を行っている²⁹⁾。その結果、パーソナル空調としての有効性や、個人の好みに応じて快適性や涼しさを制御できることがわかってきた。これは人に当たったところの写真を見ているが、風量が多く背中全体に当たってしまうCase3は意外と気持ちよく感じず、人の首

筋に効率的に当たるCase2のほうが快適だという結果が得られた(図8)。

あくまでも次世代の空調の可能性として検討している一例ではあるが、個人個人をターゲットにした空調制御につながる。一方で、その人の位置や、その時々感じ方を把握したうえで快適性につなげることが前提となる。

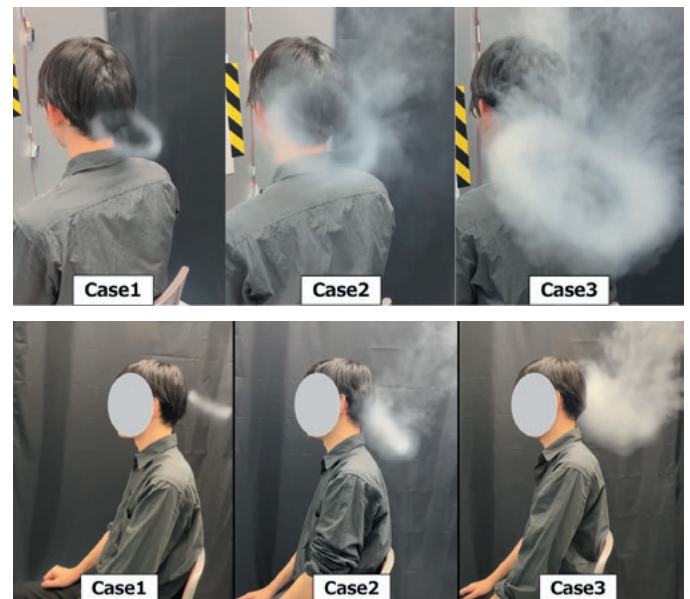


図8 風量変化による渦輪の到達 (case1→3で風量大)

■AIによりヒューマンファクターデザインが進化

●センサー技術

ヒューマンファクターを建築環境の制御に取り込もうとするとき、近年急速に発展しているセンサーやAI技術の活用が大きな可能性を持つ。従来から、温度、湿度、CO₂濃度、照度といった物理量をセンシングして制御につなげていたと述べたが、多くの環境要素がセンシングされていたわけでもなく、居住域の環境や空間分布が把握できていたわけでもなく、環境要素の時間変化も詳細にわかっていただけでもない。

しかし、近年、安価で小型のセンサーが次々と開発されている。さらに人の状態そのものをセンシングし、それを環境制御に反映させる仕組みも整いつつあり、ウェアラブルセンサーや非接触型バイタルセンシング技術の進展により、心拍数、皮膚温、呼吸状態、活動量などの生体情報をリアルタイムで取得することが可能になってきている。

●AI解析

これらのデータをAIによって解析することで、人がどのような状態にあるのか、快適であるのか、あるいは疲労やストレスを感じているのかといった状態推定が可能となる。さらに、過去の環境条件と人の反応との関係を学習させることで、個人あるいは集団にとって望ましい環境条件を予測し、それに基づいた制御を行うことができるようになる。

●エッジコンピューティング

このような制御を実現するうえで重要となるのが、まずはIoT端末や、BEMSなどビル側のコンピューターでのデータ処理によるエッジコンピューティングの活用である。建物内に設置されたセンサーなどから得られるデータは非常に多く、また環境制御には即時性が求められる。例えば、執務空間において人の集中度が低下している兆候が検出された場合、照明の明るさや色温度を調整したり、空調の風量や気流を変化させたりすることで、短時間のうちに環境を変化させる必要がある。このようなリアルタイム制御では、クラウドを経由した処理では遅延が生じる可能性があ

るため、空間内のエッジコンピュータでデータ処理と制御判断を行うことが有効である。エッジコンピューティングによって、空間のセンシングと設備制御を一体化させた高速なフィードバックループを構築することができる。

●クラウドコンピューティング

一方で、エッジだけでは十分ではない。建物単体の制御を超えた最適化を考える場合、クラウドコンピューティングによる大規模なデータ分析と予測制御が重要となる。建築環境は、外気条件、日射、利用人数、時間帯など多くの要因によって変動する。これらのデータを長期間にわたって蓄積し、AIによって分析することで、将来の環境変化やエネルギー需要を予測することが可能になる。気象予測と建物利用パターンを組み合わせることで、翌日の空調負荷を事前に推定し、設備の運転計画を最適化することもできる。また、複数の建物データを統合的に分析することで、建物ごとの利用特性や地域特性を踏まえたエネルギー運用戦略を構築することも可能。

●地域全体のエネルギーマネジメント

さらに、こうした建物単位の制御は地域全体のエネルギー管理とも密接に関係してくる。近年、再生可能エネルギーの導入が進む一方で、その発電量は天候などによって大きく変動する。このような状況では、エネルギー供給側だけでなく需要側の制御、すなわちデマンドレスポンスが重要となる。AIによる需要予測と環境制御を組み合わせることで、建物の快適性や生産性を損なうことなく、エネルギー需要を調整することが可能になる。例えば、地域全体の電力需要が高まる時間帯には、AIが建物の熱容量や利用状況を考慮しながら空調運転を調整し、ピーク電力を抑制することができる。このような仕組みは、単なる建物制御にとどまらず、地域全体のエネルギーマネジメントを支える基盤となる。

また、エネルギー管理の対象は建物の内部に限られない。電気自動車の充電、蓄電池、さらには地域の再生可能エネルギー設備など、多様なエネルギー資源を統合的に管理することで、都市スケールでのエネルギー最適化が可能になる。クラウド上でこれらの情報を統合し、AIによって需給バランスを調整することで、脱炭素社会の実現に向けた新しい都市エネルギーシステムを構築することができるだろう。

このように、ヒューマンファクターを中心に据えた建築環境制御は、単に室内の快適性を高める技術にとどまらない。人の状態を理解し、それに応じて環境を柔軟に変化させる建築は、人間の健康や生産性の向上に寄与すると同時に、エネルギー利用の最適化にもつながる。AI、エッジコンピューティング、クラウドコンピューティングといった技術を組み合わせることで、人と環境、そしてエネルギーシステムを統合的に捉える新しい建築環境工学の姿が見えてきているのである。今後は、人間理解を基盤としたヒューマンファクター研究と、データ駆動型の環境制御技術とを融合させることで、人間中心で持続可能な建築・都市環境の実現が期待される。

●カーボンニュートラルにつながる行動変容へ

人との関係を明らかにすることで、人の行動変容、無意識に行動を促すような、そういう仕掛けづくりを行うことでカーボンニュートラルにつなげることができると考えられる。いわゆる「ナッジ」と呼ばれているものである。

立命館大学大阪いばらきキャンパスH棟では、デジタルツインというコンセプトで、建物各所に温湿度やCO₂濃度、風速などを測定するセンサーを設置している。また、人流を計測できるシステムを導入しており、どこからどういうふうな人が移動していったか、あるいは、その移動する場所の環境はどうだったかというようなところをセンシングできる仕掛けが盛り込まれている。この仕掛けを利用して、今まさに行動変容の実証実験を行っているところ

である。カーボンニュートラルに対する意識をどう植え付けていくか、あるいは体感させるのか、またインセンティブのあり方はどうすべきかなど考えて、学生の被験者にアプリを使ってもらいながら実験をやっていききたい。

■AI時代の建築環境工学の方向性

急速に、仕事でも生活でもAIが身近で欠かせなくなっている。このような時代だからこそ、自らが主となり、人を中心に考え（ヒューマンセントリック）、人の感じ方を重視することが必要と考える。一方、AIの利用の幅は大きく広がり、環境要素や人のモニタリング、人の感じ方との関係性を明らかにできれば快適制御につながるのではないかなと思っており、このメカニズムを少しずつでも解明することで快適性実現、あるいは生産性向上につなげることができると思っている。

同時に、オフィス環境をどう構築していくのか。そこで働く人の生理量、バイタルデータや心理量、主観申告値をモニターするというのはなかなか難しいが、働く人がどう感じているかということはある程度予測しながら、それらの関係性をより深く見ていくことで、いろいろな人に適合した、その人が自分の意思でいろいろと変更できる、それこそ人を中心としたオフィス環境につながっていくのではと思っている。

省エネや環境負荷削減に対する努力を強要するのではなく、自ら無意識の行動選択を取ることでエネルギーを節約することが重要であり、これらを目標に今後とも研究を進めていければと思う。

参考文献

- 文1) 日本建築学会編「環境のヒューマンファクターデザインー健康で快適な次世代省エネ建築へ」、井上書院、2020年9月
- 文2) 近本知行「人体周辺の温熱環境変化を考慮したアダプティブ制御」立命館大学政策科学会 政策科学17巻特別号、pp.137-143、2010年3月
- 文3) 近本知行、伊藤紘一他「夏期における外気温度変化が熱的快適性へ及ぼす影響に関する研究（その1～2）」日本建築学会大会環境工学II、pp.339-342、2013年8月
- 文4) 亀山大介、近本知行「ヒューマンファクターを組み込んだ空調システム・制御システムの構築（その6）一日の代謝量変化に合わせた緩やかな室温変化が人の快適性に与える影響の検証」日本建築学会大会環境工学II、pp.963-964、2017年8月
- 文5) 石田純音、近本知行他「ヒューマンファクターを組み込んだ空調システム・制御システムの構築（その11）夏期の外気温度・視覚・聴覚の情報操作及び変動制御が執務者に与える影響」空気調和・衛生工学会大会第3巻、pp.137-146、2018年9月
- 文6) 植田浩文他「H事業所低炭素化改修の運用効果の検証（その1～5）」日本建築学会大会環境工学II、pp.1137-1146、2013年8月
- 文7) 三村凌央、近本知行他「教室の学習環境と学習効果に関する研究（第6報）移転後の夏期・中間期・冬期における学習環境と学習効果に関する調査検証」空気調和・衛生工学会大会第8巻、pp.405-408、2016年9月
- 文8) Chikamoto, T., Nimura, R. "Influence of Carbon Dioxide Fluctuation and Thermal Environment on Workability, Physiology and Psychology", The 13th REHVA World Congress CLIMA 2019, 2019年5月
- 文9) Chikamoto, T., Ueda, K., (2023) Subject experiment on personal air-conditioning airflow using a vortex ring, The 11th International Conference on Indoor Air Quality, Ventilation & Energy Conservation in Buildings (IAQVEC2023), E3S Web of Conf. Volume 396, 2023年5月



ちかもと・ともゆき

日建設計を経て、2004年より立命館大学理工学部建築都市デザイン学科。立命館大学サステイナビリティ学術センター長、東京大学生産技術研究所フェローを兼務。

Member's Forum

活動報告の頁



活動報告：建築次世代委員会主催 第11回 学生のための現場見学会 株式会社東畑建築事務所 大阪草煙舎建替計画工事見学会

日時：2025年12月17日（水） 14：30～16：30

講師：(株)東畑建築事務所 設計室 平野尉仁氏・広瀬和也氏・西辻帆波氏

参加者：8名（1回生：2名、3回生：3名、4回生：1名、M2：2名）

参加委員：菅原幸也（日建設計コンストラクション・マネジメント）、藤田大（大林組）

【建築概要】

工事名：株式会社東畑建築事務所 大阪草煙舎建替計画

所在地：兵庫県神戸市東灘区甲南町4-1-5

設計：株式会社東畑建築事務所

施工：不二建設株式会社

規模：S造、地上3階

建築面積：283.84㎡、延床面積：678.99㎡

工期：2025年3月～2026年2月末引渡し

ライフスタイルの多様化に対応した設計事務所の自社寮の建て替え計画。入社して間もない若手社員24名が住まう。あらゆる部署の若手社員によって構成された「寮のあり方ワーキンググループ」を立ち上げ、住み手と設計者の目線を行き来しながら設計が進められた、住みながら学び、つくる自社寮。



平面モデル



現場事務所にて設計プロセスの丁寧な説明

今回の見学会の舞台となった大阪草煙舎は、東畑建築事務所の自社寮である。見学会当日はあいにくの雨模様であり、現場は外装工事中であり、足場が生まれ、内装工事がこれから開始される状況であった。普段見学するような大規模な建設現場とは異なり、小規模ならではのリアルなサイズ感が学生たちの関心を惹きつけた。

敷地いっぱいの建蔽率を使って部屋数を確保しているため、現場の搬入口は、多くの見学の学生たちが出入りに苦労するほどの狭い空間であった。しかし、それもまた実際の現場ならではの面白さとして好意的に受け止められていた。中庭を中心とした空間構成は、パブリックとプライベートが緩やかに分けられた計画上の面白さが随所に感じられた。

○設計から現場まで、熱のこもった解説

当日は、設計を担当したベテラン、中堅、若手のコアメンバーである3名全員が講師として登壇した。参加した者は建築計画系を志向する学生が多く、設計担当者から直接語られるプロセスの話に興味を持ち熱心に耳を傾けていた。

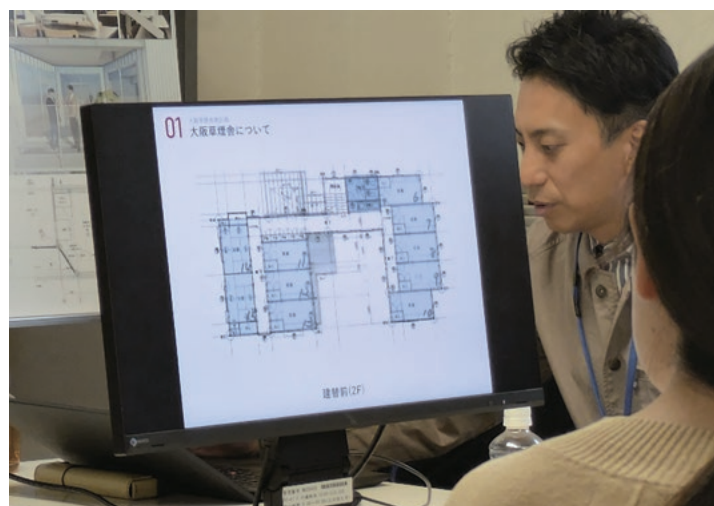
現場事務所の事前説明の6割から7割は、現場そのものよりも建物の形が出来るまでのプロセスに割かれた。もともと寮に住んでいた方へのヒアリングを行い、明るく窓のあるプライベート空間の確保や皆が集える場が欲しいなどの意見を反映したことや、新人を緩やかに集めて同期のコミュニケーションを育む研修寮のような位置づけなど、背景にある思いが詳細に語られた。現場では30分以上にわたる前段での丁寧な解説があり、その後はVRゴーグルを用いて完成後の空間を疑似体験する試みも行われ、学生たちの想像力を大いに刺激した。

◆学生の主な感想

- ・今までの現場見学会のどこよりも、奥まで見ることができた。
- ・狭い敷地に容積いっぱいの現場を見るのが初めてだったので、資材の置き場など工夫が必要なのだと感じた。
- ・なかなか見ることができない寮の建設現場を見学でき、とても貴重な体験になった。
- ・作業途中であったため、部材配置や断熱材などがどのようにになっているのかを実物で見ることができ非常に勉強になった。

◆見学会で最も興味・関心を持った事柄

- ・実際の設計の進め方や平面図、設計の仕方を聞いたこと。
- ・ワーキンググループの内容が、建築計画に反映されていく過程が面白かった。
- ・バルコニーの視線の操作や採光、建材。
- ・中庭との関係性が深いところに住み心地の良い住居空間になると感じた。
- ・構造躯体が見える状態になっていたため、細い柱など鉄骨のフレームに興味を持った。



説明を熱心に聞く学生



足場が組まれた施工途中の現場を見学

○委員のコメント

今回の見学会は、組織設計事務所が自社施設の見学企画から参加者募集補助までを行い、設計志向の学生が集まり、設計担当者が直接説明するという枠組み自体が非常にユニークな試みであった。

一方で、集客の面では課題も残った。参加者の多くは大学の先生や東畑建築事務所の所属からの紹介であった。協会誌の会告やホームページ経由での申し込みは無かったため、今後はInstagramなどのSNSを駆使した広報活動や、学生の動向を熟知している先生方との連携など、より効果的な募集の仕方をさらに研究していく必要がある。

文責 菅原幸也

活動報告：CCCフォーラム主催 第11回 青年技術者交流会レポート

日時 2026年1月30日（金） 18：30～20：30

会場 Open Innovation Biotope “bee”（株式会社オカムラ 関西支社内）

司会 片岡政規（安井建築設計事務所）・井上沙紀（オカムラ）

発表者 粉川壮一郎（安井建築設計事務所）・武内大輝（東畑建築事務所）・成瀬壮太（大建設）・桜本佳季（大林組）

対話の重要性

事業委員会CCCフォーラムの主催する、青年技術者交流会は今回で11回目の開催となる。今回の発表者は、第72回 青年技術者顕彰者である、粉川壮一郎氏（安井建築設計事務所）、成瀬壮太氏（大建設）、武内大輝氏（東畑建築事務所）、桜本佳季氏（大林組）が務め、各自の発表のあと意見交換を通じた交流会を行った。今回は設計・計画部門2名、構造部門1名、施工部門1名とバラエティに富んだ交流会となり、活発な議論が交わされた。



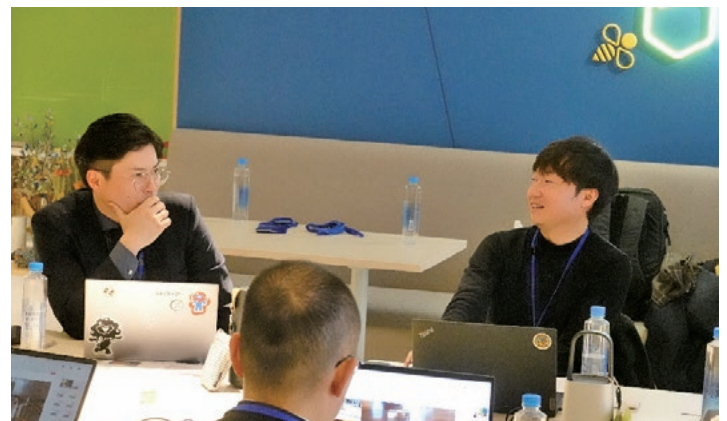
粉川氏からは、基本計画から担当された「Daigas Innovation Center」について説明があった。その中でクライアントと共に、「知の化学反応を加速させる拠点」というコンセプトを生み出されたという話が印象的であった。設計におけるコンセプトが建築のカタチを説明するためのもので、その前段階の建物の成り立ち自体を説明するコンセプトであり、これは基本計画からクライアントと一緒に作り上げてきたからこそ生み出されたものだと感じた。粉川氏が一から対話を重ね作り上げたことで、様々なイノベーションの交流を促進する吹き抜けを設けた空間構成や、企業のロゴである三角形を展開した内装デザインなど、建築的な細かな部分にまで設計者の気持ちを込めることが出来たのだと感じられた。

武内氏からは、自身が建築に興味を持ったきっかけをはじめ、構造設計を担当された「しまんとびあ」において設計上意識したことについてまで、さまざまな興味深い説明があった。その中で、①課題点を整理し、②価値の高い空間を創造するという構造設計者としての思いが、大ホールの特徴的な形状での折れ曲り丸柱架構や鋼板耐震壁といった、様々な設計上の工夫に見て取れ興味深かった。説明のあった学生時代の様々な経験が今の武内氏の構造設計者としての姿勢の基礎

を形作っているのだと感じられ、経験に基づきながら常に新しいことにも挑戦していく設計者のすばらしい姿勢に強く感銘を受けた。

成瀬氏からは、様々なビルディングタイプの設計経験を通して、「生活を支える環境をつくる」という自身のテーマについて説明があった。どの作品においても、①敷地の魅力を最大限に活かすこと、②関係者と対話を重ねること、③挑戦と修正を繰り返すこと、という思いをもって設計をされているとのことであった。「埼玉県の社員寮」では周辺環境が低層の住宅地であることから、圧迫感を抑えた建物配置や建築ボリューム操作によって周辺環境との調和に配慮されたことが伺え、「奈良県の樹脂キャップ工場」からは工場関係の設計経験を活かして新しいことに挑戦する姿勢が見られた。どの作品からも上記3つの思いが見て取れたが、特に関係者との対話という点を大事にされているのだと説明を通じて感じられた。それは「加東市立東条学園小中学校」における、生徒が最も日当たりの良い場所を享受できるよう計画された建物配置や、「福井県のセロファンフィルム工場」でのプラントとのBIMを用いた調整の説明からも強く伺えた。対話においては誠実さを最も大切にされているというお話もあり、同じ意匠設計者として見習わなければならない大事な姿勢だと感じられた。

桜本氏からは、現場監督をされた「大阪関西万博のランドスケープ」についての説明があった。非常に分かりやすいプレゼンテーションと軽快なトークについつい聞き入ってしまった。私は普段は設計者として現場監督者と接する立場であるため、中々聞くことのできない現場ならではの悩みや苦労が伺え、とても興味深かった。タイミングもスケジュールもばらばらに交差する動線を52の他の施工業者と調整されたことや、埋め立て地での仮設計画など、想像を絶するような苦労が



あったことを感じられた。その中で、それら多くの苦勞を自動ドローンという最新技術に加え、関係者と対話を重ねることで乗り越えていったという点に、設計者としても大きく共感できた。

後半の交流会では、皆さん共通して「後輩との接し方」や「技術者としてのこの先の進み方」について悩みながら日々活動していることが伺え、私も大きくうなずきながら話を聞いていた。技術者としての専門性の議論の中で、最後に本田事業委員長が言われた仕事は「縁」である、という言葉は私自身思わずはっとさせられ、また非常に勇気づけられる言葉であった。

今回の交流会を通じて、改めて「対話」の重要性を考えさせられた。施主や設計者・施工者だけでなく、社内の上司や後輩、その他様々な関係者との対話の積み重ねで建築は出来上がっていく。あたりまえの話ではあるが、今回発表された皆さんはその対話を特に重視されているからこそ、それぞれの様々な障害を乗り越え、見事にプロジェクトを実現されている。AIの進歩や働き方の変化などにより、人と人のかかわり方も日々変化していつている。そういった状況の中でもコツコツと対話を重ねていくことが、建築や都市を作っていく大事な一歩になるのだと思う。

(小林敬政・大建設計)

粉川壮一郎(こがわ そういちろう) (株)安井建築設計事務所/設計・計画



交流会では昨年竣工した「Daigas Innovation Center」の作品紹介を中心に発表しました。基本計画からクライアントと共に「ありたい建築の姿」を模索し、イメージを「言語」化し実際の空間への「具現化」が実現できたプロジェクトです。その中で、社内プロジェクトチーム内での自身の役割の変化が起き始める入社10年目前後の世代で、立ち位置や後輩社員との関わり方などの悩みなどを議論でき、新たな視野も得ることができました。

同世代の設計者の考え方、特に構造や施工などの他分野の発表を聞き議論することは社内業務では決して得られない経験であり、大変有意義な時間となりました。これからは社外の方との繋がりを大切にし、自身の設計活動へ研鑽を積んでいきたいと思ひます。ありがとうございました。

武内大輝(たけうち だいき) (株)東畑建築事務所/構造



交流会では、自己紹介と自身の担当プロジェクトについて発表させていただきました。

担当プロジェクトは思い入れのある四万十市総合文化センター『しまんとびあ』について発表しました。

施設のシンボルとなる大ホールの形状は、市民ワークショップ、市との打合せ、設計者間の調整を繰り返しながら辿り着きました。特徴的な形状を実現させるために課題点を整理し、架構形式に落とし込めたことは、設計者として達成感のある経験となりました。交流会の中で意匠・構造・施工面での質問も多くいただき、当時の設計から現場の間の記憶を改めて整理できたいい機会になりました。

最後になりますが、交流会にお招きいただき、ありがとうございました。同年代の方たちと和やかな雰囲気での交流ができたこと、とても有意義な時間でした。たくさんの刺激をもらいながら、これからも設計者として精進していきたいと思ひます。

成瀬壮太(なるせ そうた) (株)大建設計/設計・計画



入社後10年間で取り組んだプロジェクト5件について発表させていただきました。これまで他事務所の同年代の方々とお会いする機会は少なく、皆様の取り組みをお聞きするのは大変興味深く、刺激的な交流会でした。

技術者として今後目指す姿を考える中で、一つの道を究めたスペシャリストか多様な対応力のあるゼネラリストか、我々の年代はターニングポイントに差し掛かっているのではないかと問いを投げかける発言をしました。同年代の皆様にも共通の悩みであったようですが、委員長様より「そこまで悩まずに、ご縁があった目の前の仕事を大切にすることが何よりも重要である」と言った心強い回答を頂き、少し気が楽になりました。

振り返るとこの10年間で建設業界を取り巻く環境や自身が取り組むプロジェクト、会社の雰囲気なども少しずつ変わってきている事に気づきました。次の10年も変化を恐れずに邁進して行きたいと思ひます。



右から本田事業委員長、岡崎委員、本田小委員長、片岡委員、粉川さん、武内さん、成瀬さん、桜本さん、井上委員、木全委員、小林委員

個人会員の皆さまへ

ご応募お待ちしております。招待券プレゼント！

応募フォームは協会ホームページの会員専用ページ内にあります。

応募期限は毎月20日、厳正に抽選して当選者を決定します。(初回申込者を優先いたします。)

① | ガウディ没後100年公式事業 2組 | NAKED meets ガウディ展

天才建築家“ガウディ”にネイキッドが迫る



本展は、ガウディ没後100年、そしてサグラダ・ファミリアのメインタワー「イエスの塔」完成予定を記念し、公式展覧会として開催される。自然の法則を学び、そこに潜む美と秩序を形にした建築家アントニ・ガウディ。彼の思想と革新性を、現代の視点から見つめ直し、今を生きる私たちがガウディのまなざしに触れ、自然とともに生きる智慧を感じながら、未来への歩みを見つめ直すきっかけとなる展覧会である。

ガウディ財団からの正式オファーを受け、ネイキッドは世界で初めて同財団と公式ライセンス契約を締結、その協働のもと、ガウディの手記や直筆の書簡、彼が使用した制作道具をはじめ、未公開の資料や模型、スケッチなど、学術的にも極めて貴重なコレクションを網羅的に展示する。これほど多くの財団所蔵資料が同時公開されるのは世界初である。さらに、筆跡心理学的分析による世界初の研究成果を通じて、彼の内面と創造思考を読み解く。

また、大人から子どもまで楽しめる参加型アートを通して、ガウディ建築の魅力に触れられる。来場者がサグラダ・ファミリアの一部を完成させていく体験では、“未完成”の象徴でもあるこの建築が、今も多くの人々の手で築かれ続けていることを実感できる。ガウディが見た自然との調和の世界を、手と感性で感じ取れる展示となっている。

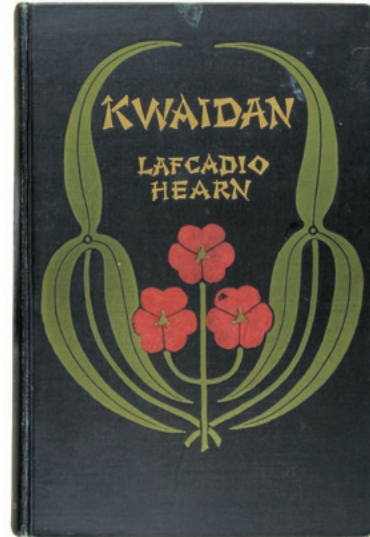
期 間 4月17日(金)～6月15日(月)
10:00～20:00 (土・日・祝日 9:30～19:30)
※6/5(金)、6/15(月)は10:00～18:00
※入場は閉館の60分前まで
観 覧 料 大 人 平日 2,700円 土日祝 2,900円
小中高 同 1,900円 同 2,100円

会 場 VS.
大阪市北区大深町6-86 グラングリーン大阪
うめきた公園 ノースパーク VS.
TEL.0570-200-888(キョードーインフォメーション)



② | 特別展「小泉八雲 2組 | 一怪談とフォークロリストのまなざし」

霊的なものには必ず一面の真理が現れている



『怪談』明治37年(1904) 松江市立中央図書館蔵

『怪談』に代表される幻想的な作品を生み出した作家、小泉八雲。彼は、日本を「小さな妖精の国」や「神々の国」と表現し、異邦人としてその文化を見つめ続けた。



神戸時代の小泉八雲
大阪歴史博物館保管

そんな八雲の作品には、怪異譚や民間信仰、自然観に基づくものが少なくない。それは、八雲がフォークロリスト(民俗学者)としての視点も持ち合わせていたためだ。

八雲は、日本人の目に見えないものへの祈りや自然を敬う心を感じとり、表現した。

本展は、八雲が、自身の目と耳をとおして触れた日本の民俗・文化の魅力やその豊かさを、数々の作品から読み解くものである。

期 間 4月11日(土)～6月8日(月)
9:30～17:00
※入館は閉館の30分前まで
休 館 日 火曜日 ※5/5(祝)は開館
観 覧 料 大人1,600円、高大生1,000円
*中学生以下は無料
*障がい者手帳持参の方(介護者1名含む)無料
*20名以上の団体料金 各200円引き

会 場 大阪歴史博物館 6階 特別展示室
大阪市中央区大手前4-1-32
TEL.大阪市総合コールセンター
06-4301-7285 (なにわコール)



#サグラダ・ファミリア#イエスの塔#NAKEDmeetsガウディ展

#ラフカディオ・ハーン#小泉八雲#再話文学#怪談#画本 妖魔詩話

会員IDやパスワードがご不明な場合は、日本建築協会総務課 (soumu@aaj.or.jp) までお問合せください。
招待券は当協会より郵送でお届けいたします。
当選発表は招待券の発送をもってかえさせていただきます。

information

③ 2組 特別展 北野天神

国宝《北野天神縁起絵巻（承久本）》全巻全場面公開！



国宝 北野天神縁起絵巻（承久本）京都・北野天満宮蔵
上/巻第1（部分）この場面は前期展示・中/巻第5（部分）
同 5月26日～31日展示・下/巻第6（部分）同 後期展示

	4/18	4/28	5/5	5/12	5/19	5/26	6/2	6/9
巻第1	第1段、第2段		第3段					
巻第2	第1段、第2段		第3段、第4段					
巻第3	第1段		第3段		第2段			
巻第4	第1段		第2段		第3段、第4段			
巻第5	第2段		第1段		第3段		第4段	第5段
巻第6	第1段、第2段		第3段、第4段					
巻第7	前半		後半					
巻第8			前半		後半			
巻第9	前半		後半					

本展では、菅原道真と北野天満宮ゆかりの文化財のうち、同社に伝わる古神宝を中心に展覧し、天神信仰の多様な側面と、それらが日本の文化史の中で果たしてきた重要な役割を紐解く。

上掲の国宝はじめ、重要文化財《北野天神縁起絵巻》の弘安本、光信本、光起本ほかを展示し、天神信仰誕生の場面に迫る。

期 間 4月18日(土)～6月14日(日)
前期：4/18～5/17 後期：5/19～6/14
9：00～17：30 ※金曜日は20：00まで
※入館は各閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日 ※5/4(月・祝)は開館

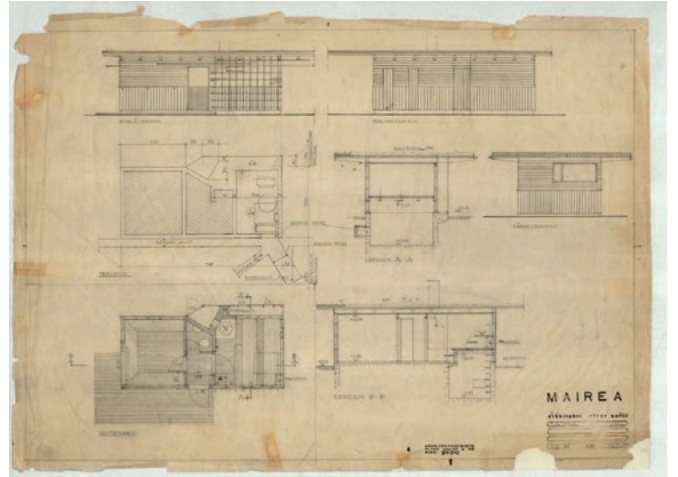
観 覧 料 一般2,000円、大学生1,400円、高校生900円
*中学生以下、障害者手帳提示の方とその介護者1名無料(要証明)
*大学生・高校生は学生証の提示が必要

会 場 京都国立博物館 平成知新館
京都市東山区茶屋町527
TEL.075-525-2473 (テレホンサービス)



④ 5組 特別展 フィンランド スピリット サウナ

—建築、デザインからサウナハットまで



サウナの平面・立面・断面図 作図＝アルヴァ・アアルト、1938、アルヴァ・アアルト財団蔵

2000年以上前のフィンランドで生まれたとされるサウナ。フィンランドではサウナに宿る精をもてなすとその家庭に繁栄がもたらされるという古くからの民話がいまも生き、家庭や公共施設にはサウナが備わっている。

人びとはそこで心身をリラックスさせ、互いにコミュニケーションを取る。

本展では、フィンランドの暮らしに深く根づいたサウナの歴史や文化を多角的にひも解き、豊かな暮らしの秘密を探ってみる。

※会場では、アルヴァ・アアルトが手掛けた《ムーラツァロの実験住宅》サウナ小屋を実寸模型で再現する。

期 間 6月28日(日)まで
10：00～17：00
※入場は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日、5/7(木)
※5/4(月・祝)は開館

観 覧 料 一般1,100円、大学生800円、
高校生・65才以上550円
*中学生以下無料
*原爆障害者章、身体障害者手帳ほか持参の方とその介添者は無料

会 場 広島市現代美術館
展示室B-2、B-3
広島市南区比治山公園1-1
TEL.082-264-1121



常任理事会

第7回常任理事会

2月25日(水) 17:30~19:30

協会会議室&WEB

出席者 指田会長ほか13名

- 議事 (1) 「建築と社会賞」の実施要項について
 (2) 「建築と社会を考える」の執筆者候補について
 (3) 「青年技術者表彰」の対象分野について
 (4) 「総会后講演会」の講演者について
 (5) 「理事の所掌」について

編集企画委員会

第11回編集企画委員会

2月5日(木) 18:00~19:20

協会会議室&WEB

出席者 三宗委員長ほか13名

- 議事 (1) 3月号 東海支部・状況報告
 (2) 4月号 各委員会・状況報告
 (3) 5月号 環境分科会・状況報告
 (4) 6月号 片岡安賞・状況報告
 (5) その他

第5回計画分科会

2月20日(金) 18:30~19:30

協会会議室&WEB

出席者 飯田幹事ほか2名

- 議事 (1) 4月号について
 (2) 今後の組織体制について
 (3) その他

第10回建築デザイン分科会

2月13日(金) 18:00~19:00

協会会議室&WEB

出席者 杉江幹事ほか4名

- 議事 (1) 4月号特集担当ページについて
 (2) 8月号特集について
 (3) その他

第7回空間デザイン分科会

2月3日(火) 18:00~19:20

WEB

出席者 黒柳幹事ほか4名

- 議事 (1) 4月号特集担当ページについて
 (2) 編集企画委員会出席について
 (3) その他

第10回環境分科会

2月4日(水) 18:00~19:00

WEB

出席者 橋本幹事ほか4名

- 議事 (1) 「設備の頁」の企画
 (2) 5月号特集号について
 (3) 4月号特集担当ページについて
 (4) その他

第11回施工材料分科会

2月19日(木) 16:00~17:00

協会会議室&WEB

出席者 藤丸幹事ほか5名

- 議事 (1) 編集企画委員会の報告
 (2) 4月号特集担当ページについて
 (3) 10月号特集について
 (4) 編集企画委員会出席について
 (5) その他

第11回法令分科会

2月3日(火) 16:00~16:50

協会会議室&WEB

出席者 河野幹事ほか6名

- 議事 (1) 2026年4月号について
 (2) 法令コーナー
 (3) 2026年度幹事の状況
 (4) 2026年9月号特集の準備について
 (5) 情報交換

第11回ひと・まち・建築小委員会

2月26日(木) 19:00~20:00

協会会議室&WEB

出席者 澤田小委員長ほか3名

- 議事 (1) 作品の選定
 (2) 作品の掲載状況、予定
 (3) gallery掲載報告、予定
 (4) その他

事業委員会

第11回CCCフォーラム

2月16日(月) 19:00~20:00

協会会議室&WEB

出席者 本田小委員長ほか5名

- 議事 (1) 第11回青年技術者交流会の実施報告と振り返り
 (2) 2026年度~2027年度体制の合意形成
 (3) CCCフォーラム ログデザインの検討
 (4) 第12回青年技術者交流会(2026年5月)に向けた準備
 (5) その他

出版委員会

第10回出版委員会

2月24日(火) 17:00~18:00

協会会議室&WEB

出席者 中尾委員長ほか7名

- 議事 (1) 既刊書籍経過報告
 (2) 制作進行中の書籍について
 (3) セミナー等について
 (4) 出版に関する座談会について
 (5) 新規出版企画について
 (6) その他

教育委員会

第5回史料研究会

2月6日(金) 18:00~19:00

協会会議室&WEB

出席者 橋寺委員長ほか8名

- 議事 (1) 連載「再読」について
 (2) 連載「先達に聞く」について
 (3) その他

未来創生プロジェクト

第9回建築次世代委員会

2月18日(水) 17:30~18:30

協会会議室&WEB

出席者 中村未来創生P委員長、菅原小委員長ほか8名

- 議事 (1) リアル見学会
 (2) 学生交流・広報企画
 (3) その他

第10回2040委員会

2月4日(水) 19:30~20:30

協会会議室&WEB

出席者 吉田リーダーほか5名

- 議事 (1) 活動報告の掲載について
 (2) 今後の活動について
 (3) その他

第10回U-35委員会

2月19日(木) 19:30~22:00

協会会議室&WEB

出席者 大屋リーダーほか13名

- 議事 (1) 新メンバー紹介
 (2) 今後の活動について
 (3) その他

講習会委員会

2月17日(火) 16:30~17:30

協会会議室

出席者 寺岡委員長ほか6名

- 議事 (1) 講習会の報告、振り返り
 (2) その他

講演会

会員の集いIN TOKYO

田原 幸夫氏講演会と会員交流懇親会

2月27日(金) 18:30~20:30

会場: Open Innovation Biotope "sea" (オカムラ ガーデンコートショールーム内)

講演: 田原 幸夫 (ヘリテイジ・デザイン・アソシエイツ代表)

参加者: 指田会長ほか43名

司会: 中原常任理事

内容: 「文化遺産の保存再生」をテーマにした田原 幸夫氏の講演と、東京圏で活動する会員や建築関係者のネットワーク作りを目的とした交流・懇親会

編集企画委員会 (2026年2月28日現在)

副会長(編集担当) (環境分科会)

川合 智明 大橋 巧

理事(編集担当) 北野 勝也

木場 将雄 齋藤 悠輔

佐藤 榮一 生野 大輔

中尾 勝悦 寺井 千佳

中原 岳夫 仲村 憲一

西 博康 △橋本 直樹

橋寺 知子 榊井 貴廣

松島 茂樹 松本 健

◎三宗 知之 持留 崇志

吉村 英祐 (施工材料分科会)

副委員長 今井 信之

桑原 悠樹 上原 秀介

古谷 隆祥 門野 陽

編集委員 河合 智寛

■特集小委員会 能瀬 直樹

〈計画分科会〉 △藤丸 啓一

△飯田 匡 森野 貴洋

田中 直人 森田 健

松田奈緒子 吉田 正友

山崎 晋一 (法令分科会)

吉村 英祐 奥山 陽二

〈建築デザイン分科会〉 日下部美嘉

△河野 学

小林 敬政 時見 正人

小林 啓明 吉田 悠起

篠木 大輔 ■ひとまち建築小委員会

△杉江 順哉 浅田 翔大

田中 和八 伊藤 翔

田中 裕大 上田 寛彬

樋口 展寛 太田 栄治

平岡 翔太 加嶋 章博

松本 和也 片岡 政規

米山 剛史 貴志 泰正

〈空間デザイン分科会〉 東 実千代

今井 充彦 ▲澤田 純一

河西 孝平 菅野 淳司

神田 健吾 豊田 充広

△黒柳 亮 西田 佳代

佐々木琉偉 平野 尉仁

清水 香澄 増田 敬彦

宗田 菜々 山本 和宏

〈構造分科会〉 (順不同)

古島 正博 ◎委員長

榊原 啓太 ▲小委員会委員長

△正野 和司 △幹事・小委員会

瀧野 敦夫 副委員長

多田 全希

萩原 学

水島 靖典

藪田 智裕

山下 真輝

山本 佳明

吉村 純哉

印刷 2026年3月25日

発行 2026年4月1日

発行人 一般社団法人日本建築協会

大阪市中央区大手前1-7-31

電話 06-6946-6981

印刷所 榊中島弘文堂印刷所

定価 1390円(税込)

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます

**お客様の抱える問題やニーズに
より速やかに、より丁寧に対応できるように**

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 **中島弘文堂印刷所**

本 社 〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL.06-6976-8761 / FAX.06-6976-8765

東京支社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1丁目4-2 風雲堂別館ビル2階
TEL.03-3526-5580 / FAX.03-3526-5582

<http://www.n-kobundo.co.jp/>

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理

株式会社 **日本電気化学工業所**

<http://nacl.jp> E-mail: sc@nacl.co.jp

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLビル2階

TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632

東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7

TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

年間広告のご案内

協会誌「建築と社会」では、後付部分に
広告スペースを設けております。
1年を通じて、社名広告を掲載されませんか？

掲載期間：4月号～翌年3月号までの1年間

掲載料：48,000円（消費税込み）

サイズ：1/12頁（タテ40mm×ヨコ90mm）

※毎月掲載誌をご送付します。

※原稿は1年間同じ原稿を使用します。

お問い合わせ先

一般社団法人 日本建築協会 中内・井筒

TEL : 06-6946-6981 FAX : 06-6946-6984 E-mail : koukoku@aj.or.jp

◆ 大林組

つくるを、
つくり変えろ。

MAKE
BEYOND
つくるを拓く